

# 東方水晶録

かいせいクリュウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校3年の終わりごろ、大学の進学も決まったこの小説の主人公

「東方 海星」（ひがしかた かいせい）は突然の事故にあい命を落としてしまう。

しかし、それは神のミスで特典をうけとり、東方の世界へ転生することになった！

これから待ち受ける物事とは……！

# 目次

始まり	1	豊姫依姫姉妹	57
古代		妖怪と人間 相容れず	64
セカンドライフ	9	満月	70
オーバーテクノロジー	16	満月の裏	74
ツクヨミ	20	今できること	81
鍛錬、底上げ	26	最古の最後の夜	86
実戦	30	人妖大戦争 決戦の火蓋	91
帰る場所と、再び森へ	35	百鬼夜行	100
妖怪	41	妖怪から産まれた妖怪	108
世の定理	48	月へ。	118
プレゼントと告白?	52	決断	122
		全てとのお別れ	131
		洩矢編	

230	太古からの目覚め	145
	洩矢の国	151
	平穩	158
	神さま?	164
	大和の国から	171
	和神との交渉	179
	特訓の神様	191
	決戦 『坤と?』	198
	敗北、信仰の譲渡と幸運を操りし少女	207
	宴会とお酒	214
	洩矢の新たな神	
	八坂神奈子	

	見回りと大根役者	241
	こころ操り	245
	あやつり人形	252
	生き恥	259
	守矢神社との別れ	269
	今の妖怪	279
	一人旅編	
	邂逅	289
	握手	296
	温泉ふぁいと	303
	鬼の四天王と古の	312
	鬼の協力と湯けむり鬼	325
	鬼の宴と天狗	337

結婚とは。	353
恋は盲目 鬼は全力	363
夢の現実と実現	372
閑話休題 鬼の1夜	381
妖怪の山の頂に	388
天狗という種族	395
文という天狗	399
『ある』勘違い	406
天魔との対面	413
天魔との交渉	419
逢い引きの駆け引き	427
白狼天狗の楯	436
天狗との鬼ごっこ	449

逆境の新能力	471
風の終着点	478
筆の終着点	494
絶望の連戦	508
全てを置き去りにして	522
決着の後に	545
誤解の婚約	556
妖怪の山の宴会	567
発明家の盟友との交流	582



# 始まり

ふと気づくと、まわりを見渡す限りの白に囲まれていた。

「……ん？……ここは……なんだ？……さっきまで学校にいたはずなのに。夢

か？」

考えても、思い当たる節はない。

今日もいつもと変わらずただ学校にきて、家に帰る。

それだけのはずだった。

自分でも何故かはわからないが、夢ではない。

それははつきりと理解できる。

「ん……全くわからん……」

??? 「あの……」

突如何もなかったはずの空間から透き通ったような美しい声が聞こえてきた。

!?!? 「だれですか？」

咄嗟に反応してしまう。

気づくと目の前には

白いシルクのような服を身につけている

同い年？かそれ以下と思える容姿の美しい女性が立っていた。

??? 「神…さま…です」

耳を疑った。

たしかに現実味がない現状、しかしもつと現実味がない台詞が聞こえてきたのだ。

「(信じ難いが…)なんでまた急に神様が？」

一応、敵意は感じられないので問いかけてみる。

神「ホントに申し訳ありません！手違いで殺してしまいました!!!」

あなたには、これから先長い人生があり、大学にいき、勉強し、恋愛をし、大切な人  
をみつけ、就職し、楽しくしあわせに生きていくはずでしたが…私のミスで…」

神さま？と名乗った女性は堰を切ったように自分の罪状を述べ、必死に許しを乞い  
てきた。



脳の処理が徐々に追いついてきて…悩むが、どうしようもない。

神さまが直々に来たということは

こればかりは自分がどれだけ喚いてもどうにもならないのであろう。

「…ええ…でもまあそれはそれで悔しいが仕方ない。それで、何故よばれたのです？」

あとこんなにも美しい女性が悲しんでいるのも可哀想なので許してあげることにした。

神「え、怒らないんですか？」

キョトンとした顔で聞いてくる。

神さまもこんなあつさりと許されるとは思ってたのだから。

「仕方ないと言ってるでしょう、それとも怒られたいんですか？」

冗談も混ぜて、ほんとに怒っていないことを再度伝える。

神「いえ!!とんでもない!それで、何故呼んだかと言うとですね、お詫びに、転生させる権利を与えたいと思ひまして…」

神さまは、嬉しそうに、そして申し訳なさそうにという不思議なテンションで話を進めていく。

「!!!」

この時、自分に衝撃が走った。

多くの小説やゲームで何度も見て、夢見た

『転生』

まさか自分がほんとに出来るなんて…。

神「なんでも、いろいろ小説などで読んでいたとかで…」

神さまはお見通しのようにだ。

「ああ、それならぜひ東方Projectの世界にいきたいな」

自分が転生するならどの世界に行きたいかなんて、もう何年も前から妄想で決まっていた。

神「はい！お安い御用です！東方の世界ならば、能力はどうしましょう??」

なんと…いま聞き間違いではなければ能力もくれると、そう言ったと思う。

「能力もくれるのか…：そうだな…：水晶…：水晶を操る程度の能力がいいな。欲を言うなら概念をも操れる水晶を。」

なんで水晶か？

水晶には混じり気のない正義。

そんな感じがしたのだ、その自分の信念を第2の人生で貫いてやる！

そんな気持ちの表れだ。

神「わかりました。あなたの人格は信用できるので、思い描いている能力をさずけま  
す。時代はどうしましょうか」

神さまからの評価は高いようだ。

日頃の行いはやはりいい方がいいな。

「強くなりたいし、古代がいいな」

やはり転生するならば強くなくてはな。

神「…わかりました…お気をつけて…最後の手続きです。貴方の名前は…？」

ほお…名前も決めれるのか…

今の名前も好きだが…新しい人生ということ

「そうだな…前世の名前から変えるか…」

「ジョジョ好きだし、東方とかいてひがしかた。幻想郷には海がないということなので、海の星とかいてかいせい。と名乗ろう。」

神「かしこまりました。では、『東方 海星様』本当にあなたには申し訳ないことをしました。それでここまでとなりますが…どうか…楽しんで！」

神さまは本当に申し訳なさそうに、そして第2の人生を今から歩む自分に向かって期待の目を向けながら背中押してくれた。

海星「ふふ、いいんだよ過ぎたことは。…いつてきます！」

そうして海星は光に包まれた……

海星「……うっ。」

頬に当たる風、木々の擦れる音

先程いた所では感じられなかった自然が突如飛び込んできて驚く。

海星「ここは……？……どうやら、うまく来れたみたいだな。」

周りは森のようで、現世ではみたことないような大きな木がたくさんある。

笑みが思わずこぼれる……

第2の夢にまで見た人生だ……

まじで能力なんて手に入れたのか……!? 最高すぎる……!

海星「まずは扱い方を覚えなきゃな……」

(地面から生えるようなイメージして……)

「ハッ！」      ザクザクザク!

光を勢いよく反射させ、透き通った美しい水晶が地面から突き出てきた。

海星 「おおおおおおお!!!でた!!!」

海星 「それじゃ！セカンドライフ楽しんでいきますか！」

これは

人と妖怪、神さまをも巻き込んで紡いでいく

水晶を操る男の物語である。

## 古代

## セカンドライフ

海星「さて！まずは自分を強化しなくちゃな…いきなり死んでもさすがに笑えないしな…」

1 人森の中で冗談を言う。

でも、冗談じゃすまないので早急に取り掛かることにした。

海星「神は水晶で概念を操ることも許してくれたんだよな…じゃあ…どーゆーことができるのかってことなんですけど」

そもそも概念とは。

事象に対して、抽象化・普遍化してとらえた、思考の基礎となる基本的な形態として、脳の機能によってとらえたもの

その定義は難しい、しかし自分で決めて良いとしたら…？

海星「手のひらにボールペンがないという概念を水晶に固めて…」

フォン

「透明な細い水晶が手のひらに出現する。  
それを

「砕く…ッ！」バキッ

海星「…するとー？お！イメージ通りのボールペンが！

なかなかチートかもしれないな…」

ないという概念を破壊することで、出現させる。

あるという概念を作り出すことで、出現させる。

この2つが可能なかもしれない。

まずは慣れるために服などを作り出した。

海星「ふうー、なんか疲れたか…？力が…ここでいう霊力か？も消費されるのか。」

息切れではなく、心の疲労感というか初めての感覚に包まれ困惑する。

これが霊力なのか？

海星「これも増やせるかな？」



「靈力に限界があるという概念を水晶にこめて…」

ピキピキ

拳ほどの赤い水晶が出現した。

海星「赤い…。」

「フツ！」…。

「おら!!」…。

(ん?…どんなに力を込めてもボールペンや服の時のように砕けない…)

(レベル不足ってやつか…?)

どうやらそんな簡単には増やすことは出来ないようだ。

人生そんな甘くない。

「努力ってあんまり好きじゃないんだよなあ…：…がんばるかあ…」

(あと多分だが…永琳とかと会うんだろうなあ、原作の知識は別に取っておこう…：原作の知識を水晶に固めて…つと)

…ガサガサ

心の中に水晶を作り出すイメージでしまい込んだ。

海星「ん？」

トツ。

狼「「ぐるるる」」

「どうやら木の上から様子を伺っていたらしい」

海星「前世ではこんな状況に陥ったら…死ぬしかなかったんだけどなあw」

余裕の表情で狼を見据える

そして手に力をこめて

イメージしてと…

「ハッ!!!」

…。

森に声がかだまして消えた。

水晶は…出ない。

海星「え!？」

海星「ハッ!!!おら!!」

…。

霊力使いすぎた!?!? そう思えば若干ふらふらする…? かも?

海星「あ、あはは、ピンチかも」

自信満々で、予想外の動きをした海星に警戒していた狼も。  
狼たち「「ガルル」」

闘争心むき出してもう、襲ってきそうである。

こーゆー時は…だ

逃げるんだよオーオー!!

踵を返して森の奥へと逃げようとするが…

ザッザッザッ!!

海星「囲まれるの早。」

肉食動物の脚力にかなう訳もなく…

海星「どうしたもんかなあ。さすがにやばい」

オーその時

??? 「まて！」

女性の声が響く。

ヒュン

キヤイン

1匹の狼が突然頭から血を流して倒れた

海星「矢だ…！」

ヒュン ヒュン

2匹は1匹を惜しみながらも矢を躲しその場をあとにした

??? 「大丈夫!!なんでこんなところに…見ない顔ね…服装も…」

海星（説明どうするか…記憶を無くした体でいくか）

海星「ああ、なんとか助かったよ…気がついてたらここにいてね…自分もなにがなんだか…とにかくほんとにありがとう。」

??? 「私は八意×、永琳でいいわ 名前はわかる？」

海星「永琳さんか…自分は東方 海星だよろしく。」

永琳「海星ね…とりあえず街にもどりましょう、目当ての薬草は既に拾ったし。」

海星「街なんてあるのか、それは楽しみだ」

永琳「ほんとに記憶が無いのね…困ったわね…きつとすぐにもどるわよ!知り合いもいるかもだしね!」

海星（だましてごめん。）

「そっくだな!ほんとに恩に着るよ」

## オーバーテクノロジー

森の中から歩くこと数十分：その間に永琳から永琳自身のことや、大まかにこの時代や、街のことをきいてみた。

聞いた内容としては

まず、永琳とは 意外にも街の偉い人らしい。自身で薬草を採りにきていたが使用人などがいるようで、街で永琳のことを知らぬ人はいないらしい：「あらゆる薬をつくる程度の能力」を持つているようだ。

ここらの人類はすべてその街とやりに住んでいるらしい。

なので永琳が海星を見つけた時に驚いたようだ。

その街はというと：森に囲まれているが、とんでもなく高い城壁と高度な技術によって、妖怪などから護られているらしい：（進撃の巨人みたいだな）

街の人々は妖怪などの穢れから遠ざかることにより、寿命という概念をも遠ざけていらしい。（そんなこと可能なのか？）

軽く聞いてみただけでその高度な技術が、海星がかつて生きていた時代の技術より遙かに進んでいることが想像できた。

永琳「さて、見えてきたわね！」

海星「いや…ナニコレ」

見上げると首が痛くなりそうなほど高い見たことのない金属でできた城壁がいきなり見えてきた

永琳「ふふふ、何当たり前のことに驚いているの？さ、行きましょ」

海星「お、おう…」

移動中

門番「お帰りなさいませ！永琳さま！ご無事で何より！……ハッ!?」

ガシヤン！突然槍を向けられる

海星「いや、まあそうなるか…でも永琳と今まで仲良く話してたじゃん…」

永琳「この人は森で出会いました…大丈夫よ、人間です」

永琳「ごめんなさいね、海星　我々人類は妖怪などの穢れを極端に嫌っているの、だから少々嚴重になつてるんだけど…私がいるから大丈夫よ」

海星「そうなのか…さつき言っていたやつだな？大丈夫だ、気にしないでくれ」

門番「永琳様。規定ですので、永琳様といえども、一応この方をスキャンさせてもら

います。」

どこからともなく小型偵察機みたいなのが現れてレーザーが身体を上下してきた。

ロボ『穢れ：なし。ニンゲン』

門番「失礼しました!!どうぞお通りください!」

海星「いいんだいいんだ仕事なのだから!おつかれさま!」

永琳「ふふ、じゃあ行くわよ、門番さんもお仕事がんばってね」

門番「ハッ!」

移動中

永琳「さて、どうしましょうかね…」

海星「そうだな…とりあえずは宿を探さなくてはな…」

永琳「そんなものないわよ」

海星「え?」

永琳「全人類ここにいるんですもの、旅人なんていないし、宿という概念はないわ。」

永琳「だから記憶がないあなたももしかしたら家を持つてるかもって思ったのだけれ

ども」

海星「…えっ? (いや、俺は自然発生だし、家は無い)」



海星「詰んだ…森に帰るか…」

永琳「ふふふ、安心しなさい。私が連れてきたんですもの！落ち着くまで私の家に住めばいいわ」

海星「え!?そ、それは…いいのか?」

永琳「いいのよ、部屋はいっぱいあるし、広いわよ?」

海星「違う違う!女性の家に見ず知らずの男なんて泊めるのは…」

永琳「あー…まあなんとかなるでしょ。」

海星（もうちよつと自分が魅力的だということを自覚してくれ）  
いまさらだが永琳はとんでもなく美人だ。

透き通ったような白い肌に人形のように整った顔…原作で知っていたといつても本物は予想以上に綺麗すぎた。

永琳「……。ほらいくわよ!」（声にでてるわよ…無自覚かしら…そもそも男の人とあんまり喋ったことない…落ち着いてみると結構私ピンチかも?）

海星「あ、ああ!ほんと助かるよ」(なんだ今の間は?聞こえてた?いやそんなことないな)

そうして永琳の家にむかうのであった

## ツクヨミ

2人は街の中心に近い永琳の家についた

永琳「ここよ、着いたわ」

海星「わーお…でかいな」

意外にも和風のつくりがのこりつつも洋風もとり入れているなんとも奇妙な感じがするが…それがこの時代の風土なのだろう。

実際、とても綺麗でいい家だ

永琳「さ！入って入って！」

海星「おじやましませ…！」

おおく部屋も割とあるな…リビングも程よい広さだ

永琳「こつちの部屋を自由に使ってちょうだい！」

海星「すてきだな。ありがとう!!」

海星「そういえば、使用人は？いると聞いていたが、今はいないのか？」

永琳「使用人がいるのは私が作業したり仕事をするところね、そこはまた街の中心に

ある建物だわ」

永琳「ここは完全に私の家ね！だからふた r：使用人はいないの!!」

永琳「1人じゃ広すぎるくらいと思つてたからちようどいいわ!」

海星「そうか、ならよかつた!あらためてこれからよろしく頼むよ、永琳」

永琳「ふふふ、こちらこそよろしくね、謎の人、海星!笑」

海星「ふふ、手厳しいな笑　これから自分をみつけていくさ」

永琳「それじゃ、街を少しみしてみようか」

海星「ああ、そうだな、なにか感じるものがあるかもしれない」

2人移動中：

外装はメカメカしさはあるものの、街の内部は割と普通だった。人々がのどかに暮らし、公園など自然もある。一言で言えばいい所だった。

しかし、現代ではみたことないような施設もたくさんあつた

海星「永琳、ここは?」

永琳「ここは軍隊の施設ね」

永琳「もし妖怪などが攻めてきたりした場合にすぐ対応できるように軍隊をおいてい  
るの」

海星「へえー、なるほどな」（戦争などには触れてこない人生だったからな…こーゆーのは初めてだ…、自分はわりと平和ボケしているのかもしれない。対応できるように気を引き締めておこう）

永琳「そういうえば、ツクヨミ様にあえば何かわかるかもしれないわ！まず合わせるべきだったわうつかりしてた」

海星「ツクヨミ様?？」

永琳「ええ、この街の創設者にして最高責任者、まあ言葉通りの神様ね」

海星「神…か…なるほどな。そう簡単にあえるのか??」

永琳「もちろん！ま、私だから…なんだけどね笑」

海星「さすがだな…（苦笑い）」

移動中

街の中心にきた。高層ビルのようになっているようだ

その何階建てなのかもわからないエレベーターであがっている

永琳の職場兼 ツクヨミ様のいる場所のようだ。（永琳やばいな、ここで仕事って

…どんだけ頭いいんだ…?）

フオン

着いたようだ、緊張してきた。そもそも自然発生のような俺にどう接してくるかわからないし、俺が転生してきたことを知っているのかもしれない…

永琳「ツクヨミ様。」

ツクヨミ「永琳か、入れ。」

(ツクヨミ様とは女性のようだ)

永琳「失礼しますツクヨミ様、今日森で薬草をとっていたところ、1人の人間と出会いました、見ない顔で、服装も我々と違う異質な感じ…安全が確認されているため、ツクヨミ様にぜひ会わせてみようかと…。なにか気づくことはありますか？」

ツクヨミ「ふむ…確かに…みたことのない服装だな…お前…名前は…？」

海星「お初目にかかります、東方、東方 海星と申します。」

ツクヨミ様も永琳に劣らずとんでもなく綺麗だ。薄紫色の長い髪で白を基調とした和風な服を着ており、この世を見透かすような鋭い青い目をしている。

ツクヨミ「海星か…そうだな、すまないが私はお前の過去をみる…」

しかし、能力を持っているな？」

永琳「え？そんなの??」

海星「永琳ごめんよ、隠してるつもりじゃなかったんだが。そうです。水晶を操る程度の能力をもっています」

フツ!…ジャキジャギ

水晶をだしてみせた

永琳「わあ…すごい」

ツクヨミ「海星とやら…記憶がなく、行く宛がないなら、お前を歓迎しよう、いまからお前も街の住民だ。」

海星「ありがとうございます、自分がこの街にできることがあれば力をだします」

ツクヨミ「ああ、たのんだぞ。近ごろは妖怪が怪しい動きをしていると情報がいっているからな。」

永琳「では、ツクヨミ様ありがとうございます、海星、帰るわよ」

海星「ああそうだな。ツクヨミ様、ありがとうございます!」

ツクヨミ様「また会うことになるだろう。ではな。」

そうして2人は家にかえるのであった。

ツクヨミ様（海星とやら…まだ荒削りだが強大な力を持つようになりそうだ。それが吉と出るか…。）

## 鍛錬、底上げ

海星「なあ、永琳」

永琳「なにかしら？」

海星「霊力とか能力のことよく知らないんだが、強くなるためにはどうすればいいんだらうか」

永琳「そうね：私も戦闘向けではないけれど：やっぱり常に使い続けて増やしていったり、実戦あるのみじゃないかしら？」

海星（戦闘向けではなくてあの強さか…？）

海星「そうだよなあ：このままでは、ちと強さが足りないかもしれない。修行とまではいかないが、能力などに慣れておきたいな。」

永琳「そういうことだったら、軍隊の訓練場をつかえばいいわ」

海星「いいのか??ぽつと出の俺が」

永琳「細かいことはいいの、話通しとくから使いなさいな」

海星「ありがとう。恩にきるよ」



## 訓練場

海星「ふむ…休日か？だれもないようだな、助かる」

海星「まず、霊力の底上げだな…すこし手間はかかるが色々試してみよう…なんかブワーって増えないかな」

水晶で霊力を極端に増やすこと…

概念を具現化できたってことは可能なんだろうが、如何せん経験がたりないのかな？  
少しづつ…増やしていこう…

まずはいまの半分を…

ハッ！                      ピキピキ

透き通った青白い水晶がでてきた

海星「おー、できた！これを…フツ！」

パキン

フオン

海星「お!!やったぞ！なんか身体を力が巡っている実感があつて楽しいな」

これを繰り返してと…

数十分後

ピキピキ、パキン、ピキピキパキン！

ピキピキパキン

海星「いや、かなり増えたぞこれ…これくらいにしておこう、扱いきれないとかシャレにならないしな。」

さて！これで水晶をつくれる回数もだいぶ増えたな！

海星「うーむ…前世では運動は得意ってほどでもなかったからなあ…今回こそ、運動できるように頑張ってみせるぞ…」

まず水晶に少し手助けしてもらおう…

海星（ん？頼りすぎじゃないかって??いいんだよそんなの…使えるもんは使うだろ？全てを利用するんだ）

海星「自身の身体をどう動かしたら、どうなるのかをわかりやすくする…まあ言うなれば運動神経、身体把握能力を高めよう…あと筋力も」

フツ…ピキピキ

黄色い水晶が2つでてきた

海星「ん？色が違うな。自分の身体をいじる時は黄色なのか？」  
パキン！

スウツ

海星「おー、わりと実感があるぞ。動きやすくなつたな」

軽く運動してみるか：

タツ…！ヒュン…ヒュン…クルツタンタン…ヒュン…！スタツ。

海星「いいね、前世でチャレンジもしたことなかったバク転とかも余裕でできるな」

海星「もう既に前世以上に楽しいぞ笑　　ワクワクが止まらないな」

# 実戦

## 訓練場

海星「ふう〜…実戦といえは昔、武術は習っていたな…でもそれがいきってくるのかどうか…結局戦ったことないしなあ…」

???「だれだ??」

ん??女の人の声がした。

???  
side

いつものように休日も稽古に励もうと訓練場に来てみると

見かけない顔がいた…不審者かもしれない…警戒して制圧しなくては

海星  
side

海星「ああ、すまないな、ちゃんと許可はt…」

ヒュツ…！先ほど入り口にいた人物が一瞬で間合いを詰めてきた

海星「…!？」

バツ！ ブオン

先ほど立っていたところに拳を振り抜いている女性がいた。

海星（あ、あぶなかつた、身体能力を高めてなかつたら死んでたぞ？ 漫画とかでしかみたことないやつだ…ほぼ見えなかつた反応するのが精いっぱいだ）

??? 「やはり…ただものでは無いな？ 制圧します。」

海星「ちよ、ちよって」

ビシュツ…シユツ…

危なすぎる…距離を取らなくては…

ついでに速いものを見れるように反応速度と眼を強化しよ…

なんとか躲しながら距離をとろうとするが

??? 「甘いぞ。」

ヒュン…ドカツ

海星「グツ…」ずぎざぎざぎ

いやいやいや、とつさに腕をクロスしガードしたけど殴られただけでこんなに飛ばされる!!

時間がねえ…できるかわからんが…

奥歯に身体強化と眼の強化の水晶を創り出し

『噛み砕いた』

??? 「小癩な…不審者め」

ガリッ

ヒュン…

再び襲ってきた謎の女性は消えたが…

目で追える。軌道が予測できる。

海星「くつく…思わぬところで実戦だな？」

ヒュン… ガッ…

??? 「なに？掴まれた？」

海星「イテテ…なあ不審者じゃないぞ？聞いてくれ永琳の許可はとってある」

??? 「永琳…？永琳様??」

説明中。

??? 「大変申し訳ないことをした。」

どうしたことだろう。先ほどまで嫌悪感MAXで殴りかかってきた美少女がすごい速さで土下座しはじめた。

海星「いやいや、大丈夫だよびっくりしたけど」（死ぬかと思ったけど。）  
???「永琳様の知人だったとは…ほんとにどう償っていいものか…ああ…」  
ガラガラ

急に訓練場の扉がひらく

永琳「海星。そろそろ帰りましょう！かなりの時間がたってるわ」

???「ヒツ…！永琳さ…ま」

永琳「あら、依姫じゃないの、どーしてそんな格好しているの？」

依姫？「…あわあわ」

海星「迎えに来てくれたんだね、ありがとう永琳。」

この子はここで稽古に付き合ってくれたんだ、おかげでだいぶ強くなれた気がするよ、この格好は…まあいろいろあつてね笑」

依姫「…へう？」

永琳「そうだったのね。依姫、ありがとう」

海星「そういえば、稽古に夢中で自己紹介がまだだったね、俺は東方 海星、海星つて呼んでくれ。君は…依姫ちゃん…？」

依姫「…はい！海星さんですね！私は綿月依姫といいます！よろしくお願いします。」

本当にすみませんでした…」

海星「ふふふ、なんのことだろうね。稽古に付き合ってくれてありがとね、さて、永琳帰ろうか」

永琳「そうね。じゃ、帰りましょ」

海星「またね、依姫ちゃん」

依姫「は、はい！また！永琳様もお疲れ様です！」  
スタスタ

依姫「海星さん…か…。庇ってくれた…」



## 帰る場所と、再び森へ

永琳「ただいま！」

海星「ふふ、おかえりなさい！そしてただいま！」

永琳「ふふふ、おかえりなさい！」

さて、ご飯にしましょうか！

そう言つて永琳はキッチンへと向かつていった

海星「なにか手伝うことはあるか？」

永琳「いえ、いいわ！そのへんでくつろいでてちょうだい」

海星「そうか、楽しみにしてるよ！」

ぐぬぬ、高校生だったので料理なぞしたことがない：

まあ、そのうち覚えるかな？

能力のトレーニングでもしておこう。

とはいえ、もうだいたい自由に水晶を扱いこなせれるようになった。

好きなところに好きな形で出現させられ、消失させられる。

わりと便利なのではないか？

あっちにあるテレビのリモコンを取りたい時も  
ほっ！つと

手の形をした水晶を作りだし持ってきた。

ふっふっふ…墮落人間になれそうだ。

テレビをつけてみると。

『凶悪、森の妖怪』という番組がやっていた。

途中からなので内容を察するに、たまに城壁を越えてきてしまいうらしい妖怪を退治するといった内容だった

ボロボロのクマの妖怪？映っている

妖怪「ぎやう…が、ぐ…」

軍人が銃で闘っている

妖怪「息子を…」

パァン！

…ドサツ。

ナレーター「凶悪な妖怪を退治しました！穢れはやはり悪！頑張つて遠ざけましょう

！」

永琳「ご飯できたわよー」

海星「ほーい！」

そうしてテレビの電源がついているという概念を水晶で具現化して砕いた。  
パリン。

海星「おおー、すごい！美味しそうだな！」

永琳「えへへ、人に作るのは初めてだったから不思議な感じ。」

永琳海星 「いただきまーす！」

海星「なあ、わりとテレビって過激な表現が多いのな」

永琳「そうなのよねえ、最近、重役になった人が、割と過激なの。妖怪を毛嫌いしすぎているというか……」

海星「まあ、そういうもんかあ……」

永琳「妖怪を一括りに悪いというのもねえ……」

海星「まあ難しい話だよなあ。」

海星「明日、森を見てみようかとおもう！修行の一環としてね」

永琳「わかったわ！気をつけてね」

永琳「じゃ！元気をつけるためにたくさんたべて！」

海星「ふふ、美味しいからついたくさん食べてしまうよ」

永琳「ふふふ、海星つたら…」

海星「あと今日の依姫ちゃん？だっけ、永琳のこと慕ってるみたいだったがどういう関係なんだ??」

永琳「あー！依姫ね、あのこはまあ親戚というか…まあ部下みたいところね！」

海星「ほー、なるほどね」

永琳「ていうか、あの子と闘って一般人のあなたがよく耐えたわね…最強クラスよ…？」

海星「そうだよなー、出会う前に強化しててほんと良かった。でもまだまだ強くなれそうだな。」

永琳「ふふ、頼もしいわね。修行がんばるのよ」

海星「ああ、みててくれよ、今度は君を護れるくらい強くなってみせるよ。」

永琳「…ふふふ…それは楽しみだわ」

海星「ああ！」（永琳つたまに間があくよな。ぼーつとしているのか？意外に呑気なのかもな）

さて、明日に向けて寝るぞ！

海星「今日も一日ありがとうな永琳、おやすみなさい」

永琳「ええ、おやすみなさい海星」

.....

永琳 side

最近出会ったこの海星という男。

成り行きで一緒に住むようになってしまったのだが  
心に悪い。

いや、特にこの男が悪いということではないのだが

なにかドキリとするものがある。

全くもって理解できない。

不思議な感じだ…

気がつくくと海星のことばかり考えてしまっている

いや、、仕方ないことだろう、気になるのは当たり前だ。  
落ち着こう。

永琳「おやすみなさい…海星…」ボソツ

## 妖怪

海星「じゃあ永琳、いってくるよ」

永琳「あ、まって！はい、お弁当！頑張つてね！行つてらっしゃい！」

海星「ん、ありがとう！うれしいな！いってきます」

昨日言っていたとおり森に行つてみようと思う。

最初に居た時よりかは確実に成長してるし、新たに気づくこともあるだろう。

移動中。

門番「はっ！海星様！この前ぶりですね。お気をつけて！」

海星「おー！覚えてくれていたのか！ありがとう！いってくるよ」

さて森に到着した。

少し開けたところに湖があった。

海星「うーむ、まわりにだれもないようだな。ここらで修行するか。」  
精神統一して、研ぎ澄ます。

水晶を精密につくり何がどこにあるのかを手に取るように分かるようにする…  
ピキピキ…ピキピキ…

ふう……目を開くと…

海星「おー、まだまだだけど様になってるな」

水晶でできた龍の彫刻ができていた

海星「如何せん、龍を知らないからなあ、リオレウスみたいになっちゃった…ワイバーン？ってやつか」

ま、細かいことはいいのだ

これを動かしたり…は…おー！できるな！

単純な指示に従うくらいは今のレベルでもできるようだ

その辺の草をハムハムさせている

成長するにしたがつて、もっと複雑な指示をできるようにしたいな。

さて、霊力も増やしていこう。



もつと自然界から力を貰えたら効率がいいのかな？

…イメージして…

吸力水晶…とても名付けようか

ハッ!!

ビキビキビキ…!!

紫色の水晶がでてきた。

アメジストか？これは…

我ながら美しいな

そう微笑ましくみていると。

スーーツ グシャグシャ……ビキビキビキ

なんと、周りの草木の生命力をすごい勢いで吸収しはじめた。

海星「お！おいおい!! まで!!」

海星「解!!」

パキン!

海星「うーむ、すごい威力だった…予想外だな」

でもその草木から霊力を吸収して増えた実感があるな。

危なすぎる。あまり使わないようにしよう…

海星「ふう…少し休憩するか。」

お弁当なんて久しぶりだな。うれしいな

海星（おいしい。ちゃんとお礼を言わないとな。）

海星「現代では見たことのない綺麗な花がたくさん咲いている…」  
お返しにお土産にしよう。

虹色の椿のような花が咲いていたので1つちぎった。

ピキピキ…

海星「水晶で琥珀のようにした。これで枯れることはないな。」  
きつと喜ぶぞ。我ながらセンスがあるな。

ガシヤンバキバキ!!!ドカーーン!!!

ホクホクしているのもつかの間。

先ほど作った籠、もといクリスタルリオレウスが木をなぎ倒しながら吹き飛ばされて  
いった

海星「なに?!?!」ザッ

戦闘態勢を慌ててとる。

???「なんだ? お前は。ニンゲンか?」

人型の角が生えた男がたっていた

海星「妖怪…? 喋れるのか…?」

妖怪「ふん…うるせーよ」ビュッ

海星「チッ…」ビュッ

突如お互いの姿が消える

ガッ! バキバキ…パシッ…ブオン

妖怪「おー、強いな」

海星「…まだ実戦に慣れてさすぎる…。」

妖怪「オラア!!」

ドーンッ

龍と同じように木に飛ばされる

海星「グッハッ…がふっ…」血が口からでた。息ができない

妖怪「トドメだ」

海星（ハッ!）

追い打ちをかけようとする妖怪むけて

海星のもたれかかっている木から大量の水晶が伸びる

妖怪「なにつ?!?! 避けきれな…」

ザクザク…、なんとか脚を攻撃できた。

海星「ふう…やはり便利だな。この能力」

妖怪「くそ…能力持ちか…油断した…」

海星「強かったな…これが人間と妖怪の差か…パワーが違うな」

スタスタ

妖怪「お、おい。殺さないのか? 情けをかけてるつもりなのか? 舐めやがって…人間は残酷なのだろう?」

海星「ん? いや、殺さないよ。俺からテリトリーにはいったようなものだ、すまなかつたな」

妖怪「はー? そんな人間いるのかよ…笑　くつくつく…知らなかった…」

海星「そうかい笑　おれも妖怪が言葉を話せるなんて知らなかったぞ」

妖怪「名前は? あるんだろ?」

海星「海星だ、東方　海星。お前は?」

妖怪「海星か…おれはな…『鬼』だ。」

海星「鬼か！あの鬼ね！」

鬼？「え？他に知っているのか？俺以外の鬼はあつたことないんだ」

海星「あー、いやー、知らない」（ん？こいつが世界で最初の鬼つてことか？）

鬼「なんだそれ、期待したじやないか。おれは、無から産まれたんだ。鬼という文字が頭に浮かんだだけなんだがな。」

海星「なるほどな…鬼か…どーりで力が強いわけだ。」

鬼「なんだお前。鬼を知らないのに知っているような口をきくなあ」

海星「いやいや、会ったことはないが、知識はある。角も生えてるし。お前は正真正銘の鬼だな」

鬼「なんだ、気になるな。闘いに負けてなんだが教えてくれないか？」

海星「おれもこの森や妖怪についてききたいことがある。」

## 世の定理

鬼と会話中

海星「なるほど。妖怪つてのは人々の恐れとかが集まって突然現れるのか。」

鬼「そーゆーことだな。さしずめ俺は『嘘をつくど角が生えた奴が襲ってくる』なんて話から出現したのかもなw」

海星「はははw他人事のようにはなすな笑」

鬼「くつくつw つてことはあれか鬼つて名前だどちとおかしいのか？」

海星「そうか？1番最初だからいいんじゃない？」

鬼「いやー、人間が人間つて名前だったら嫌だろ？」

海星「まあ、お前がそういうなら嫌なんだろうな。」

鬼「そう思えてしかたない。なにか名前を付けてくれないか？」

海星「おれ??そうだなあ：最初の鬼だもんな。」

うーむ、大きい身体に黄色い目：とんでもないパワーとスピード：

海星「雷鬼、らいきつてのはどうだ？雷のように強かったからなんだが…。どう？」

鬼「いいな。よし！今から俺は雷鬼だ！よろしくな海星。」

海星「ああ、よろしくな、雷鬼」

雷鬼「いやー、こないいい人間がいるなんて知らなかったよ」

海星「気になったんだが。妖怪からみた人間ってどんな感じなんだ？」

雷鬼「卑怯で、残虐な生き物だな。」

雷鬼「俺らから逃げるために高い壁を作った。それはまだいい。

そのくせ兵器の試し打ちやらなんやらで、気まぐれで妖怪を殺す。」

海星「なるほどな、でもそれは妖怪が攻めてきているからじゃないか？」

雷鬼「俺らのように知性があり話せるやつはそんなことしない。生まれてまもなくで、人の恐怖などがなくては生きられないやつが街に向かってしてしまうのだ。でもそいつも怖がらせただけで、人間を喰ったりはしない。ま、中には食う奴もいるんだろうかな」

海星「ふーむ、なるほどな　妖怪にも色んなやつがいると。雷鬼みたいに話がわか

る奴から、驚かしたいただけのやつ、人を食う奴もいるのか。」

雷鬼「そーゆーことだな。もつと人間と妖怪が理解しあえばもつと無駄な命を落とさなくてすむんだがな」

海星「ほお。共存？つてことか？」

雷鬼「ああ、そんな世界があればみたいねえ」

海星「くつくつくw 今こうして仲良くしてるじゃないか笑」

雷鬼「ハツハツハw 違いねえ」

海星「そろそろ日が暮れてきたか、そろそろ帰るよ。また一緒に闘ったりしよう」

雷鬼「おう！またいつでも会おう！この辺にいるよ。じゃあな」

海星帰宅中

海星「ただいまー！」

永琳「あら！おかえりなさい！待ってたわよ」

海星「ふふ、帰る場所があるっていいな笑」



永琳「……。お風呂湧いてるわよ！汚れてるじゃない！入ってらっしやい！」

海星「はいよ、ありがとう！」（傷は心配されるだろうから、水晶で消しといた。汚れは忘れてたな…）

## プレゼントと告白?

風呂はいつの時代も気持ちいいものだ

そうして服を脱いでいると：

コロン。

ん？

あ、お土産用意したんだった。忘れてないよ忘れてない。

ご飯の時あげよーつと!!

入浴後

海星 「おー、美味しそうだな！」

永琳 「ふふふ、そうでしょ？」

海星「きつといいお嫁さんになるぞ。」

永琳「……。(ガタツ) やばい、顔が赤いかもしれない。」

海星「さて！いただきます！」

永琳「…い、いただきます。」(やっぱり心が持たないわ)

もぐもぐ

海星「そうだ、そういけば妖怪と友達になったぞ」

永琳「えっ??大丈夫だったの？」

海星「ああ、言葉も話せる良い奴だった。戦えば友達ってやつだな」

永琳「ほんとわけわからないわよ…しっかり強くなってるわね」

海星「ふふふ、妖怪からみた世界についても詳しく聞けたし。色々有意義だった」

説明中

永琳「なるほど。妖怪にもタイプがあるのね…」

海星「あー、あとそれと」

永琳「なにになに?」

海星「あのー、お弁当のお礼というか、いつものお礼。」

コトン。

永琳「まあ…綺麗ね。素敵な花。」

海星「永琳、いつもありがとう。君に会えたから僕は今こうして生きている。ほんとうに、感謝してもしきれないよ。こうして家に泊めてくれたり…  
強くなつてみせる。だからこれからもよろしくね?」

永琳「…。(えっ?告白!?告白なのかしら???さつきお嫁さんがなんちゃらつて…ええええ!!?)」

永琳「…うれしいわ…あの…その返事は…」

海星「…?返事? ふふ、喜んでくれたみたいでよかったよ」

海星「お皿は片付けとくよ、作ってくれてありがとう!」

永琳「…プシュ」

永琳「もう、寝るわね…疲れちゃったみたい」

海星「大丈夫か？ ゆっくり休んで！」

永琳（誰のせいだと思ってるのよ…）

永琳「あ、そうだ。寝る前に。明日訓練場にいつてくれる？ 依姫が会いたいそうよ。」

海星「うん、わかったよ。おやすみなさい永琳」

永琳「おやすみなさい海星」

.....

永琳 side

ガチャ…バタン

ぼふっ

自室に戻り布団にダイブする

永琳「もう…なんなのよ…」

永琳「最近、狂いっぱなしだわ…」

永琳「部下やみんなから最近上の空な時が多いって言われたし…気づいたら海星のこ

と考えてしまっている…

これはまずいわね…なんとか気にしないようにしなきゃ…」

でも…この水晶…とつても綺麗。

さつき貰った水晶を手のひらで何度も転がす。

このあとしつかり海星の夢をみてしまい、また悩むのは別の話。

## 豊姫依姫姉妹

いつものように代わり映えのない1日。

という訳にも行かず、今日は訓練場に向かつて歩いていた

海星「ん？木の上に人がいるのか??」

??? 「ふんふふーん♪」もぐもぐ

海星「女の人が桃? かなにかを食べてるな。おてんば娘ってやつか」

にしても高いぞあれ。

??? 「ふー! よつと!」ぴよん

海星「え!? 間に合うか!」ひゅっ

ぽふっ

ぽふっ

??? 「んー? 受け止められた?」

海星「ふう、間に合った。あぶないじゃないか。」

??? 「受け止めてくれてありがとう! ま、自分で降りれたんだけどね!」

海星「そうだったか」

??? 「降ろしてくれるとさらに助かるんだけどね」

咄嗟だったためお姫様抱っこしたままになっていた

海星 「ああ、すまない、よっと」

??? 「ありがとう！受け止められられるなんて思ってた、あなたすごいわね。名前前は？私は綿月豊姫！」

海星 「俺は東方海星だ。 綿月…？依姫の家族か？」

豊姫 「あ！あなたが海星ね！依姫からいろいろきいてるよ。」

海星 「そうかそうか！それこそ今から依姫に会いに行くんだがな」

豊姫 「そうなの？面白そう！ついて行くわ。」ニヤリ

海星 「別に構わないが…」

移動中

訓練場についた

ガラガラ

海星 「おじやまするよ。」



依姫 「あ！海星さん…きてくれたんですね…！」

豊姫 「やつほー！依姫。」

依姫 「え!?!お姉様!?!どうしたんですか?？」

豊姫 「成り行きでね！気にしないでー」

海星 「成り行きだな。」

依姫 「そう…ですか。」

海星 「それで？今日呼ばれたのは…？」

依姫 「はい！強くなりたいと聞いていたので、せっかくなので一緒に訓練をしていてはどうかと！軍の訓練なので武器などまでいろいろありますよ！」

海星 「おー、それは確かに助かるな。武器の心得はないからな…」

訓練中

海星 「いろいろな武器があるが…結局シンプルにこれが使いやすいか？」日本刀のよ  
うな刀があった。

日本刀の形が馴染み深いのか、とても使いやすい気がする。

依姫「やつぱり、身体の動きと、技術をのみ込む速度がはやい…」

豊姫「依姫。ぷにゅ」

依姫「ひやう!? お姉様!? どうしたんです?」

豊姫「ふふ、あれが依姫が気になってるって男ね。面白いじゃない。」

依姫「気になってなんかいいです! そーゆー意味じゃないです!」

豊姫「ふーん? どうだかねー」ニヤリ

依姫「…。」(なんだかお姉様いつもよりもイキイキしている?)

海星「なかなか使いやすいな。水晶で創れるかな?」

ビキビキ

ヒュン! ビュツ…ピツ。

海星「おー! できたできた。場合よっては能力も乗せれそうだ。」

依姫・豊姫「「え!? 海星(さん)も能力もってるの(ですか)??!」」

海星「あー、言っただけ? そう、俺は水晶を操る程度の能力をもってる。」

海星「も? もってことは2人も能力をもってるのか?」

依姫「はい、私は神霊の依代となる程度の能力といえますか…」

豊姫「私は海と山を繋ぐ程度の能力よ。」

海星「2人ともスケールが大きいな。強そうだ。」

豊姫「ふっふっふ、だからお姫様抱っこなんていらなかったのよ？」

海星「ふふふ、それもそうだな。すまなかつた」

依姫「…：へ？…おひめさ…ま…抱っこ？」

豊姫「そうよ。海星がしてくれたの」

依姫「海星さん…ほんとですか？」

海星「まあ成り行き？ってやつでな」

依姫「…：。」 ゆらっ

姿が消えた

ヒュン！

海星「お、おい!？」

キンツ!!!

火花がちる

依姫「ぐぬぬ…海星さん？そんな人だとは…」

海星「おいおい、またなんか勘違いしてないか？」

依姫「問答無用!!」ヒュン！ヒュン!!

海星「くっ！これもまた訓練だなあ…」

豊姫「ふっふっふこれがみたかったのよねえ…」

すごい勢いで切りかかってくる。こちらも熱が入る

キンキンッ…キンッ…バキッ

海星「なっ…!?!」

水晶の刀が折れた。

豊姫「はいストープっ!」

豊姫が瞬時に依姫を組み伏せる

依姫「ハッ! ご、ごめんなさい！お怪我は？」

海星「いや？全くないよ。あとお姉様抱っこつていつても助けたときにたまたまだかなあ、下心はないよ。」

依姫「…。」プスプス

依姫 「またやってしまった。海星さんには大変なご迷惑を何度も…」

海星 「くつくつく…気にするな…毎回強くなれていいぞ笑」

依姫 「はう…」

豊姫 「ふふふ、依姫もまだまだ（いじりがあるわ）ね」

依姫 「お姉様？もしかしてわざと…」

豊姫 「さて、疲れたから帰るわ。またね、海星。楽しかったわまた会いましょ。」

海星 「ああ、またな。」

依姫 「おねえさまああ!!」

## 妖怪と人間 相容れず

あれから日にちが経っている  
相変わらずの生活

最初は、やはり警戒こそされていたものの。依姫や豊姫と仲良くしたり、永琳と買い物にいたりしている姿をみて安心したのか

街の人も最近になってやつと話しかけてくれるようになった。

お姉さん「あらあ、海星ちゃん！これ持っていきなさい！たくさんとれたのよ！」

海星「おー、さつきさん！わあ：素敵な野菜たちだ。ありがとう！嬉しいよ」

この街は穢れから遠ざけているためか、老いるという概念はない。

お兄さん「いつもみたいに魚買っていくなよ！まけとくよ！」

子供たち「きやつきや！海星兄ちゃんだ！遊ぼ!!」

~~~~~

訂正、好かれすぎたかもしれない。

時々軍にもいつている。武器などの知識をつけたり、のみこみが早いので、軍に教える立場にいつのまにかなっていた。

豊姫「教えたら？」

依姫「ああ！お姉様!!それはいいですね！」

海星「おいおい、ぽつと出のおれが……」

豊姫「いいのいいの！依姫もたくさん会えて嬉しいってよ」

依姫「はい！うれし……くないです！軍事力向上のためです！」

海星「うれしくないのか……？」意外にかなしいな。

依姫「うっ……。嘘です！嬉しいです!!たくさん会えて幸せです！」

豊姫「依姫、心の声まででてるわ。」

海星「そうか、よかった……。なら教えようかな！」

依姫「……。バタン」

こんなことがあった。

ま、教えると言っても組手とかだがな。

優しく教えるのが好評らしく、とても受け入れられている気がする。

みんな「依姫様はスバルタだからなあ……」

「豊姫様は感覚的だからわかりずらい時がたまーに……」

まあ言わんとすることはわからんでもない。

そして、ツクヨミ様からも1目置かれる存在になりつつあった頃。

再び呼び出された。

海星「ツクヨミ様。どうされました？」

ツクヨミ「ああ、最近よく君の名前を聞くようになってね。」

ツクヨミ「それと永琳から聞いたよ。妖怪と信頼関係を築けたと。」

海星「はい。1人だけですが、話せばわかるやつもいるようです。」

ツクヨミ「そうか……穢れなどはどうしてるんだ？」

海星「はい、能力で外部からの穢れを寄せ付けないようにしています。」

ツクヨミ「なるほど……なるほど……海星。見込んで頼みがあるんだが、引き続き外部の



情報をたまたま探ることはできるか？妖怪達の妙な動きが増えている。」

海星「わかりました。森にはよく行くのでその時気づくことがあれば。」

ツクヨミ「恩に着る。」

ツクヨミ「なあ。」

海星「はい？なんでしょう」

ツクヨミ「月に行こうと思っている。」

海星「え??」

ツクヨミ「秘密裏なんだが…ロケットを開発して、月に向けて飛び、完全に穢のない土地で住もうと思うのだ。」

海星「なるほど…。」

ツクヨミ「ロケットももうすぐできる。これだけは片隅に置いていてくれ。」

海星「…わかりました。」

.....

森にきている

海星「ふう、自然もやはり素敵だな。」

ひゅん

雷鬼「おれもそう思うぜ？」

海星「おー、雷鬼か。ちょうどお前に話がある」

雷鬼「…そうか。俺もお前に話がある。」

珍しいな、神妙な顔をしている。なにかあったのか？

海星「どうした？」

雷鬼「俺のように言葉を使える妖怪が指揮をとり、大量の妖怪がそつちに攻め込もうとしている。」

海星「…そうか。こつちも…人類は月に向けて飛ぶらしい。雷鬼、お前だから言っておく。」

雷鬼「そんな感じはしてたよ。妖怪は人間がいないと生きていけない。だからすごく嫌な予感がしていた。だから戦争を起こそうとしているんだな。今わかったよ。」

海星「…。」おれは…？どちらなんだ？？」

海星「…おれは。」

雷鬼「いいんだ。お前は。人間だろう？無理して俺らに合わすことは無い。護つてやれよ。」

海星「そうか…。そうだよな。共存したい、それもやはり叶わないのか？」

雷鬼「いつかはくるだろうな。なんなら、お前と俺で創ってみてもいい。みてみたいものだ」

海星「…そうだな。」

2人で見上げた夜空には満月になろうとしている月かなしく浮かんでいた。

## 満月

妖怪達が攻めてくる。俺が得た情報で街はパニックになっていた  
早いところロケットを完成させて、行かなければ。  
その焦りがみなをのみこむ

永琳「…ただいま。」

海星「おー！おかえり、帰りが最近遅くなったな。疲れただろう、ご飯できてるよ。」  
こーゆー時のためにご飯食べた。まだまだ上手くなるだろう

永琳「ありがとう…！うれしいわ」

永琳「とつても美味しい…！また上手くなったわね。」

海星「そうか？それはよかった。」

永琳「海星、月に行く話。詳細がきまったわ。」

海星「ほお。」

永琳「出発は次の新月。妖怪達は月の満ち欠けによって妖力が上がっているのではな  
いか、と言われているの、だから。完全に消える新月の時に発射することになったわ。」

海星「なるほど。新月はあとどれくらいなんだ？」

永琳「3日よ。」

海星「3日…はやいな。」

海星「なあ、永琳…。」

永琳「なあに？海星。」

海星「護るから。なにがあっても…お前を。」

永琳「…うん。ありがとう。」

永琳「ねえ…。」（これくらい、いいでしょう）

海星「なんだ？」

永琳「一緒に寝てくれないかしら？」

永琳「こつちの生活もあと3日だし。」

海星「…ああ、そうしようか。」

.....

永琳

（?!?!）

永琳（私つたらなんてことを!?!でも成功したし…まあ…いいかな。）

.....

永琳「はいる…わよ」

海星「ああ、おいで」

同じ布団にはいる。

永琳「ぎゅっしてもい…」

海星　ぎゅっ

永琳　（!?!　するつもりが、されてしまった）

永琳（ああ、でも暖かい。安心する…。）

永琳「…すうすう。」

海星「ふふ、疲れてたんだね。おやすみなさい。」

朝。

永琳（あうあう…いつも私が先に起きてるのがこんな所で裏目に出るとは…）

とてもホールドされている。

永琳「おきて…？」

海星「すうすう」

永琳（…）。可愛い寝顔。

永琳「ふふふ、もう少し見てようかしら。」

## 満月の裏

あと3日…か…。

はやいな。自分にできることを探してやるしかないな。

情報収集かなあ。

雷鬼にあいにいこう。

いつもの泉にくる。

雷鬼「よお。来る頃だと思ってたよ。」

海星「ふっ、そうかい。」

海星「あと3日…新月の日だ。」

雷鬼「!?なんだと??新月の日と聞いたか??

だめだ。その日に攻めてくるぞ。」

海星「何??新月の日は妖力が弱くなるんじゃないのか?」

雷鬼「なにを勘違いしている? 種族によっては最も強くなる日でもあるぞ。」



海星「…やばいな。」

雷鬼「…そちらの数は？」

海星「戦闘できるのは…千人くらいだ。」

雷鬼「……………」

海星「どうした？」

雷鬼「妖怪は全員戦闘員みたいなものだ、子供の時点ですでに即戦力。あれか

ら数を増やし続け、数は膨大に増えている。」

雷鬼「だがすまん、俺も妖怪側、協力しないとはいえ？数までは言えない。」

海星「いや、いいんだ。なるほど…そちらに分がありすぎるな。」

雷鬼「どうするつもりだ？」

海星「うん。多分おれが出ることになる。雷鬼、お前はその日来ないでくれ。俺からの願いだ。あそこに見える、岩の上に来てくれ。そこなら巻き込まれる心配はない。」

雷鬼「…。」

海星「たぶんもう日程は変えることができないだろう。ロケットもまだ完成してないみたいだし」

雷鬼「そうか…。お互い生きていればまた会えるさ。」

海星「ああ。そうだな。」

雷鬼「次会うときは、あの岩の上だ。」

海星「ああ、約束だ。」

街に帰り、急いでツクヨミ様の元へいく。

コンコン　海星です。

海星か…。ならない。入れ

ガチャ。

見知った顔が4人

ツクヨミ様の部屋に、永琳、豊姫、依姫がいた

ツクヨミ「どうした？」

海星「妖怪の件だが…」

説明中

永琳「!?」それはほんとなの!?

豊姫「うーん、それはまづいかな?」

依姫「なんてこと…。」

ツクヨミ「…。」

永琳「ツクヨミ様! 出発日をずらすことは出来ますか? 危険すぎます!」

ツクヨミ「いや、無理だ。ロケットの発射日はすでにセットされてその分のエネルギー充填速度になっている。」

ツクヨミ「あのバカ野郎のせいだな。一番大切なことを独断で進めやがった」

永琳「あの重役のおやじめ…。」

海星「まあまあ、焦っても仕方ない。」

海星「当日は戦える人を最低限残し、妖怪を足止めしつつ、戻り、速やかに発射するしかない」

ツクヨミ「そうだな。」

あとはもう準備するだけだ。

3人は部屋を出た。

依姫・豊姫 「ヒソヒソ」

豊姫 「依姫、はやくアタックしなさいよ！永琳様にとられちゃうわよ!？」

依姫 「だめです…そんなこと。」

豊姫 「だー、もう！私が盗るわよ!？」

依姫 「え？」

豊姫 「ふっふーん。」

豊姫・依姫 「ヒソヒソ」

豊姫 「ねえ、海星、軍のことで話があるんだけど。ちよつと時間いいかしらー?」

海星 「ああ、どうした?？」

永琳 「なら私には先にかえってご飯の準備してるわね!」

海星 「ありがとう」

豊姫 「つしや」

海星 「ん？」

豊姫 「ううん、それでね…たぶん海星は闘うんだよね?」

海星「ああ、そうなるだろう。」

豊姫「私も闘うことになるだろうけど、気をつけて…ね？」

海星「…まかせろ。豊姫もちゃんと護るよ。」

豊姫「…。」

豊姫「…懐かしいわね、前も助けてくれたもんね。」

海星「ああ、もう結構時間がたったな。」

豊姫「ホッ！」びよん

海星「おっ、よっと」ぽふっ

お姫様抱っこの形になった

依姫「……はわわ。」

豊姫「ふふふ、頼りにしてるわよ。」チュツ

首元にキスされた。

海星「なっ！」

豊姫「じゃ！またねー!!」タッタッタッ

…沈黙

依姫「…ひい。」

海星「豊姫もどうしたんだ急に…」

海星「軍の話はいいのかな…。」

依姫「か、海星しゃん…!」（うええ、囁んだ…。）

海星「ん?どした?」

依姫「ふっ!」（もうどうにでもなれ!）

チュッ

豊姫と反対側の首元にキスをされた

海星「な、!?お前まで…」

依姫「じゃ、じゃあ!気をつけてまた!!じゃあ!」タッタッタツ

走りながら壁にぶつかりながら消えていった

海星「…:…なんだ?どしたんだ…。」

## 今でできること

あと2日。人々は皆、焦らず　家財をまとめたり準備を着実にすすめている。

パニックになっていないのはツクヨミ様や永琳が頑張っているからだろう。

海星「よし、俺も今できることをやっておこう。」

森にはいる

いつもと変わらない。　いや、強いていえば『静かすぎる。』

妖怪が全くないのだ。

海星「雷鬼から聞いていなければ…まったくわからないな…。あちらに頭のキレるやつがいるのかも…。」

海星「所詮俺は人間、気を抜いてると死ぬ。概念で寿命を操るレベルにまだ達していない…。水晶化できても砕くことが出来ないのだ。」

海星「だから、『生きる。』なにがなんでも、生きてみせる。全員護って俺も生きる。そ

のためにおれは…。」

海星「はあっ!!!!!!」

ビキ…:…ビキビキビキ!!ビキビキビキ!!パキパキパキパキ!!!

街全体に地響きが響き渡る

街の人々「地震…?」「なんだなんだ??」

海星「足止めくらいには…なるかな?」

街の周囲100メートル範囲にわたり水晶の地雷を展開。

妖力を感知し、地中から飛び出す仕掛けになっている。

海星「うっ…:…目眩が…」

無尽蔵に霊力を増やしたといえこれはやばい。

どれくらいやばいかと言えば。「東京ドーム3個分」現代でいうとね?

海星「…はあ…:…はあ…:…あー…:…ふう…:…」



海星「これでよし。できることはしたな。」  
あとは戦闘に全力を出せるように1日かけて回復。

街にかえろう…そう思った時。

ふと知った妖力を感じ取った。

海星「どうした？雷鬼。」

.....

雷鬼 side

ずっと迷っていた。ずっと疑問に思っていた。ずっともがいていた。

俺はなんのために存在しているのか。

妖怪らしく思考が…もてない？

でもあいつに出会ってからだ。

海星。面白いやつだ。人の言葉を借りれば、退屈だった人生。俺の場合、人生と

い  
う  
の  
か  
は  
わ  
か  
ら  
ん  
が  
。

本  
当  
に  
光  
が  
刺  
し  
た  
。

し  
か  
し  
。お  
れ  
は  
妖  
怪  
。

あ  
と  
2  
日  
で  
戦  
争  
が  
お  
き  
る  
。

お  
れ  
は  
ど  
ち  
ら  
に  
つ  
く  
の  
か  
。ど  
ち  
ら  
に  
も  
つ  
か  
な  
い  
の  
か  
？

お  
れ  
は  
何  
者  
…。

.....

雷  
鬼  
「よ  
お  
…  
海  
星  
。」

あ  
の  
な  
。決  
め  
た  
よ  
。

雷  
鬼  
「お  
れ  
は  
、妖  
怪  
だ  
。戦  
争  
の  
日  
、お  
れ  
は  
…  
人  
類  
の  
敵  
だ  
。」

す  
ま  
な  
い  
、本  
当  
に  
。海  
星  
…。

海  
星  
「そ  
う  
か  
…。  
お  
前  
が  
決  
め  
た  
こ  
と  
な  
ら  
…  
仕  
方  
な  
い  
。

ま  
！俺  
と  
お  
前  
は  
友  
達  
。そ  
こ  
は  
変  
わ  
ら  
な  
い  
。」

雷  
鬼  
「あ  
あ  
…。  
そ  
う  
だ  
な  
…。  
じ  
ゃ  
あ  
な  
。」

雷  
鬼  
は  
去  
っ  
て  
い  
っ  
た  
。

海星…。こんな俺に対して…そんなことを言ってくれるのか…

雷鬼は海星の姿が見えなくなると、ひっそりと涙を流した。

雷鬼…。お前は…大切な友達だ。

海星も雷鬼が去った後、涙を流していた。

街にかえると、門に永琳がいた。

永琳「地響きがしたから心配になったの。」

海星「大丈夫だ。ありがとうな永琳。」

永琳「ええ、帰ってゆつくり寝ましよ。」

海星と永琳はお互い、何かを感じていた。

## 最古の最後の夜

明日、ついに地球上から人類はいなくなる。

新たな土地、月へと移住するのだ。

海星「それでも、寂しいよなあ…。」

永琳「どうしたの??」

海星「いや、この景色をもう観ることが出来なくなると思うとね…。」

永琳「そうね…。この景色すきよ。」

依姫「自然がいっぱいですものね…。」

いま、永琳、豊姫、依姫、海星で

街の城壁の上にいる。

豊姫「でも私は、月も綺麗ですきよ。」

海星「そうだな！ポジティブに考えるべきかもな」

永琳「そうよ、私たちが創って行くのだから！」

依姫「素敵な都市にしましょうね！自然もたくさん持つていきたいです」

豊姫「桃がほしい！」

海星「ふふふ、食い意地がすごいな笑」

豊姫「いいのいいの！人生やりたいこととしてなんぼよ！」

依姫「お姉様はもう少し周りのことを考えていただきたいです。」

豊姫「…いいの！」

永琳「ふふふ、地球に置いて行つちやうわよ？」

豊姫「そんな…永琳様あ」

依姫「ふっふっふ、観念するのです笑」

海星「ふふふ　　さて、明日はどうなるかわからない。

絶対に生きて全員で月にいくよ。」

永琳、豊姫、依姫「「そうね（うん！）（はい！）」」

夕陽が沈もうとしている。

永琳「綺麗ね…。」

海星「ああ…。」

妖怪はどれくらいの数がいるかわからない。

予想では多くても1000匹いると仮定して、軍が動いている。

しかし、狼のような単純な木っ端妖怪から

雷鬼のような、他の知性を持った大妖怪までいるだろう。

人が死ぬのは見たくない。身寄りのない俺を優しく受け入れてくれたみんなを…護りたい…。

依姫「まあ、海星さんの能力があれば余裕ですよね!!」

海星「そんなに期待してくれるな。まだおれも使いこなせているわけじゃない。」  
びきびき。

海星「今できるのはこれくらいかな。はい！依姫、豊姫。」

依姫「これは？」

豊姫「綺麗ね…。」

海星「おれからのプレゼントだ。ま、お守りみたいなもんだ。

受け取ってくれるか？」

海星「依姫には刀の鞘を。これは刀をしまう度に自分の霊力で刃こぼれが治る能力を付けた。」

依姫「わあ…。」

海星「豊姫には、扇子だ。ただの扇子ではない。込める力の強さによって吹き飛ばし

たり、場合によっては原子レベルまで分解できるような能力を付けといた。」

豊姫「…。美しいだけじゃないのね…。」

豊姫依姫「「ありがとう！(ぎいませす)」」

海星「ふふふ、喜んでくれたなら何よりだよ。」

海星「いままでのお礼だ。」

そして夕陽沈み、夜がやってきた。

依姫、豊姫「では、また明日ね。」「おやすみなさい！また明日です！」

永琳、海星「ええ、おやすみなさい」「ああ、またな。」

家に帰る。

永琳「ああ…月にいくとあなたも家を持ってしまふのね。」

海星「あー、そうか…。」

海星「なんだか、寂しいな。」

永琳「…。一緒に…。」ボソツ

海星「ん？何か言ったか？」

永琳「いや、なんでもないわ！」

海星「ぎゅっ」

永琳「びくっ……!海星……?」

海星「ふふふ、最後じゃないぞ?月に行っても一緒に住もう。」

永琳「……そうね、うれしい……。」

こうして最後の夜はゆっくりと街を飲み込んでいく。



# 人妖大戦争 決戦の火蓋

いつものように朝が来る。

小鳥がさえずり、森からは、そよ風が駆け抜ける。

永琳「おはよう、海星。」

海星「ああ、おはよう。」

永琳「ちゃんと今日は起きたわね。」

海星「ああ、こんな日だからな。」

永琳「こんな日だからこそ、朝ごはん出来てるわよ。いつもと変わらず。」

海星「ふふ、そうだな、いただくよ。いつも通りにな。」

海星「永琳の料理はほんとに美味しいな。素敵だよ。」

永琳「ふふ、お粗末さまでした！ありがとうございます。」

海星「…。」

永琳「…。」

海星「ついにだな。」

永琳「ええ…。」

海星「準備はしてきた。永琳もベストを尽くした。あとは…。生き残るだけだ。」

永琳「そうね。いきましよう。」

移動中

街の広場からロケットに乗れる。

依姫「非戦闘員の方！どんどん乗り込んでください！」

豊姫「あせらずゆっくりね〜！」

ツクヨミ「皆の者！これから、月面移住作戦を開始する！

軍のものは、広場の東の本部前にあつまれ!!」

海星「おれもいくか…」

ツクヨミ「さて！戦闘員諸君。成功の鍵はお前らの働きにかかっている！気を引き締めていけよ!!!」

軍隊「!!!!!!」

兵士「ツクヨミ様!!!!!! レーダー反応あり!!!! 妖怪が来ています!!」

ツクヨミ「なに?!?! 夜に攻めてくるのではないのか!」

兵士「レーダー反応増えています!!!! その数！現段階でおよそ2000!」

ツクヨミ「ふむ、こちらと数は同じか…。意外だな。」

海星「ツクヨミ様。現場の指揮は俺にやらせてくれ。」

ツクヨミ様は早く、発射準備を。」

ツクヨミ「地形を把握しているのはお前が1番。元からそのつもりだ。指揮は海星！海星にまかせる!!」

兵士「海星さんか…！頼もしい。」

ツクヨミ「あとは頼んだぞ。私はロケットの方に行く。昨日妙な動きを見せるやつがいた。おまえも気をつけろ」ボソツ

海星「なに？こんな人類の存続がかかっているときに、そんなことをする奴がいるとは思えないが…。わかった。」

海星「さて!!指揮を執ることになった東方 海星だ！」

海星「おれが上に立つにあたって!! 1つ約束する!!」

軍隊「…。」

海星 スウツ…「絶対的な勝利だ!!!!!!お前ら全員!!!生きて月に行くぞ!!!!!!」

軍隊「……………うおおおおおおおおお!!!!!!」

依姫「海星さん…すごい。」

豊姫「大したカリスマ性ねえ…。」

海星「よし！作戦を説明する！」

海星「おれが事前に妖怪に反応して起動する罠を街の外周ぐるっと設置しておいた！」

海星「そこから抜け出せる道はひとつ!!街の入口の正面だ！」

海星「腕に自信があるやつは前に!!自身がねーやつは無理せず後ろから援護射撃をしろ!!」

んで、食い止めながらロケット出発準備出来次第、乗り込め!!」

軍隊「はい!!」

海星「よっしゃ!!街の入口に移動しろ!!!」

永琳「海星。私は発射準備をしなきゃいけないの…どうか…気をつけて。」

海星「永琳!!会えてよかった。ああ…まかせろ…!」

移動中

海星「よっしや！移動中に話した通りだ!!

展開しろ!!!」

軍隊「はっ!」

リーダー持ち「妖怪です!!!すごいスピードで来ます!!その数800!」

海星「ん?増えたな:あちらも統率がしつかり取れている:読めない:侮れないかもな:~!」

???「:行けよ。」

その次の瞬間。森の木々のあいだから狼や、鹿、蛇などといったさまざまは動

物型の妖怪が飛び出してきた。

妖怪「ガールルルル!ガアアアア!!!」



ズズズ……。

爆音と揺れは30秒程で納まった。

兵士「……地獄か……ここは……。」

兵士「……だが……美しいと感じる自分がある。

怖い……。」ペタン……。

みんな座り込んでしまった。

そんな兵士たちのあたりを覆うのは。

見渡す限りの『妖怪だったもの。』

そして、神々しくどす黒い赤を反射する水晶。

先程まで木々に囲まれていたはずの場所が高さ5mほどの水晶の森へと変わっていった。

依姫「……。海星さん……ここまでとは……。」

豊姫「……。人なの……？ほんとに……。」



海星「ふうー…。まあ上出来。誘発させられた気が否めないが…。」

海星「よし！みんな無事か?!?先手はとった!!後は作戦通りいくぞ!!」

軍隊「…。よっしやああああ」

???「…。」

## 百鬼夜行

風の音しか聞こえない。

みんな緊張が張り詰めているが、妖怪の気配がしないのだ。

兵士「なんだ…？海星さんのがすごすぎて全部倒したのか？」

兵士「かもしれない…。」

兵士「だよな！すごかったもんな！」

兵士たち「「おおおおお!! やったああ!!!」」

海星「…。」

依姫「お姉様…？」

豊姫「まだね。」

???「ああ。まだだな。」

刀を振りかざした『何か』がいた。

依姫・豊姫「?!？」

海星「依姫え!!!!」

ひゅッ

ガキーン!!

甲高い音が鳴り響く。

依姫「……!海星さん!」

キシツ……ガチャ……

鏝迫り合いになっている、反応が遅れていたら確実に依姫は切られていただろう。

海星「お前が……親玉つてところか?」

ガチ……ギギ……

???「まあ……そういうことになるな。ああ……自己紹介つてやつが遅れたな……すまない、なんせ妖怪なもんね……。先に名乗るんだっけ?人間の文化では……。」

海星「……。フツ!」ギギ……キシツ……

キン!!

ずぎぎぎ……。

強引に鏝迫り合いを跳ね返し

お互い離れる。

???「おーおー、そうカッカすんなよ。俺の名前は……ぬらりひよん。そう名乗ってる……。

おれは妖怪が人を憎む余りに産まれた妖怪。妖怪が創り出したつてところがみそつてところだな。」

???「人類つてさあ……月に……行くんだろ?そしたらさあ……。」

『殺せなくなっちゃうじゃん??』

ゾクッ!

兵士「レーダー反応あり!!! その数!!!」ドガン…バリバリ!

レーダーが壊れた。

兵士「20万以上です…!」

海星「全員!!! 撤退!!! 俺ができる限り止める!! 引きながら闘えええええ!!!」

ぬらりひよん「ぎやはははははwwwwww」

ぬらりひよん「いいねえ、その焦った顔。それが見たくてさああ。わざと最初は小出しにした甲斐があったって。結局お前らは…俺の百鬼夜行に勝てないんだよおおお!!」

妖怪「ぐにやあはああああ

ガルルルル…!

ぐぎやああああ!

遠くから火の馬車や、狼、空を飛ぶ馬…巨人や虫がすごい量攻めてきているのが見え

る…。

海星「依姫！豊姫！！援護してくれ！！」

海星（ちつ…大将をとればなんとかなる…か？）

依姫・豊姫「はい！（了解〜！）」

ぬらりひよん「おつ、いいねえ…！まだ諦めてない感じ？

くつくつくwww」

ぬらりひよん「…来なよ。」

海星「疾ッ！」

ガキン！ガキッ！！キンツ！キンツ！

軽く受けられる。

依姫「はあっ！！」

ブンっ！ ヒュン！

依姫の最高速度で放たれた死角からの一撃も躲される。

ぬらりひよん「おー、惜しい惜しいw」

ガン！

依姫「きやつ！」ドガン

岩に叩きつけられる

海星「くそ！依姫!!」ひゅっ

キン！キン！ギギギ！

再び鏢迫り合いに持ち込む。

ぬらりひよん「まずね、人間の腕力で鏢迫り合い？さつきも手加減してたんだよ。ムズいんだからさ…壊しちゃうかもよ？」

海星「うるせえよ。」ピキピキピキピキ！

びゅっ!!

刀の腹から水晶を伸ばす。

ぬらりひよん「おおっと！やるねえ…。喰らうところだったと！」

ガシヤン！海星もカウンターを喰らってしまっ！

海星「ぐうっ…がはっ…」

海星（強いな…。だが人間を下に見ているのか？隙がありすぎる…そこをつけば勝てるな。）

海星「依姫!!豊姫へプレゼントだ!!」

依姫「…。」くっ

どうやらわかってくれたようだ

海星（よーし、あとは誘導するだけで！）

海星・依姫「はあっ！」ヒュンヒュンヒュンヒュン!! 高速で切り続ける。  
ぬらりひよん「はっほっよっ！」ヒュンヒュンヒュンヒュン!

海星「おらっ！」大振りの一撃

加えて…!

海星「ハッ！」ピキピキピキピキ!

水晶の壁が出現し、ぬらりひよんの背後を塞ぐ

ぬらりひよん「んへへ、当たらないよ。」ひよいつ

上に飛ぶ。

豊姫「海星はよんでたわよ、おりゃあああ！」びゆん!

扇子での一撃っ! この能力は俺らしか知らないはず!

塵になれ!

バヒュ!!!

海星・豊姫・依姫「?!?!?!」

ぬらりひよん「…んっんー？その悔しがる顔を見るに…。起死回生の挽回の希望の一撃ってやつだったのかな？w」

(なぜ喰らわない!?!万物は塵なるはず!)

ぬらりひよん「さて、次は…僕の番。」

豊姫にすごいスピードで襲いかかる。

豊姫「ひっ！」

ドツ……。豊姫が吹き飛ばされた…。『反対方向に』

ぬらりひよん「んー？」

??? 「すいません…邪魔をする形になってしまいましたか？」

海星「くっ……。」



雷鬼だった。

## 妖怪から産まれた妖怪

雷鬼が水晶の森を抜けて突貫してきた。

豊姫は街の方に飛ばされて行った…、大丈夫だろうか。

ぬらりひよん「おー、いつぞやの鬼か。さすがに強いなあ！いいのいいの！一緒に人類倒そうぜえ…！」

雷鬼「はい。」ひゅっ

依姫（なっ、速っ）

バギイ！

依姫「ぐっうう…！」

海星「くっ…」（やはり雷鬼は妖怪の味方か…）

とりあえず親玉のぬらりひよんを倒すしかねえ！

海星「ウオアアア!!」ドンッ！

霊力をフルブーストで放出する

ぬらりひよん「おー、ただの人間か？すごいな…大気が揺れているよ…。でも僕を倒

せはしないだろうなあ…」

海星「いくぞ。」ダッ!

水晶を足場にして最高速度で駆け抜ける。

ぬらりひよん「!?」

ひゅっ!

ガキン!!!

ぬらりひよん「おー、あぶねえ：なかなか速いね。」

海星「凌ぎきつてみなよ、俺の本気をよお：。」

スウツ：

はあああっ!!!

ピキピキピキピキ!

フォン：ヒュンヒュンヒュンヒュン

海星の周りに10個の水晶玉が浮かぶ。

海星「水晶乱舞：ッ！」

ブウン：　　海星の姿は一瞬のうちに消えた

ぬらりひよん「！　そこ!!」

ガキン!! 刀同士拮抗する。

海星「ふんっ！」ピキピキピキピキ

水晶玉の1つから、棘か伸びる!

ぬらりひよん「ちっ…!」

避けた先にも5個の水晶玉が。

ピキピキピキピキ…!

ぬらりひよん「くっ! おらあ!」

バキッ! 水晶を砕きながら回避していく。

海星「その避け方。やばいんじゃないのか?」

はあっ!!

ピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキ!

大気が振動する。

ぬらりひよん「ま、まさか!! この破片一つ一つが?!」

海星「ご名答…。おせーけどな。喰らえ! 名付けて…大晶激つてところか? 笑」

ザクザクザクザクザクザクザクザクザク!!

ぬらりひよんの身体を水晶が四方八方から襲いかかる!!

ぬらりひよん「ぐああああああああ!!」

ぬらりひよん「とかいつてみたりしてw」

海星「なに?!?!」（無傷?!有り得ない…扇子の時と言いおかしいぞ…。）

ぬらりひよん「そう悲しむなよ…。ネタばらしといこうか…

君は『水晶を操る程度の能力』?ってところか。

俺はな??くつくつく W 『人間の恐怖を実現させる程度の能力だ。』

海星「…。」

ぬらりひよん「おつ、立派な脳みそで考えてるのか？

単純な話よ、お前：さつき攻撃する前に。『これで倒れなかったらどうしよう。』とか思ってたんだろ？そーゆー事だ。」

海星「…厄介だな。まったく…。」

ぬらりひよん「自分はそんなに強くはない。

能力が逸脱している…。」

人間は不安になり、恐怖する生き物だ。

むしろ慎重になりすぎたのが仇となったか…。」

ぬらりひよん「さて、鬼。2人いれば勝てる。こいつを殺して妖怪が支配する世界を共に作ろうではないか。」

雷鬼「はい。ぬらりひよん様」

ぬらりひよん「攻守交替だ…！いくぞ！」ピュツ、ピュツ

海星「くうつつつつ！」

ガキン！

ぬらりひよんと雷鬼　　大妖怪2人を捌くのは至難の技だ…！

こつちは1人でも…！水晶をうまく使えばっ！

ピキピキピキピキ！

ギヤアアアアガア！

ラオシャンロンの様な龍を創り出した。

雷鬼…龍も進化させてあるぜ。

ぬらりひよん「そらそら！」

海星「ふうツ!!」ガキン！キンキン!!

刀の扱いでは負けてない！

雷鬼「雷鳴一步圧殺!!」ドゴツツ!!ズンン…！

バキバキ！グゴヤアガアアアギヤアア…。

…パリン!!

龍は一撃で倒された。

雷鬼「はあっ！」

海星「おまえも強くなったな…。」ドゴツ

海星は岩盤に飛ばされて行った。

海星「ぐうう…。ん？おかしいぞ。」

まったくダメージが無いのだ。まるで弾き飛ばされただけかのよう。

あの龍を一撃で破壊しといてこの威力…？

???'「海星さん！」

海星「依姫！豊姫！無事だったのか！」

豊姫「ええ、思ったよりあの鬼からのダメージが少なくてね…不意打ちで殺されたか

と思ったのだけど…。」

依姫「私も…。押されたくらいのダメージです。飛距離はかなり飛びましたけど…

！」

海星「どういうことだ…？」

ハラリ。

1枚の紙切れが帯のあいだから出てきた。

海星「…！」

とにかく、戻るか！



ビュツ!

ぬらりひよん「さすがは鬼だ。強い強い。無事に殺せちやったねー!」

雷鬼「お褒めに預かり光栄です。」

ぬらりひよん「忠誠もあるようだし…。いいだろう、鬼よ。第1の子分にしてやるよお…。」

雷鬼「くつくつく…!鬼が子分だあ??俺はな、起源にして頂点!!雷鬼様だ!!!必要なのは相棒だぜ!!!なあ!!!そうだろ???」

海星「ふん…!そーゆーことにしといてやるよ。助かったぜ相棒。」

雷鬼・海星 『『終わりだアアア!!!』』  
ぬらりひよん 「なにいいいいいい!!」

ズンツツツ!!! ドガツーーンンン!

2人の拳に貫かれ

ぬらりひよんは大量の血を流し立ち尽くす。

雷鬼 「人間の恐怖ねえ…悪いがおれは妖怪だ。殺せるよ。」

ぬらりひよん 「ガフツ…。クソつ…なんで妖怪のお前が…理解出来ん…なんの意味が?!? ゼエハア…愚かな…。人間なんぞに…!」

雷鬼 「ふん…俺は人間と生きたほうが楽しい。そう思ったからだ。己の運命に違う道を見い出せなかったお前の方が愚かだぜ。」

雷鬼「じゃあな。」  
ザシユツ！

月へ。

ぬらりひよんの亡骸を横に

雷鬼と海星は倒れ込む。

海星・雷鬼 「ぐっ……。」「ゼゼゼエ…

海星・雷鬼 「くっくっくっ…w」

海星・雷鬼 「やったな!!雷鬼! (海星)」

豊姫 「すごいわ…!あんな化け物倒しちゃうなんて…。」

依姫 「海星さんも強かったけど…あの鬼の方も…強いです…。」

海星 「ありがとう、雷鬼!ほんとにありがとう!!お前のおかげで倒せたよ…。」

雷鬼 「ああ…。良いんだよ…これだな。」

雷鬼 「でもよお…騙して倒すつてのは気分がいいもんじゃねえな。

きめた!!!俺は…鬼は!!嘘をつかねえ!!一生の誓いだ!」

海星「ふっふっふ、お前らしいよ笑」

軍隊「「うおおおおお!!海星さんがやってくれたぞ!!」」

兵士「ぐすん…ほんとよかったです…。死ぬかと…思った…」

ジジっ…!

電子音の後、ツクヨミ様のホログラムが出現した。

ツクヨミ「ロケット発射準備…完了。戦闘員ご苦労であった。すぐさま乗り込むように。」

兵士「ツクヨミ様だ!」

兵士「これで月に行ける!」

海星「よし!!総員!ロケット」ゴゴゴゴゴ

依姫「何この地響きは…ロケット??」

豊姫「…。いえ、森の…ほうね。」

みんな一斉に森の方を振り返った。  
そこには……

……………

妖怪「ぬらりひよんが死んだ!!!」

妖怪「どうする???'」

妖怪「ワカンネエ! トリアエズニンゲン!!」

妖怪「ぎぎぎぎぎぎ……」

「ニヤギヤアアア!!!」

妖怪「オソエ!! クエ!! コロセエエエエエ!!!」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!!

妖怪の軍団は総大将のぬらりひよんを失って統率がとれなくなっていた。  
それが仇となり、なだれのように街にむかってきている

兵士「うわあ……山が……妖怪で……真っ黒だ……。おしまいだアアア!」

兵士「にげ…なきや…。」カシヤン。

兵士の士気ももうゼロだ。武器をみな捨ててしまっている。

海星「落ち着け!!!ここは俺が食い止める!!やる気があるやつは食い止める!!!他は口ケツトにいそげええええ!!!」

兵士たち「「海星さん…!」「」」

「かたじけない!!」「ありがとう!ありがとう!ございますううう」  
みんな口ケツトの方に向かっていった。

残ったのは兵士数人と依姫、豊姫、海星、雷鬼だけだった。

海星「さーて。残った俺らで食い止めますかあ…!」

みんな「「おう!（はい!）」」

## 決断

グルルル…ガウ!!!

依姫「はあっ！」

ザシユツザシユツ

ギヤツ!くうん…ドサツ。

狼の妖怪を難なく倒していく依姫。

豊姫「依姫、やるじゃない。」

ギヤアアアア!!

豊姫「ふっ!!」びゅおッ

ギヤアア…スウ…ツ。

ムカデの妖怪は自分が殺されたことも理解出来きずに消えていった。



依姫「お姉様こそ！」

兵士たち「うおおお!!」ババババ!!

木っ端妖怪「グギャアア!!」

残った兵士たちも銃で応戦する。

雷鬼「…すうつ。オラアアア!!」ドゴツバキバキ!

妖怪「ヒッ…」

ズズン…。グシャ。

海星「はあっ!」ピュンピュン!

グサグサグサ!

妖怪「ギャアア…」。ドサツ

豊姫「…まずいわね。キリがない…。こちらの霊力が持たないッ!!」

依姫「お、お姉様!!ど、どうしましょう!」

兵士「鎧の妖怪?!?た、弾が効かなくなってきたぞ!!」

雷鬼「中級妖怪つてところか…。」

海星「…。」

妖怪は群れを成してこちらにまっすぐ向かってきている

このままでは数でロケットまで押し切られてしまうだろう。

ジジツ…!! ツクヨミ様がホログラムで再び現れる。

ツクヨミ「戦闘員！ 乗り込みが完了した!! お前達が乗り込み次第発射する!!!」

豊姫「くっ…。なかなかハードね。」

雷鬼「妖怪の数を甘く見てたってわけか。」

海星「1つ。1つだけ案がある。」

兵士「おお!!」

依姫「海星さん！ 本当ですか!?!」

海星「ああ。本当だ。俺がここで封印してた技を使えば。みんなロケットにのれる。」

豊姫「海星。あなたにそんな力が残っているの?? 満身創痍じゃない。」

海星「ふふ、この技には霊力は要らない。だから安心しろ。」

兵士「この数の妖怪を止める技があるなんて…。」

そう思うのも無理はない。何体かは倒したものの、まだ15万體ほど居るだろう。あいつらが走ってくるだけで地響きがしている。

海星「俺を信じろ。お前らは急いでロケットに乗るんだ。巻き添えは喰らいたくないだろ?」

依姫「海星さん! ……戻ってきます…: よね? 帰ってきてくれますよね?!?」

依姫は今にも泣きだしそうだ。

海星「…ああ。約束しよう。」(ほんととはもう戻れないかも知れない。)

豊姫「私の妹を悲しませるんじゃないわよ。永琳のことも。…もちろん私のことも

ね。」

海星「…ああ。わかってる。」（お前らを護るため。守り抜くんのだ。）

海星「雷鬼も、いつか約束した、あの大岩の上で待っていてくれ。あそこなら巻き添えは受けない。」

雷鬼「ああ。」

隣の山まで大量の妖怪が来ている、もう後がない。

妖怪「グギャアアアあ!!!」

海星「いけええええ!!!お前らアアア!」

依姫・豊姫「くくっ」

兵士たち「ハイ!!」

雷鬼「がんばりな。」

ダツ…!

海星「ふう……。みんな、ごめんな。

最後の霊力を振り絞る。

海星「はあああああああ!!!」

ピキピキピキピキピキピキ!!ピキピキ!

元々街の周囲で妖怪達を串刺しにした水晶の森を広げる。

バギン。バキバキピキピキピキ。

海星「くつくつくw あーあ。まさかこれが切り札になるなんてなあ。」

近くに伸びて来ている水晶に触れ。

唱える。

『吸力水晶 大結界』

スウー。

街を囲む水色の水晶が術者を中心に美しい紫色へと変わっていく。

『この世の全てを喰らい尽くすアメジスト』

海星「…行きな。」

ギウツビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキビキバキバ  
 キグシヤグシヤ

周りの木々や生き物の生命力、大気之力、全てを吸いながら水晶は進む。

妖怪「ナンダ？この宝石は。」

妖怪「イケ!! ススメ!!」

妖怪「ウオオオオオ」

ピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキピキバキバキバキバキバ  
 キグシヤグシヤグシヤグシヤグシヤアアアグシヤアアア

！ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア

海星「もう全部遅いよ。全員近づきすぎた。」

フラツ。

海星「ぐうっ…!!熱い!!身体が…!!魂か!？」  
突如、奇妙な熱さに襲われる。

海星「やはり…。こうなるよな。」

吸力水晶は全ての力を喰らい、術者に与える。

木々の生命力である霊力から

『もちろん妖怪の妖力まで。』

はあ…はあ…

海星「ふっ！」ピキピキ

赤色の水晶がでてくる。

海星「はあっ！」バキン！

海星「ふう…俺の身体を妖力に耐えられるようにした。」

これでおれは『ニンゲンデハナイ何か。』になってしまった。

海星「ごめんな。でもこうするしかなかったんだよ。みんなを護るため。」

遠くの方で妖怪の悲鳴と木が朽ちる音が聞こえる。

もう妖怪は、水晶に任せていいだろう。

お別れの挨拶をしに行かなきゃな。



## 全てとのお別れ

ザッザッ：

海星は街に向けてゆっくりと歩を進める。

海星「いろいろあったなあ……。こんな俺を受け入れてくれて。みんな優しくしてくれて……。これで少しは恩返し、できたのかな。」

海星「あーあ、みんなになんて説明しよう。永琳……悲しむかなあ。」

ザッザッ：

.....

side 永琳

ロケットの発射準備をしている間もずっとあの人のことを考えていた。

海星、森の中で初めて出会い、ひよんなことから一緒に生活するようになった。

最初こそは、なにも思わなかったものの、いつからかとても意識してしまうように

なっていました。

いま、あと人はこのロケットが無事に飛ばせれるように、命をかけて戦っている。豊姫や依姫が、1人で食い止めていると伝えてくれた。

いまならハツキリわかる。この気持ち…。

海星がいなくなってしまうたら悲しい。人生がここまで明るくなるなんて…きつとこれが。

『好き』ということ。

そんなことを、考えていたら、門の方から人が歩いてくるのが見えた。

.....

side 海星

考えているあいだに、街についてしまった。

海星「ありのままを伝えるしかないか。」

海星「もどつて」ドン

永琳「海星!!」ぎゅっ

海星「永琳、ただいま」

永琳「おかえりなさい!無事だったのね!!よかったわ!」

依姫「海星さん!!!さすがですね!!あの数をなんとかしてしまっただなんて…!」

豊姫「さすが、私の惚れた男ね。」(ボソツ)

兵士たち「「「うおおおおお!!」「」」

ツクヨミ「…。」

海星(ツクヨミ様は気づいてしまったか…。)

ツクヨミ「海星…。お前のおかげだ。本当に…ありがとう。」

そして本当にすまない、すまない……。」「

永琳「ツクヨミ様?」

海星「いいんだ。俺が1番よくわかっているよ。」

依姫「…?お二人とも何の話をされているのです?」

海星「おれは……。『月に行くとはできない。』」

永琳・依姫・豊姫「「?!?!?!」」

永琳「なんで!!!!」

依姫「なんでなんですか!!!」

豊姫「…。あなた、妖力が……。」

海星「そうだ。おれはここを攻めてきていた妖怪の力を吸収することで、妖怪をとめた。」

海星「だから…おれは。『穢れ』てしまったのだ。もう人間ではない。」

永琳「うっ…うっ…」永琳は泣き出してしまった。

ツクヨミ「海星…本当に…すまなかった…。」

海星「いいんだ。月には行けないが、おれは寿命が伸びた。だから…いつか。方法を見つけて会いに行くよ。」

海星「全員、おれの大切な人だから。」

依姫「海星さん…うっ…ぐすん…。」

海星「安心しろ、必ずみんなに会いに行くよ。約束する。」

ロケット『発射準備、最終フェーズ』

ツクヨミ「もう行かなくて…。ならない。海星、お前のことをいつまでも待っているぞ。」

海星「ああ…。ありがとうございます。」

ツクヨミ「お前達…：ロケットに乗り込むぞ。」

永琳「私も残る!!一緒に、一緒に住むって約束したもの!」  
ツクヨミ「なっ」

海星「永琳。」

ぎゅっ、ちゅっ

永琳「なっ!?!海星!?!」

永琳にキスをして 能力で気絶させる。

お前は月に必要だ。

依姫「わわわわわ」

豊姫「まあ…」

海星「ロケットに運んでやってくれ、すぐ目を覚ますよ。」

豊姫「わ、私にも口づけしてくれませんか?」

豊姫（私としたことが、緊張している？）

海星「。。。豊姫」ちゅっ

豊姫「ん。。。」

豊姫「じゃあ、また会いましょう、海星。」

海星「ああ、次会う時まで、豊姫。」

依姫「。。。えい！」ちゅっ

海星「！」

依姫「さ、さよならです！また会いますけど、さよならです！！」  
急いでロケットに泣きながら走っていく

海星「またな！依姫！！」聞こえるように叫ぶ  
ツクヨミ「ではな。」

海星「ああ。みんなをよろしくたのむ」  
ちゅっ。

海星「なっ。。。ツクヨミ様!?!」

ツクヨミ「くつくつく いつの間にか私もお前のことが…。ではな。」

ガチャン。

ロケットが閉まる。

ロケット『発射。』

永琳「はっ!!」

依姫「あつ、永琳様！目覚めましたね。ロケット…発射ですよ。」

永琳「そ、そんな!!か、海星!!」



海星「みんな、さよならだ。楽しかったよ。またいつか会おう…。」

そして海星はもう一人の友人の元に向かう。

初めてあつた場所に雷鬼はいた。

雷鬼「よお。月に行つちまったかと思つたぜ。」

海星「ふつ、じゃあなぜここにいる？笑」

雷鬼「…ふふ、それもそうだな。でもお前が仮に行つてしまつていたとしても俺はここにいたよ。大切な場所だからな。」

海星「ここをあの戦いで壊さないようにするのは骨が折れた。俺にとつても大切な場所だからな。」

雷鬼「いろいろあつたよなあ…。」

海星「まったくだ。お前がいたからこの選択ができた。」

雷鬼「ああ、人間と妖怪、いつかは分かり合えるとな。」

キラツ。何かが上空で光る。

.....

sideロケット

??? 「くつくつく…妖怪がいるから人間はいつまでこのように逃げ惑うのだ、殺す！ここで！徹底的に。絶滅させてやる!!!」

ツクヨミ「おまえ!! 重役！何をしている!!」

重役「ツクヨミ様…もう遅いです。ポチツと」

重役「いま、全てを滅ぼす爆弾が投下されました。妖怪は全て滅びます。」

ツクヨミ「おまえか：前日にこそこそしていたのは：!!」

重役「妖怪なんてくそだ！テレビ番組で人々を操作しようとしたのに、あのかいせい？とかいうやつが!!!だから丸ごと消してしまおうのです！」

ツクヨミ「くっ！くそが！」ひゅん

重役「ぐえええ。」

ツクヨミ「まずい。海星!!」

永琳・依姫・豊姫「なんですって!!」

永琳「いやあああああ」

そのまま為す術もなく落ちていく爆弾。ロケットの人々は見守るしかなかった。



そう言いながら俺を突き飛ばした。

海星「雷鬼いいいいいいいいいい」

このままでは爆弾に巻き込まれて死ぬ!!

海星「くそおおおおお」

できるかわからんが。

守護結界！水晶封印！！！！ピキピキピキピキ

海星「くっ…。」

海星は

『自身を封印した。』

ズズーン!!ズズズ

爆発は全てを巻き込み消しながら進んでいった。

パキン。

永琳に昔プレゼントした  
花の水晶にヒビが入った。

## 洩矢編

## 太古からの目覚め

ここは森の中。

私の名前は、東風谷幸恵（こちやさちえ）

私は風祝として村の神様、諏訪子様に使えています!!

いまは、村のはずれの森で夕食などにつかうたけのこを掘っています!

こここの山に入ったのは初めてですが…

幸恵「ふんふふーん♪」

ザクザク

幸恵「ふうく!たくさんとれましたー!!」

籠にはどつさりとしたけのこが入っている。

どうやらこの山は大当たりのようだ

幸恵「そろそろかえろうかn……ん?」

幸恵はふと不思議な感覚を覚える。

幸恵「…これは…神力…？ いや妖力…？ この地中からうつすらと力を感じますね…。」

幸恵「…。えい！」ザクザク

ガチン！

幸恵「わあ！何か当たりました！これは…水晶？大きいですね…」

まだまだ埋まっててさすがに私では掘りだせれない！諏訪子様には報告しなくては…！お宝発見ですー！！」

そういつて幸恵は村にむけて飛んでいくのであった。

ねえ…  
??? 「ズズツ…ふう、お茶飲んで、暇だねえ…なんかドカーンってイベントないのか

幸恵「すーわーこーさーまー！！」



諏訪子「おー！幸恵！おかえり！」

諏訪子「お！たくさんたけのこ採れたね！楽しみだ！」

幸恵「諏訪子様！それよりもお宝を発見しました！」

諏訪子「んー？お宝？」

幸恵「はい！かくかくしかじかで…」

諏訪子「ほお…それは気になるね…！早速行くよ！幸恵！案内して！」  
幸恵「はい！諏訪子様！」

幸恵「着きました！こつちです！」

諏訪子「なるほど…たしかにうつすらと力を感じるね…。」

幸恵「えっへん！」

諏訪子「でも…同時に妖力も感じる…。危険かもしれない。」

幸恵「危険だったらその時はその時ですよ！」

諏訪子「幸恵。私はあくまで一国の主だぞ、でもまあ！暇だし！気になる!!」

諏訪子「ほっ！」

諏訪子は地面に両手をつき力を込める。

ズズズズズ

地面が突如動き出し、先つちよしか見えていなかった水晶が盛り上がり、地表にどんな姿を表してくる。

幸恵「さっすが諏訪子様！おちやのこさいさいですね！」

諏訪子「こ、これは…?」

ズズズ…

地中から姿を現したのは2メートルほどの大きな水晶  
ただの水晶ではない。中に『人が入っている。』

幸恵「諏訪子様!!」

諏訪子「な、なんだこの男!いつからこの地中にいたのだ!生きているのか!?封印さ  
れているのか!」

幸恵「ど、どうしましょう!」

諏訪子「でも、かっこいいな。」ピト

諏訪子は水晶に手を触れた

ビシっ!

諏訪子・幸恵「!?!」

ピシピシピシ

どんどんヒビが入っていく。

幸恵「す、諏訪子様!？」

諏訪子「あーう。ど、どうしよう!？」

2人の心配を他所に

ヒビは広がり

パリン!!!

甲高い音と共に

海星「ううっ…。ん…ここは…。」

封印が解かれたのであった。

## 洩矢の国

ドクン…ドクン…

止まっていた鼓動が再び動き出し、この世に再び生を受けた。

海星「ん…ここは？」

眩しくて目が細くなる…

慣れてきて周りを見渡すと。

諏訪子・幸恵「あわわわわわ。」

少女が2人、怯えていた。

諏訪子（こ、これはやばい。やはり迂闊に掘り出すべきではなかった。

なぜかと言うと、水晶が砕けた途端、生まれて初めて、体現したこともない量の妖力がこの男か噴き出してきた。恐らくこの国も一瞬で破壊することができるような力がこの男は持っている。私の国は私が守らなくては！

しかし、妖力に加えて、霊力、神力が備わっているのはどういうことだろう。

とにかく刺激しないように…交流をはかってみるしか…。

諏訪子「あ、あのー…目覚めさせてしまいましたせん！貴方様は…。  
幸恵「…ごくり。」

海星「ん？ 封印を解いてくれたのは君か。ありがとう。」

諏訪子「ひう…。」

海星「いや、そんなに恐がらなくても大丈夫だよ。」

海星（ん？あ、妖力がダダ漏れになっているのか？）

ピキピキ

パキン

スウ…。

妖力を自在に出したり隠したりできるようにした。

諏訪子「ハッ…。妖力が消えた??」

海星「いや、驚かせてすまないね。おれは東方海星、元人間だ。」

諏訪子「…。私はこの国の主、諏訪子だ。」

幸恵「わ、私は諏訪子の風祝、東風谷幸恵です!!」

海星「諏訪子に、幸恵か…よろしくな。」

諏訪子「あ、ああ。」

諏訪子（良い奴なのかもしれない。）

海星「ここはじゃあ、きみの国ってことか。あれから何年経ったんだ…」

諏訪子「そうだよ。なにか事情がありそうだね。とりあえず私の家に行こうか。お茶でもだすよ。」

海星「本当か！ありがとう。嬉しいよ。」

諏訪子（まだ騙そうとしているのかもしれない、警戒しながら様子をみよう。）

移動中

ズズズ：

海星「美味しい。　ありがとう、再び自己紹介させてもらうよ。

俺の名前は、東方海星。海星と呼んでくれ。

話すと長くなるが…いいか？」

諏訪子「ええ、海星聞かせて。」

海星「わかった。

この感じだと…もうはるか昔のようだ、人間が穢れを避けるために月に移住するため、人類と妖怪の大戦争の際に、圧倒的な数で押し切られそうな時に、最後の切り札と



して、妖怪の力を吸収して食い止めた。

そのまま地球に残ろうとしたのだが、ロケットから妖怪を殺すための爆弾が落ちてきて、それから身を守るために。自身を封印することで身を守ったのだ。」

諏訪子「…。大昔に人が月に移住した!?!?」

幸恵「…。スケールがすごすぎて…」

海星「まあ信じられないかもしれないな。」

諏訪子「いや、信じるよ。海星が神力を持っていることに辻褄が合う。」

海星「え? 神力?? そんなもの持っていないぞ」

諏訪子「もってるよ! 多分その時、身を呈して人類を守り抜いたことで、人々から信仰されたんじゃないのかな?」

海星「な、なるほど。神力か…」

目を閉じる。

海星「黄色いイメージの力がある。これが神力か…」

幸恵 「人でもあり、妖怪でもあり、神様でもあるんですね!!」

諏訪子 「そんなのきいたことないよー。」

海星 「みんな…元気でやってるかな…。雷鬼…俺を残して…。」

…。

諏訪子 (東方海星、こいつは良い奴だ。信用できる。)

諏訪子 「海星！行く宛ないんでしょ？ここに住みなよ!!」

海星 「なっ！いいのか…？こんな得体もしれない俺なんかを…」

諏訪子 「得体も知れくないよ！海星は良い奴だ！それが十分伝わったから大丈夫  
！」

幸恵 「うんうん！ぜひ泊まってください！」

海星 「ああ…恩に着るよ。」また助けられてしまった。

幸恵 「たけのこでご飯つくりましたよ!!」

諏訪子「わーい!!」

海星「そう言えば……ぐりゅゅりゅ……。めちやくちやお腹空いた。」

## 平穩

幸恵「ささ！夜ご飯できましたよー！食べましょ！！」

諏訪子「やったー！！」トタトタトタ

海星「楽しみだな！」

そういつて居間にむかう。

テーブルの上には、たけのこの炊き込みご飯、お吸い物、煮付け  
焼き魚が美味しそうに並んでいた。

海星「おお！美味しそうだ！！」

諏訪子「どうだ！幸恵は料理が上手いんだぞ！」

幸恵「そんなあ…褒めないでくださいよお…」

諏訪子「もつと自信をもちな！きて！それじゃ！」

海星・幸恵・諏訪子「「いただきまーす!!」」

海星「おいしい！すごいぞ、幸恵！」笑顔で伝える

幸恵「ぐっ…げほ！げほっ！」

幸恵（どきりとしてしまった…。諏訪子様から褒められるのはまたちがう。）

諏訪子「どーしたの？顔赤くして。」

幸恵「い、いえ！うれいす!!」もぐもぐもぐ

海星「そういえば、この国はどんな国なんだ?？」

諏訪子「うーん？どんな国って言われてもねえ…あー、争いはそんなに好まないかなー、みんな狩りやら漁で生活しているよ！それを周辺の村とかに売ったりもしてる！」

海星「なるほど、優しい国なんだな。」

諏訪子「えへへ、でも、その中でも私は崇り神として崇められているよ！」

海星「ほお、それはなんとか、珍しいな。」

諏訪子「でしょー！でも私は民を守りたいんだ！だから普通の国と変わらないよ！」

幸恵「諏訪子様すてきです〜！」

諏訪子「えっへん！」

海星「ふふふ」

諏訪子「そうだ、海星のことも教えてよ。封印したって言ってたけど、能力があるの??」

海星「ああ…。俺はな『水晶を操る程度の能力』を持っている。」

諏訪子「水晶…」

海星「たとえば…」ピキピキピキピキ

青白い水晶が出現する

諏訪子・幸恵「おおー！きれい！（きれいですー！）」

海星「そう、物理的攻撃とかができたり。」

ピキピキピキピキ

腕の形の水晶が出現し

食べ終わったお皿を台所に運ぶ。

海星「こういったこともできる。」

諏訪子・幸恵「「おおおおお!! かつこいい!!（かつこいいですう!!）」

2人とも目を輝かせている

海星「ふふふ、すごいでしょ」（概念操作の能力はまだ伏せておくか。）

幸恵「私は、幸運を操る程度の能力をもってます!!」

海星「ほお……。聞くだけでもうすごいな。」

幸恵「たとえば……。ですねぇ。」おもむろにお皿を持ち上げる！

幸恵「ほい！つと！」ポイツ

諏訪子「ちよ、ちよつと！幸恵！あなたの能りよk」

バリン  
!!!!

海星「え??」普通にお皿は割れた。

幸恵「… あちゃー。」

幸恵「そうなんです…結果的にその人にとってラッキーなことが起こるんですけど… どうラッキーなのかわからないんです。」

海星「な、なるほど。」

ピキピキ

海星は能力を使い、皿を修復した

ん??

先程お皿が落ちたところよく見ると、蚊が5匹不自然に潰れていた。

飛び散った破片にすべて貫かれていたようだ。

海星（1番おそろしいんじゃないのか?）

幸恵「じゃあ!海星さんのお部屋に案内しますね!!」



海星が怯えながらも洩矢の一日は過ぎていく。

神さま？

チュンチュン…！

スズメの声がする。

海星「んあー、よく寝た！」

寝っ転がりながら伸びをする

…ん？

腰あたりに違和感がある。

諏訪子がなぜか布団の中にいた、

諏訪子「んー、すぴー。」

海星「なんでだ…？いつの間に」

幸恵「かいせいさーん！起きてくだs…。」

幸恵がみるみるうちに赤くなっていく。

海星「いや、幸恵ちゃん、こ、これはだな。」

幸恵「諏訪子さまあああ!!!こらああああ!!!」

諏訪子「うわあわわ?!?!」どたつ。  
布団から転げ落ちる。

幸恵「諏訪子様?説明していただけますかね?」ワナワナ

諏訪子「いや、これはね?間違っただけ!決して海星にぴとぴとしようとしたわけじゃない!」

幸恵「…ふーん。…ま、いいです!それならこつちも考えがありますからね!」

海星「まあまあ、そんなことより朝ごはんを食べようじゃないか」

もぐもぐ

幸恵 「海星さん！今日は一緒にこの国を見て回りましょう！」

海星 「おー、いいな。そうしよう」

幸恵 「やった！案内しますね！」

海星 「よろしく頼むよ」

諏訪子 「わたしもいくー!!」

移動中

海星 「ほお…のどかな国だな。自然も沢山あつて素敵だ」

国の中のひとつの村にきた

諏訪子 「へへーん！すごいでしょ！」

海星 「ああ。さすが諏訪子だな。」

諏訪子「…。」

幸恵「えへへ！よかったですね！褒めてもらえて！」

諏訪子「あ、ああ！もちろんだな！！当たり前なのだ！」

海星「お、第1村人発見！」

村人「あ、諏訪子様！いつもありがとうございます！」

幸恵ちゃんもいつも神様について頂いてほんと助かってます！」

諏訪子「農作に精を出しているようだね！こちらこそいつもありがとうございます！何か困った

ことがあつたら言つてね！」

幸恵「神事のお仕事がんばります！」

村人「ありがたきお言葉…！やや、そちらの方は？」

幸恵「はい！こちらの方は海星様とって、この国のもう1人の神様となつたお方で  
す!!!」

諏訪子、海星「「え!？」」

幸恵「♪」

村人「おや、そうなのですね…! 神様が二人いるとなるとこの国も安泰です…! みんなにも伝えなくては!」

海星「お、おい!」

幸恵「いいんです! 海星さんはだまって!」

海星「あ…ああ。」

すっかり気迫に驚いてしまった

どうなることやら…。

そのあとも何人かの村人に会い、その度に幸恵は、俺のことを神様だと伝えた。

## 3人帰宅

諏訪子「幸恵！どーゆーことだったのさ！」

海星「僕にも説明しておくれ。」

幸恵「はい！海星さんに幸運を使ってみたところ、この行動をした方がいいとできました！」

幸恵「この国は、一応諏訪子は崇り神として信仰されています。好かれてはいるんですけどね！それだけでは不安定……。そこで！神力を持っている海星さんに、もう1人の神として信仰していただきます！私からの説明で村人の方も信頼してくれるでしょう！」

明日にはもう広まっていますよ！！

これでこの国も、海星さんの神力もパワーアップ！！

諏訪子「へえ……！考えたね。」

幸恵「しかも……！えい！」ぽふっ

幸恵が寄りかかってきた

海星「どうした？」

幸恵「私の仕事は神様のお世話。これで！胸を張って海星さんの身の回りの世話ができるということですよ!!」

諏訪子「なっ!!?」

海星「おいおい、そーゆーのは俺は自分でできるぞ」

幸恵「私がやりたいからやるんですよ!!異論は認めません!!」

諏訪子「むきー!!なかなか考えたね…!」

海星「やれやれ…。」

こうしてまた騒がしい1日になっていく。



## 大和の国から

スズメの声……いつものようにさええずっている。

海星「んん……いい朝だ……」さらっ

手にサラサラしたものの感触があつた

海星「ん？……まさか。」

幸恵の緑の髪と諏訪子の金色の髪が両脇に……ある。

諏訪子、幸恵「「ぐうくう」」

海星「……やれやれだぜ。」

頭を撫でてやりながら、珍しく再び眠りに落ちるのであつた。

幸恵「はあ……幸せな時間でした……。」

諏訪子「まったく……わたしだけのものだったのに!!」

幸恵「ずるいです！一緒に住んでるんだから平等です！」

海星「んん…。」

幸恵「あつ！おはようございます。海星様」

海星「ああ、おはよう幸恵、ん？様？」

幸恵「今日からあなたはこの国のもう一人の神様となりました。私は神につく仕事。海星様と呼ばせていたどころかと。」

海星「ふふ、そんな堅苦しくなくていいよ。今まで通りでいいんだ。」

幸恵「そうですか？…かいせいさんがそういうなら…。」

諏訪子「あはは、お人好しな神様だね笑」

そんなことを言っていると

ひゅん。

トスつ。

玄関に矢が飛んできた。

海星「なんだ？神力を一瞬感じたが。」

幸恵「さあ…？見てきますね」タッタッタツ

諏訪子「…。」

幸恵「大和の国から…手紙です…。」

海星「大和の国というと…いつか話していた隣の国か。たしかメキメキと勢力を伸ばしている武闘派の国とかなんとかか。」

諏訪子「それで…？文書は…？」

幸恵「この洩矢の国に…宣戦布告です。しかもこの文書…。」

海星・諏訪子「なになに」 手紙を幸恵から受け取る

『小さき隣国、洩矢の国の主へ。』

此度、我々大和の国は、これから来たる我が国の強化のため。そちらの国の豊かな自然を戴きたい。

抵抗すれば、民たちの命はない。3日後だ』

海星「なんだこの手紙。ふざけているのか？」

その気になれば蹂躪できるという

自信と傲慢さに満ちている手紙だ。

諏訪子「……。どうしよう」

幸恵「す、諏訪子様……」

諏訪子「……。この国の民は平和な暮らしを望んでいる、戦争に巻き込むことはできない。  
い。

だが……。明け渡しても民の安全は保証できない。

もしここを支配する神がやばい奴だったら……」

諏訪子「……。」

諏訪子「戦えるのは……わたしだけ。」

海星「任せろ、少し話をつけてくる。」

少し苛立ちを覚えたところだしな

諏訪子「え!?だ、だめ!!大和の国はたくさん神がいて……話できるところじゃないと思  
う!」

海星「ふふ、何も問題は無いよ。安心して。俺は『強いよ』」

諏訪子を抱きしめる。

諏訪子「…うう。海星…。お願い…助けて。」

海星「ああ、任せろ。」

諏訪子の心をこんなにも踏みにじるとは…。

海星移動中。

海星「そういえば、空とんでみたいよな。普通に忘れてた。」  
パキン。

ふわあ。

海星「おお…浮いた。まだ慣れてないが楽しいな。一番嬉しいかも。  
練習しながら大和の国までいこう」

しばらく飛んでいるうちに慣れてきた。

海星（相当速く飛べるようになってきた…。）

海星「あれか？もうついてしまったのか。」

赤と黒を貴重とした和風な建物が山の斜面を切り出して建てられている。

海星「ほお。すごいな…広い。」

海星「さてと…」

『蹂躪』してやろうかな？

ま、怖がる顔がみたいし。のんびりいくか。

階段の下に2人の門番が立っていた。

門番「止まれ。何者だ。」

海星「洩矢の使いで参った。こちらの神様に話がある。」

門番「ああ。洩矢のか…通っていいぞ」

海星「どうも。」

階段を登っていく。

神力を纏った巫女のような女が歩いてきた。

巫女、「洩矢のお方、こちらへ…。」

長い廊下をすすむ。

海星「なあ、ここにはどんな神様がいるんだ？」

巫女「…この大和の国には現在、須佐之男様、日本武尊様（ヤマトタケル）、天照様を初めに、八坂神奈子様、大牙旗様など、数え切れないほどの神さまがいらつしやいます。」

海星「そんなにいるのか。すごい国だな。」

巫女「そのため、信仰、出世などで揉めやすいのですが…。」

巫女「すいません、失言でした。」

海星「いや、構わない、ありがとうな。」

巫女「お心遣い感謝いたします。到着です。」

こちらの部屋となります。」

長い廊下の奥には

金色の大きな襖があり、神々しさを放っていた。  
海星「さて、いこうか。」

力を消し、手紙を握りしめ

海星はその襖に手をかけた。



## 和神との交渉

海星は大きな黄金の襖に手をかけた。

襖越しでも、神力のオーラが伝わってくる。

海星「…?やけに重いな。」

不思議な力で押さえつけられているようだ。

神力か??

海星「ならば…こちらも…」ぶおっ

神力を出しながら襖を開ける。

ススツ…スーッ

「ほお…。開けることが出来たのか。神奈子よ、ほんとに力を込めたのか?」

「…。」

見てみると、5人の神力を纏った凄まじいオーラを持つ男女が座っていた。

海星「洩矢の使いで参った。東方 海星だ。」

??? 「よくぞ来ていただきました。我が名は天照大御神。左から、須佐之男、日本武尊（ヤマトタケル）、八坂神奈子、大牙旗です。」

須佐之男「んー、神力を使ったな？ 洩矢の国に神は一人しか居ないと聞いていたが？」  
神奈子「…わたしも知らないな。男の神があゝの国にいたとは。」

海星「最近、神とやらになつたものでね。知らないのも無理はない。」

大牙旗（ダイガハタ）「おい！ 須佐之男様になんて口を聞いてやがる!! 洩矢の国の神の分際で！」

海星「ああ…そのことなんだが。今日、ここに俺が来たのは他でもない。ちよつと質問があつてね。」

天照「大牙旗、口を慎みなさい。どのような要件でここに来たのでしょうか？」

海星「今朝、洩矢の神社に手紙が届いた。内容は…。」ぱらり  
手紙を広げてみせる。

海星「この内容で、間違いないな??」

大牙旗「ああ！俺が書かせたやつじゃねえか!! そうだよ！洩矢の国なんて小国、戦遊びにもなりやしない!! 民も貴重な俺らの労働力、無駄死にさせないためにも。はやく大和に明け渡しちまいな!!!」

海星「そうか…。その考え…変えてもらえる余地はないのか？もつと、平和的に。」

天照「大牙旗!!あなた…。」

大牙旗「いや、それは無いね。拒否するならせーんぶ頂くだけだ!!! 弱い方が悪いんだよオ！」

海星「そうか…。それは…とつても残念だよ。」

大和の国、少なくとも大牙旗とかいうこいつは。クズだ。

海星「弱い方が悪いんだもん。じゃあ、今から起きることに對しても同じことを

言ってもらうからな…?」

大牙旗「え?」

海星はゆつくりと妖力を解放していく。

海星「後悔するなよ。『太古の百鬼夜行』のお出ましだ…。」

ズズ…ズズズズ…ズズズズオオオ

海星の周囲にドス黒いムラサキのオーラが立ち込める

須佐之男「お、おい!こいつ!!!神じゃねーのかよ!」

日本武尊「チツ!やべーぞこれは!」

ズズズズ…ズズ…ズズ…ズズ…ズズズズ…!!!

海星(まだまだ底が見えないな。やはり、とんでもない数の妖怪を吸収していたか。ぬらりひよんの死体とかも取り込んでののかもな。)

バキバキバキバキ!!

海星の背後の襖や柱が悲鳴を上げ曲がり、朽ちていく。

須佐之男「くつ…!!おらあああ!!!」ブオン!



ガキン……！ガキン！ザシユ！ザシユ！

日本武尊「ぐあっ……」

大牙旗「ひっ……。ば、バケモノ……」

海星「まだ平和的に解決できる道もあるんじゃないのか？つて言ったじゃないか……」  
ズズズズズズ……

妖力の出力をさらに……さらに上げていく。

大牙旗「ぐっっ!!!息がっ!!!」

どうやら妖力の密度が高すぎてプレッシャーで息がまともに吸えないらしい。

バキン!!バキバキ!!ギツギツギ……!!!

もはや、壁も柱も天井も、すべてはすでに形を成さず、この建物の周囲の森も、地面  
でさえも怯えているようだ。

海星「弱い方が悪いんだろう。そーゆーことだよ。じゃあ……。死んで貰おうかな？」

神奈子「はああっ!!!」びゅっっ!!!

柱が飛んできた。

海星「ふっー!」ピキピキ!!!

ビュン!!!!ドガアアアアンビキビキビキビキ。

5倍ほどの大きさの水晶の柱をとばして破壊した。

神奈子「…なっ…。」

天照「…。」

海星「パチン!!!」指を鳴らし、妖力をすべて引つ込めた。

大牙旗「はっ!!!はっ!!!ぜえはあ…!!、き、あつあ…!!」どしやつ。

大牙旗は倒れた

海星「戦争をするなど言ってるわけじゃない。良かったら、民を第1に考えてくれな  
いか?天照大御神。」

天照「あなたの願い聞き入れました。もともと今回の件はその大牙旗が独断で行つたこと。我々は知りませんでした。戦争で民の命多く落とされては本末転倒。」

海星「大和の国と、洩矢の国の戦争はお互いの一騎打ちにしないか?  
そちらの神奈子とこちらの諏訪子で。」

もちろん、俺は出ない。」

神奈子「…。」

天照「それで、勝った方が民の信仰をいただく。わかりました。」

海星「ふふ、話が早くて助かるよ。なら三日後、そちらの指定してきた時間、場所で

な。」

海星「神奈子……?であつてたよな?よろしくな。今日はすまなかつた。」

お辞儀をして建物を出た。

海星(ぼろぼろだな……。やりすぎたかもしれないな。)

大和の国の象徴でもある赤と黒の大きな神社はヒビだらけ、ところどころ崩れたりしている。

海星「ま、これくらいやらないとね!!」

そうして、諏訪子の元に戻るのであつた。

.....

神奈子 side

近頃洩矢を攻める、そう聞かされていた。

私が軍神として指揮を執ることになつていたが、

急遽、大牙旗という神が指揮を執ることになった。

今日の朝、矢文をとばして宣戦布告をしたらしい。



なんのために戦争をしているのか、最近よく分からなくなってきた。  
そんな矢先、洩矢の1人の男が大和の国まで訪ねてきたのだ。

パツと見て、ごついというよりかはシュツとしている

ただの若者。しかし

この襦を開けたのだ。

本来、大和の国には神以外は訪問できない

襦には私が神力を込めて重しをしてある。

しかも普通の神では動かすこともできないはずなのに……。

当たり前のように入ってきたのだ。

その男が言うには、今日届いた矢文による宣戦布告の内容。

もつと民の犠牲を減らすことができないか。という交渉だった。

私は大いに賛成だ。天照様もだろう。

しかし、この大牙旗という神。クズだ。

どんなやつか知らなかったが、おおかた、たくさん殺して名をあげようという出世欲の強いやつだろう。

そして、洩矢の使いの  
ただの若者の神を追い返して、この話は終わり。  
そういうわけにはいかなかった。

とてつもない妖力がその男から溢れ出したのだ。  
今までに感じたことのないまとまりのない妖力  
底が見えない絶望。

ありえない速度で急速に膨らんでいく。

須佐之男様と日本武尊様もまずいと思ったのか、突貫。  
しかし、ありえない事なのだが、簡単にあしらわれている。

さらにこの世を飲み込まずとせんばかりの妖力。

お腹の底から震えを感じる。

部屋の柱も朽ちて、地面が泣いている。

初めて、軍神の私が死を覚悟した。

しかし！ここでひくわけにはいかない!!!

能力で柱を創り出し、打ち出した。

こんな危機は大和の国で起きたことがない!!!  
ここで倒さなくては!!!大和がおわる!!!!

しかし、全てを絶望の底に沈めるような

男の強さがあつた。

美しい水晶のようなものとばし

いとも簡単にわたしのオンバシラを破壊した。

もう…おわつた。

今にも押しつぶさそうなほどの量の妖力。

死を覚悟したそのとき。

パチン!!!

スっ!

身体が…心臓が…!軽くなった。

男がすべての力を解いたのだ。

その後、天照様と話し合つて、民の傷つかない一騎打ち。

私が出ることになった。

その男は出場しないようだ。

何故だろう。すべてに勝てるはずなのに。

そして、なんと私に謝り帰っていったのだ。

東方 海星といったな……。不思議な男だ。

## 特訓の神様

ヒュー!!

海星は颯爽と洩矢に向けて飛んでいた。

海星（うーむ、あんなに使ったが妖力は減っていないな。もう完全に俺の力として作  
用しているのか。）

海星（使い方を1歩まちがえるととんでもないことになってしまふなあ…練習あるの  
みか！）

海星「つてことで、ただいまー!!」

諏訪子「海星!!!」とたとた

ぽふっ

海星「おー！諏訪子か！帰ったぞー」

諏訪子「こんなに早く帰ってくるなんてびっくりしたよ！」

諏訪子「大和のほうからとてつもない妖力が出てきたから心配してたんだよ。まさか

…?」

海星「ああ、俺だな。交渉してきたよ。」

幸恵「やつぱり…。なんて恐ろしいことを！海星さんにもしもの事があつたらどうするんですか！」

海星「ははは、大丈夫大丈夫！こうして無事に帰ってきたじゃないか！」

諏訪子「まったく…!!…!!…!!ありがとうございます。」

幸恵「私からも。ありがとうございます。」

海星「ふふふ、いいんだよ。戦争は最小限に抑えた。諏訪子、お前があちらの神と一騎打ちだ。」

諏訪子「…うん。」

海星「名前はたしか、神奈子といったな。」

諏訪子「ぐぬぬ、軍神か…。これは相当きついね…」

海星「そうか…それなら修行あるのみだな!!」

幸恵 「諏訪子様！ファイトですー!!!」

諏訪子 「この国のために!!頑張るよ！」

少女達訓練中

海星 「よし！おれもついでに訓練するぞ！

諏訪子に妖力の弾を飛ばすから、避けてくれ！」

諏訪子 「おう！」

海星 「技には、イメージが必要だ！まずはお手本。」

海星 「銃をイメージして…。」

ピキピキ…メギャン!

海星「できた。名ずけて二丁拳銃クリスタルエンペラー!」  
透明な拳銃が二丁でてきた

諏訪子「おおお!!かっこいい!」

海星「いくよー!」

バンツバンツ!!

ギョーン!!!

とんでもない早さで諏訪子に飛んでいく。

諏訪子「え?」

海星「あぶねえ!!」

ぐいつ!

ボスボス!!

ドシューーン!!

海星「ふう、銃弾を操作出来て良かった…」

諏訪子「」

後ろの木が倒れていた。



海星「どんどんいくよー！」

諏訪子「いやあああ！」

ついでなので幸恵もすこし訓練した。能力を上手く使えるようになったかな？

.....

2日後…

諏訪子「はっ！よっ！ほっ！」ヒュンヒュンヒュン！

妖力弾を軽々とよけていく。

諏訪子「せい！！」ヒュツ！！！！

シャキシャキ！

スパスパ！ドシン！！

木をなぎ倒していく。

諏訪子は鉄の輪を使えるようになっていた。

海星「いいね！」

諏訪子「坤を想像する程度の能力にこんな使い方があるとはなんて！」

海星「要は考え用だな。」

諏訪子「ふうー！疲れた！」

海星「よしよし！すごいぞ！見るからに強くなっているな」

幸恵「すごいですー！！」

諏訪子「ふふふく…あれ？」ふらっ

海星「よつと。」ぼふっ

ふらついた諏訪子を受け止める

諏訪子「えへへ、ごめんね海星」

海星「いや？問題ないよ。あと、頑張った君へのご褒美だ。」

ピキピキ

水晶の腕輪をつくりはめてあげる

諏訪子「わあ…！きれい！」

海星「御守りになるはずだよ、明日はがんばってね。」

幸恵 「よかったですね！諏訪子様！」

海星 「幸恵もこつちにおいで。」

幸恵 「え？」

ピキピキ

海星 「幸恵にも御褒美の御守りだ。似合ってるよ。」

緑と青白い水晶でカエルと白蛇の髪飾りを作つてあげた。

幸恵 「ん……。うれしすぎます！」

幸恵、諏訪子 「ありがとう！（ぎぎいますー）」

海星 「ふふふ、さてお風呂はいつて汗を流してからご飯にしよう！」

こうして洩矢の平和な日は夜を迎えていく。

## 決戦 『坤と?』

諏訪子「ふいゝさつぱりしたあゝ」

幸恵「おあがりなさいですゝ！ご飯！できてますよー！」

海星「おー、上がったか。さ、食べよう。」

諏訪子「やったあ!!美味しそう!!お酒が合いそうだけど、明日は決戦なので、我慢！」

幸恵「えらいですー!!私も我慢します！」

海星「おいおい、幸恵はまだ20歳じゃないだろ笑」

幸恵、諏訪子「??」

海星「ん？」

幸恵「どういふことです??たしかに20歳ではないですけど…」

海星（そうか…法律というものがないのか…）

海星「いや、なんでもない!気のせいだ！」

諏訪子「なんだそりや笑　それで？海星はお酒強いの？」

幸恵「見るからに強そうですね」

海星「いや、お酒は飲んだことないなあ…。」

諏訪子、幸恵「「え?!?!?嫌いななの? (ですか?)」」

海星「いや…飲もうとしたことがないっただけで…」

諏訪子「なら戦争が終わったら飲まなきゃね！楽しみが増えた！頑張れるよ！」

幸恵「そうですね！」

海星「おいおい…。まあ終わったら宴会でも開いて飲んでみようかな」

諏訪子「そう来なくっちゃ!!」

少女達食事中

諏訪子「さて！明日に向けて寝るよ！」

海星「ああ、おやすみなさい。」

幸恵 「おやすみなさいです〜諏訪子様!」

諏訪子 「…。」

幸恵 「諏訪子様?」

諏訪子 「一緒に…。」

海星 「ん?」

諏訪子 「明日負けたら…。国が…。」

海星 「大丈夫だ。やるべき事はやってきただろう。あとは信じてベストを尽くすだけだ。」

諏訪子 「…うん。」

幸恵 「お守りもついていますしね!」

諏訪子 「…だー!もう!海星!男でしょ!?!慰めなさいよ!」

海星 「え?!びっくりした」

諏訪子 「ほら!一緒に寝てよ!ぎゅーってして力をちようだいよ!」

幸恵 「なっ!?!」

海星 「あー、わかつて」

幸恵 「ならみんなで寝ましょう!!それがいい!それがいいですね!!!」

海星 「おいおい…。」

数分後

海星 「まったく…。」

幸恵、諏訪子 「ぐう…すう…。」ぎゅうううう

海星 「ふふ、明日はがんばるんだぞ。」

.....

決戦当日

大和の国が指定してきた広場に来た。

神奈子 「来たね。」

諏訪子 「ああ、来たよ!」

須佐之男「揃ったな。戦争の勝敗の判断は、おれと…海星といったな？お前でやる。異論はあるか？」

海星「いや、特にない。」

須佐之男「この俺の剣を空に投げ、地面に落ちたときに開戦とする。」

諏訪子「海星。稽古つけてくれてありがとう！行ってくるよ！」

海星「ああ、いっておいで。」

幸恵「諏訪子様！がんばってください！」

神奈子「我が名は、大和の国の軍神！八坂神奈子！」

諏訪子「我が名は、洩矢の国の崇り神！洩矢諏訪子!!」

須佐之男「いくぞ！」ビュン！

須佐之男の大きな剣が豪快に空に投げられた。

皆。その剣を見守るなか、神奈子と諏訪子だけはお互い睨み合う…。



ザクツツ!!!!  
須佐之男「はじめええええ!!」

ヒュン　　ヒュン!

2人の姿が消えた。

ガシイイイ!

2人は中心で組み合う。

神奈子「ふーん、やるねえ」

諏訪子「まだまだこんなもんじゃ…」ドン!

脚を地面に振り下ろす

諏訪子「ないよ!!」

ズガガガガガ!!

組み合っているところの地面が盛り上がり神奈子に襲いかかる。

幸恵「おお!」

神奈子「チツ!あまい!」ズズズズ

神奈子も足元から柱を出現させ自身をまもった。

諏訪子「やるねえ…」

神奈子「まだまだこんなもんじゃないよ？」

ビュッ！ビュン

2本立て続けに太い柱が諏訪子に襲いかかる。

海星「避けれるだろ？諏訪子」

諏訪子「ホッ！よっ！」ヒュッヒュン！

諏訪子も身軽なステップで避けつづける

海星「よしよし。」

神奈子「くっ…おらあ！」神奈子の突貫

諏訪子「ぐっ…！せい！」

体術にもつれ込む。

ガッ！ドガ！ドコッ!!!

神奈子「はあああああ！」

諏訪子「おらあああ!!」

かなり接戦だ。正直どちらが勝つかわからない。

諏訪子「もうそろそろキメに行くよ！」

神奈子「くつくつく！楽しいね！こい!!」

諏訪子は能力で鉄の輪を創り出す。

神奈子も5本の柱を創り出す。

諏訪子「!!」神奈子「いくぞ!!」

ビュン

ビュン

諏訪子の投げた鉄の輪は柱を切り裂きながら進み

『錆びて壊れた』

諏訪子「なっ!？」

神奈子「ふふ、柱にツタを含ませておいたよ。もらったあ！」  
ビュン!!

諏訪子「うわあああああ！」ドゴーン!

.....

諏訪子「きゆう……。」パタ

須佐之男「勝者！大和の八坂神奈子！」

惜しいところで、諏訪子は負けてしまった。

# 敗北、信仰の譲渡と幸運を操りし少女

諏訪子が負けた。

これが意味すること、すなわち洩矢の国が大和の国に吸収されるということだった。

幸恵「っ……！」

海星「ああ…神奈子の勝ちだ。」

須佐之男「よくやったぞ、神奈子。」

神奈子「洩矢も強かった。だが、わたしの方上だったってことだ。」

幸恵「諏訪子様……！」

そう、洩矢の吸収。それは諏訪子の消滅も意味していた。

信仰がなくなると神様は形を保てなくなるようになるようだ。

須佐之男「さて、海星とやら。約束通り洩矢の信仰を頂くぞ。」

海星「…ああ。」

幸恵「待つてくださいい!!!」

須佐之男「なんだ？風祝風情が神である我に口答えすると言うのか？我はお前の領地の神ではない。頭が高いぞ。」

幸恵「無礼は承知です。ですが、話は聞いてください！」ブオン！  
幸恵はおもむろに石を靈力に乗せて須佐之男の方向に投げつけた。

須佐之男「…。」

微動だにしない須佐之男

ヒュン！バキン!!!

幸恵が飛ばした石は須佐之男に向かって飛んできていた刀を撃ち落とす。

須佐之男「いまの俺への攻撃、神力がなければ感知できないはず。なぜ貴様が？」  
幸恵「わたしの能力は『幸運を操る程度の能力』いま須佐之男様にとっての幸運になる行動をしました。」

須佐之男「なるほど…それで…大牙旗の攻撃を止められたのだな？」  
ビュン！

須佐之男の姿が2人に見える

次の瞬間

大牙旗「ひっ…！うわああああ！」ずじやあ  
遠くに潜んでいた大牙旗が引き摺られてきた。

須佐之男「なぜ攻撃してきた？まあ、効かんがな。さしずめ自分の立場が悪くなったから、上の席を消そうとしたってところか…浅はかな…。」

大牙旗「ぐううう…くそお…。」

須佐之男「幸恵とやら。信じよう。お前の力。」

須佐之男「それで？話というのは？」

幸恵「今のままでは、洩矢の信仰は大和にいきません!!」

須佐之男「なに?」

海星、神奈子「?」

幸恵「諏訪子様に能力を使ってみたところ、諏訪子は幸運にも『崇り神』という神様でした。そのため、国の民達は信仰を破棄すると祟が起こると信じており、信仰は譲れないようです。」

須佐之男「…なるほど。」

須佐之男「だが、こちらにも面子はある。信仰が頂けないなら潰すまでなのだ。」

幸恵「そこで!八坂神奈子様です、諏訪子様と神奈子様と海星さんで、この国の神となるのです!そうすることで、事実上大和の国の神様に信仰がはいります!!」

幸恵「1度諏訪子様を倒したという肩書き、表向きは崇り神ではない、海星さんと神奈子様で神事を行うということにすれば、民も納得するかと!」

須佐之男「ほお…。神奈子、お前はど思う?」



神奈子「ここで久しぶりにできたライブを失いたくはないしね…、その話のるよ。」

幸恵「やった!!! ありがとうございます!」

須佐之男「ふん、洩矢もいい風祝をもったな。」

須佐之男「神奈子よ、お前の話は俺が天照様に伝えておく。お前はそのままここに残れ。」

神奈子「はっ! 須佐之男様!」

神奈子「つてわけで、海星、幸恵。これからよろしくな。」

諏訪子「ちよつと! 途中から起きてきていたけど! 神奈子もいいの!?! 判断早すぎない!?!」

幸恵「あ! 諏訪子様!!! 無事で良かったです!!! よかったですううう!!!」ぐすん  
神奈子「ああ、お前らに興味が湧いたからな。」

海星「諏訪子、よく頑張った。幸恵がお前を守ったんだ。その行為を無下にするな。」

諏訪子「あーうー、そうだよね、ありがとう幸恵。ほんとにありがとう。神奈子もよろしくね？」

幸恵「いえいえ！風祝として当然ですね！」

神奈子「ああ、よろしくな。」

須佐之男「じゃ、俺は帰るぜ。海星、いつかお前に勝つからな。」

海星「ああ、待っていていよう。」

須佐之男は去っていった。

諏訪子「じゃ！なんとかなったし！今日は宴会だよ！！」

幸恵「おーーー！！！」

神奈子、海星「呑気なヤツらめ…なかなか大変そうだ。」

## 宴会とお酒

幸恵「さてさて!!!久しぶりの宴会ですね!!料理の腕もふるいますよ!」

諏訪子「やったあ!!」

海星「おれもなにか作ろうかな」

諏訪子「え!!!?!!やったあああ!」

神奈子「そんなに喜ぶことなのか?」

諏訪子「海星の料理はめっちゃ美味しいんだぞ!」

神奈子「ほう、それは楽しみだな。」

幸恵「わたし!わたしもいるんですからね!!!」

諏訪子「えへへ、もちろん幸恵の料理が大好きだよ!」

幸恵「えへへ!!うれしいです!がんばります!」

海星「さて!幸恵!一緒にがんばろっか!」

幸恵「はい!神奈子様と諏訪子様は待っててください!」

諏訪子「はーい！」

神奈子「わるいねー！」

海星「意外に、あの二人…」

幸恵「相性いいですね」

料理中

海星「できたー！」

幸恵「できましたー!!」

テーブルには

鳥の唐揚げ、山菜の天ぷら、焼き鳥、チャーハンなどが並んでいた。

神奈子「見たことない料理があるね。」

海星「昔からの得意料理だ、期待しててくれて構わない。」

神奈子「大した自信じゃないか。楽しみだ。」

海星「それじゃ!!!」

神奈子、幸恵、諏訪子、海星「「「いただきまーすー!」」」

神奈子「う、うまい…!!!」

海星「よかった…。」

神奈子「海星!美味すぎるぞ!ここに住んでよかった…!」

海星「おいおい、大袈裟な笑」

諏訪子「さて！お酒！今日のメインはお酒だよ！」

幸恵「待つてました！」

神奈子「おお！いいねえ!!」

海星「…。」

神奈子「どうした？」

幸恵「海星さんはお酒を飲んだことが無いそうです。」

神奈子「なに?!もったいない！それは絶対飲むべきだ！人生損してるぞ！」

海星「そんなものなのか？まあ人生まだまだ長いし、経験しておくか。」

諏訪子「この国で作られた地酒だよ！お供え物できたんだ！」

神奈子「なに!!洩矢の国の酒か！気になるね！」

幸恵「わーい！久しぶりのお酒です！ほら！海星さんも！」

諏訪子「こんな、可愛い子に勧められてるんだよ。ほら！はやくはやく！」

海星「…だー！わかったよ！頂くよ。」

そう言ってお猪口を差し出す。

諏訪子「そう来なくっちゃ！じゃ！とくとくとくとく〜」

みんなにお酒が渡る

諏訪子「じゃ！今日の宴会は戦争が無事に終わった記念だね！！

神奈子には負けちゃったけど、こうして新しい家族が増えたし！結果オーライ！！神奈子！！いらつしやい！！これからよろしくね！！」

神奈子「ああ、よろしくな。」

幸恵、海星「俺も（わたしも）よろしくな（です！）」

諏訪子「じゃ！！かんぱーい！！！！」

みんな「かんぱーい！！！！」

カチャン！

諏訪子、神奈子、幸恵「くっくっ！」

「くうー！！美味しい！（です！）」

海星「…。」えい！

海星「くっ！」



::!

海星「うまいな！」

前世ではまったく触れてこなかったから警戒していたがこれはわるくない！

諏訪子「よかった!!!ほらほら！どンドン飲んで！」

海星「ああ、頂くよ。」

神奈子「うまいツマミもあるから最高だな！ありがとう、幸恵、海星」

海星、幸恵「ああ、まかせてください！」

.....  
1時間後

みんな程よく箸がすすみ、お酒も進んでいた。

神奈子「そういえば海星。お前のことを何も知らないな。」

海星「ん？」

神奈子「そのデタラメな強さはどこからなんだ？」

海星「んー？秘密だな。」

諏訪子「あれー？私と出会った時は教えてくれたじゃん」

海星「ふふふ、そうだっけか？」

幸恵「もしかして…？海星さん、酔ってます？」

諏訪子「…まさか。」

海星「僕が酔ってるかって？そんなの俺が1番わかってる！酔ってないぞ！」

神奈子「第一人称が定まってないぞ笑 酔っているなこれは」

幸恵「初めてだからって飛ばしすぎちゃいましたね〜」

神奈子「ちよつと、外に連れ出して風を当ててくるよ。」

諏訪子「よろしく〜！」

神奈子「ほら、海星！外に出るぞ。」

海星「ん？あ…ああ。」すくっ

そうして2人は隣の部屋の縁側に向かつていった

幸恵、諏訪子「しめしめ、今のうちに料理を！」ガツガツ

神奈子「海星？大丈夫か？縁側に座れるか？」

海星「ああ。神奈子から誘ってくれるなんて嬉しいな。」

神奈子「何の話だ？」

海星「え？外にデートするじゃないのか？」

神奈子「なっ!?!?!」

神奈子は赤くなる

神奈子「そ、そんなわけないだろう！海星、お前が酔っているから風に当てようとし

てやっただけだ！」

海星「そうか…デートじゃないのか…」しゅん…

神奈子「なんでそんな悲しそうなのだ。」

海星「なんでって、そりゃこんな美しい女性からデートに誘われたと思っただけだ。勘違いだ。落ち込むに決まっているだろう。」

神奈子「なっ?!?!?美し?!?!?なっ…いまなんて?!」

海星「美しいって言ったんだよ。神奈子、君はとっても綺麗だ。綺麗な蒼色のサ

ラサラの髪、無邪気な笑顔、気品、どれをとっても素敵なお女性だと思う。」

神奈子「なっ…なっあ?!?!」プシュー

神奈子はもう湯気を出している

神奈子「介抱している私が倒れそうだ…。」

海星「具合でも悪いのか？」コツン

いきなりおでこを合わせる

神奈子「ひう…(近い!近いぞ!)」

海星「おでこが少し熱いな、顔も赤いぞ？大丈夫か？」

神奈子「海星…だめだ…うおおああ！」ドン！

海星「ぐはっ！」ポテっ

神奈子は最後の力を振り絞り絞り海星を押しした。

海星は縁側から落ちた

神奈子「ふう…ふう…こんな…こんなに私が…軍神と謳われた私が…」

神奈子「お酒を飲んで忘れよう。」

そうして神奈子は2人のいる部屋に戻って行った。

諏訪子「おー！おかえり！どうした？」

幸恵「気分がすぐれないんですか？すごい顔ですよ」

神奈子「いや！なんでもない！強い酒をくれ!!!」

諏訪子「あ、ああ！わかったよ！」

神奈子「くそお……！くそお!!」

幸恵「諏訪子様、神奈子様どうしたんですかね」ボソツ

諏訪子「さあ？なんか辛いことでもあったのかなー？」ボソツ

幸恵「海星さんと喧嘩……いや、そんなことはないはず……」

諏訪子「案外わかんないよー？」ボソボソ

.....

2時間後。

海星「イテテ……なんでおれあんなところに？」

諏訪子「そっいえばどこにいつてたのさ」

幸恵「おかえりなさいですー!!」

海星「外にいたよ。」何でかわかんないけど

神奈子「ふん！自業自得だ！」

海星「んー??？」

幸恵「なんですかねえ。諏訪子様…。」

諏訪子「んん、わかんないよお」ボソボソ

諏訪子「ま！今日はこのくらいにしとこうか!!眠いし寝よう!!」

幸恵「そうですね!!もう眠いです…！」

神奈子「そうだな…！」

幸恵「神奈子の布団はあちらに敷いてあります」

神奈子「幸恵ありがとう。」

海星「おやすみなさいだ、今日はもう頭が痛い。すまないが先に寝させてもらおうぞ。」

諏訪子「はい！おやすみ！」

幸恵「おやすみなさいですー！」

神奈子「…おやすみ。」

幸恵「神奈子様？海星さんとなにかあつたんですか？」

諏訪子「神奈子、様子がおかしいぞ？」

神奈子「ええい！聞かんでくれ！私にもわけがわからないのだ！」

諏訪子「うーん？ま、いいんだけどさ、じゃ。私たちも寝ようか」

幸恵「はい！神奈子様！おやすみなさいです！」



神奈子「ああ。おやすみなさい」

そう言いながら、諏訪子と幸恵は海星の部屋に向かう。

神奈子「おいおいおい  
!!!!!!」

幸恵、諏訪子「わあーびっくりした!!」

神奈子「それはこっちのセリフだ!!なんで海星の部屋に行こうとしている?」

幸恵「いつも3人で寝ていますよ?」

諏訪子「いつの間にか日課になっちゃったねー笑」

神奈子「?!?!」

神奈子「そ、そういうのは…お付き合いしてから…ではないのか?」

神奈子は案外ウブなようだ。

幸恵「んー……ま、家族ですからね！」

諏訪子「うーん、ま！そゆーこと！したいからするの！」

神奈子「…。」

幸恵「では！おやすみなさいです！」

神奈子「まで……。…寝る」ボソツ

諏訪子「え？なんて？」

神奈子「わたしも一緒に寝る。」

幸恵「え!?!どうしたんですか？海星さんと喧嘩したんじや？」

神奈子「喧嘩などしていない！一緒に寝るのもあれだ！まずは相手を知らないとな!!  
あとー人きりだと寂しいではないか！」

幸恵「そういうことなら…！ウエルカムです！」

諏訪子「はやくねるよー！」

神奈子「…。」（私としたことが…成り行きで殿方と…。一生の恥…。）

神奈子は案外ウブなようだ。

諏訪子「じゃー！」モゾモゾ

神奈子「なっ…ナチユラルに隣に…！」

幸恵「…おやすみなさい…。」モゾモゾ

神奈子「さ、幸恵まで…」

神奈子「ええい！」モゾモゾ

神奈子「顔が近い…人と寝るのは案外…いいかもな。」

神奈子は案外ウブなようだ。

## 洩矢の新たな神

八坂神奈子

side 幸恵

最近、私の生活はとっても楽しい!!

なんでしよう? って聞かれたら、一瞬で答えられます!

まさに! 海星さんのおかげです!!!!

わたしが、あれは…タケノコを掘っていたんです!

土の中から現れて…とんでもない妖力を持っていたり…古代の話をしたり…謎が多

い人ですが!

とってもとってもとーとーっても素敵な人なんです!

ふと気がつく和海星さんのことばかり考えてしまいます!

良く考えたら、昔から諏訪子様と一緒に暮らしてて、男の人と触れ合うことが新鮮でした!!

諏訪子様の独り占めは何故か許せなくなっちゃったり…。

今思うと…私って大胆なんですよーか??

わからないですね…!

まあ！わたしがやりたい用に行動するのです！  
人生1度きりなのです！

そんな私が宴会の次の日、目を覚ますと…？

『昨日やってきた、神奈子様。【海星さんの上で】寝ていたのです!!!』

幸恵「うわああああ神奈子様！海星さん!!!」

顔が近いです！なんでしょう！この胸の痛みは…！

.....

side 海星

ん…。今日は身体がやけに重い。

これが前世できいていた、二日酔いというやつか。

目を開けるのもめんどくさい。

だが、なぜだろう。今日はとつても布団が柔らかいのだ。

柔らかいだけでなく、繊細な感じがする。

これも二日酔いというやつか。聞いていたほど悪くないな…なんならこの二日酔いを楽しんでや

幸恵「うわあああああ」

突然幸恵が隣で叫びだした。

海星（しらん！俺はいま人生初の二日酔いを楽しんでいるのだ。邪魔はさせない！）  
そのまま海星はまどろんでいった。

.....

side 神奈子

幸恵「うわあああああ神奈子様!!海星様!!」

神奈子（なんだ朝っぱらから…!）

神奈子「んん…どうした。さっ」目の前に海星の顔がある。

神奈子「…。」

神奈子（落ち着け私。）

神奈子（どういうことだこれは。）

とりあえず現状をゆつつくりと確認していく。

神奈子（まず、私の寝ている場所だが…海星の上に抱きついている。）

ぎゅっ…

神奈子「うえっ…？」

海星（二日酔いの布団は素晴らしいな。）

神奈子（ひええ…抱きしめられてしまった。）

神奈子「ち、近い…」

神奈子（いやいや、まずどうしてこうなったのだ。）

神奈子（そういえば、昨晩はヤケになってたくさん酒を飲んだ。若干の思考力が低下していたと考えられる…あれは…4人で寝るも決めたあと。

諏訪子と幸恵が海星の両隣をとってしまった。）

神奈子（!!!）そうだ…。その流れで空いていた上を…？）

神奈子「ぐうう…。この私が…。こんな…。こんな…。」

神奈子「でも…温かいな…」ボソツ

(…ん…改めて近くでみると、とっても綺麗な顔…  
触れているからわかる…逞しいカラダ…)

諏訪子「うおおおおお!!チエストおおお!!」

神奈子「いて!!…あつ…。」

諏訪子の渾身のドロップキックで神奈子は名残惜しそうに海星の上からフェードアウトしていくのであった。

.....

side 海星

すつ…

(ん?軽くなったぞ。二日酔いおしまい!?おれの再生能力が高すぎたのか???)

諏訪子「かーいーせーい!おきろ!!このバカ!」ポカッ!

海星「いて!…んん、おはよう。諏訪子。」



諏訪子「ん…！おはよ！」ズンズン！

諏訪子は居間のほうに歩いて行ってしまった。

海星「んー？何不機嫌になってるんだろ」

海星「ん？」

部屋の隅でうずくまっている神奈子をみつけた。

海星「神奈子！おはよう！いい朝だな！」

神奈子「ビクッ！」

海星「神奈子？」

神奈子「あ、あ！ああ！お、あ、おはよう！じゃあ！め、飯だな！」

スタスタ

足早に去っていった。

海星「変なやつだな笑」

海星「さて！ご飯食べに行くか。」

ご飯はまだ出来てなかった。

神奈子（ひええ…逃げてきてしまった。もう忘れよう！切り替えていこう!!! 私は軍神

八坂神奈子だ!!)

海星「神奈子? まだご飯じゃないじゃないか笑

どーしたんだ? 笑」

神奈子「ひい…。」

諏訪子「きいてよ! 海星! 神奈子は今日ね!」

神奈子「うわああああ!」グイッ!

神奈子が諏訪子の口を塞ごうとする

諏訪子「うおっ!」ドシーン。

海星「大丈夫か?」

諏訪子「なにをするのさ! 今日には神奈子のお披露目のために国民の前でしゃべるって教えてあげようとしたのに!」

神奈子「あつ…えっ!? そうだったのか… 諏訪子、すまない。」

諏訪子「どしたのさ急に。 あ、海星と一緒に寝てたこと言われたくなかったの??」

神奈子「お! おい! 諏訪k」

諏訪子『しかも上で』



諏訪子「わーい！」とたとた

海星「いい匂い、楽しみだ。」

海星「神奈子？いこう？」

神奈子「あ、ああ！」すたすた

.....

## 2 時間後

諏訪子「国民よ。この度、大和の国の軍神と謳われた、八坂神奈子が我が国の新しい神となる。皆！信頼し、崇めるように！！」

国民「おお、聞いたことある！すげー強いらしいぞ」

国民「この国も安泰じゃあ！」

国民「これで神様が3人！みんなすごく強そう!!!」

国民「うおおおおお!!!」

諏訪子「八坂神奈子から、国民に向けて一言！」

神奈子「...」

(殿方と一緒にの布団で…抱き合つて…)

諏訪子「おい！神奈子…!?」ボソッ

神奈子「ん？あ、ああ…！」

神奈子「皆の者。大和の国から来た。八坂神奈子だ。よろしく頼む。

私がこの国を守ってみせよう。信仰せよ!!皆でこの国を創り上げていくのだ!!」

国民「……うおおおおお!!!」

幸恵「お家とはちがいますね!」

海星「まったくだ笑」

夜も更けて。

諏訪子「さて！そろそろ寝ようかな!!」

海星「そうだな。」

幸恵「そうですね、ふああああ」

神奈子「あ、ああ、そうだな。」

諏訪子「神奈子、今日はどうやって寝るの？」

神奈子「ふえ？」

神奈子「あ、ああ。今日は別の部屋で…」

諏訪子「えー！一緒に寝ようよ！」

神奈子「一緒に…。ねる。」

幸恵「お家の神奈子様はほんとに違いますね笑」

海星「まったくだ笑」

こうして洩矢の夜は、また素敵な時間を紡いでいく。

## 見回りと大根役者

諏訪子「今日は国の安全を見回りにいくよ！」

幸恵「はい！諏訪子さま!!」

神奈子「ほお…そういう仕事もあるのか。」

海星「散歩がてら俺もいくか…」

幸恵「おじいちゃんじゃないんだから…ちゃんと行きましようね！」

海星「はいよ笑」

………

4人見回り中

村人「やや、神様…いつもありがとうございます！」

諏訪子「いいのいいの！今日もせいが出るね！」

神奈子「なにか困ったことはないか??」

タツタツタツ！子供が走ってきた

子供「…謎の生き物が…。向こうで暴れて…」ぐすん…。

幸恵「!?なんですって! 諏訪子さま! 神奈子さま!」

諏訪子「はやくいこう! 案内してくれ!」

子供「こくり」

海星「…。」

幸恵「いきますよ! 海星さん?」

海星「…ああ。」

神奈子「謎の生き物って…。」

諏訪子、幸恵「こくり…。」

海星「さて、どうする?」

諏訪子、神奈子「民の危機だ! 行くしかないよ(だろ!)」

海星「ふふ、そうだよな。いこうか。」



幸恵 「気をつけて頑張りましょうね……!」

海星 「先頭は俺が行く。離れるなよ。」

諏訪子、神奈子、幸恵 「こくり」

子供 「……コナイノ？」

海星 「お待たせ、今行くよ。」

諏訪子 「どーしたの？海星!!はやくはやく！他の民が襲われちゃうかもよ!」

神奈子 「……おい！」

幸恵 「諏訪子さま落ち着いて！」

諏訪子 「……はい……。」しよぼん

子供 「ホー!はヤクハヤク!!」

……

移動中

村の外れまで来た

子供 「あれレ?いなくなっチャツたのかな?村から出ちやつたのかな?」スタスタス

夕

村の外に出ていく。

諏訪子 「お!おい!!あぶないよ!!!」

神奈子「ここまできるともう見え見えだな。」

幸恵「でも、あの子ども危険に晒されるし、行くしかないですね！」

神奈子「ああ。」

海星「人を操れるレベル…。大妖怪レベルかもな…気をつけていこう。」

諏訪子「え？え？」

子供「コツチダヨ!!はやくハヤク！」

幸恵「まさか…諏訪子…さま？」

諏訪子「なに??どゆこと?！」

神奈子「…気づいていないのか？」

海星「あの子供は、操られている。俺らを最初からどこかに連れていこうとしている」

諏訪子「ええええええ!!!今思い返してみると…この…大根役者がああああ」

!!!

諏訪子の怒りの声が森にこだました

## こころ操り

子どもはそのままズンズン進み、何やら洞窟のようなところに来たところで止まった。

子ども「はイロ！」

海星「ああ、ここまでありがとうな。」トンツ

子どもを気絶させる。

諏訪子「大丈夫なの??」

海星「うーん、多分操られている術式は…。あつたあつた」

額にトゲが刺さっている。

神奈子「よく気づいたな…。」

海星「こういうのは集中して妖力を探すんだ。覚えておくといい。」

さて、引き抜かなくてはな…。

海星「引き抜くぞ…。脳に干渉しているかもしれない。集中する、俺に触らないでくれ。」

幸恵「は、はい!!」

神奈子、諏訪子「…ああ。」

スツ…精神を研ぎ澄ませる…。

海星「いくぞ。」

ピツ…。…ツウー

なんとトゲの先には透明な糸がのびており、子どもの脳に干渉していた。

幸恵「ごくり。」

ツウー…。そのまま慎重に引つ張る

シユル…シユルシユル…なんと糸が意思を持ったかのように海星へと襲いかかる。

チク、海星の体内に入り込もうとしている。

諏訪子「ナツ…!!」 諏訪子が心配した顔をするがお構い無しだ。引き続き抜く。

ツウー。

海星「…ここだ！」 スルスルスルスル!!

何とか無事に引き摺り出せた。

海星「はっ！」 ピキピキピキ。

寄生生物のように生きているかのような糸を水晶で固める。

海星「ふう…。」

神奈子「…大した集中力だ…。汗一つかいてない。」

諏訪子「すごいぞ！さすが海星！」

幸恵「すごいのです!!」

海星「ありがとう。なんとかなったな。大体敵の技の気質がわかった。」

神奈子「刺されたら1発で終わり…たちまち操られる。」  
諏訪子、幸恵「…ごくり。」

海星「だが、操作系は本体が非力なことが多い。落ち着いて対処していこう。」

神奈子「罨などがあるかもしれない。」

諏訪子「慎重にいきましょうね！」

幸恵「子どもはどうします??」

海星「…ここに置いていこう。巻き込まれても困る。多少の虫刺されは我慢してもらおう。」

幸恵「ですね笑」

洞窟の奥へと向かってすすむ。

海星「明かりをつけよう。」

海星が松明を水晶で作ります。

諏訪子「ぬめぬめしてて薄気味悪いね…。」

神奈子「早く帰りたいな…。」

幸恵「全くです…。」

海星「ああ。はぐれないように…。」

洞窟の幅は以外に広いが枝分かれしており、なおかつ暗い。

海星「…気をつけていこう。とにかく操られないようにな。」

幸恵「もう…怖いと言わないでくださいよ…。」

神奈子「ひどいなあ…まるで操られることが。」

諏訪子「悪いことみたいじゃないか。」

海星、幸恵「「えっ?。」」

ふと後ろを振り向くと神奈子と諏訪子が居なくなっている。

海星「なに?!?!」

幸恵「諏訪子様!?!神奈子様!?!」

いつの間に……。どうやって？  
なぜ、幸恵と俺は無事なんだ。

海星「とにかく……。先に進もう。」

幸恵「ひええ……。はい……。」

海星「……。」ぎゅっ

手を握ってやる

幸恵「か、海星さん……。」

海星「大丈夫。ちゃんと守るよ。」

幸恵「はい……！行きましょ！」

そうして最奥へと向かう。空気の流れるにもう少しだ。

幸恵「あ！海星さん……！うっすらと明かりが！」

開けた空間がでてきた。

海星「神奈子と諏訪子……か？」



そこには2人が下を向いて立っていた。

## あやつり人形

幸恵「諏訪子さま…？神奈子さま…？」  
諏訪子と神奈子はなにも喋らない…。

ヒュツ！

突如2人が飛びかかってきた

海星「…幸恵！」バツ！

幸恵「キヤア！」

ガシツ!!

海星は幸恵を庇ったが、神奈子と諏訪子に掴まれる

海星（ちつ…遅れをとったか…。でも、なぜだ…攻撃してこない…？）  
海星「幸恵！さがってる！」

幸恵「はい！」

??? 「よしよしよし！やったぞ!!」

暗闇から、声が聞こえてきた。

海星「何者だ？」

幸恵「こんなことして！卑怯ですよ！」

??? 「ぼくの名前は…特にないよ。強いて言うならただの人形。」

幸恵「…どういことなの…!？」

海星「なるほどな…。お前さては…。"捨てられたな"？」

人形「ふふふ、その通り。人に捨てられちゃって自我が芽生えた。」

幸恵「なっ…」

人形「あ、でもね捨てられたことを恨んじやいない！おかげでこうやっていま生きている。」

人形「し、か、も。『強大な能力』を手に入れてね？」

海星「ああ、どうやって操っているのかわからないよ」

人形「ふふふ、だろうね。」

幸恵「あなたの狙いはなんなのですか!? 諏訪子さまと神奈子さまを返して！海星さんを離してください！」

人形「やだよ。だめだめだめ。この2人はこの国の神様…なんでしょ？それを操ることに成功したんだ。これを利用しない手立てはないよね。」

海星「…どーするつもりだ。」

人形「そうだなあ…この2人の神様に」

幸恵「…ごくり。」

海星（…。）

人形「僕のこと好きになってもらいたい!!!」

海星、幸恵（あ、こいつ馬鹿だ。）

人形「まず。どうやったら好きになってくれるんだろ！

とりあえず、能力で…。」

海星「なあ、能力でいじったって、ほんとの愛とはいえないよ。」

人形「なっ…！まあ…そうだよな…。」

幸恵「…！」（ちよろ…い!?）

海星「人形のお前にはまだ分からないかもしれないが、普段の何気ない行動からそういう素直な感情は生まれると聞いたことがあるぞ」

人形「ば、ばば、ばかにするな！それく、それくらい知っているぞ！」

海星「そうか…さすがだな。」

人形「そうだろ！ふっふっふ」

人形「だからな！えーつと…えい！」

ビクビクン。

海星を掴んでいる、諏訪子と神奈子2人の身体が震えた。

海星「おい!!なにをした?!?!?」

人形「ぼくへの好きを生まれさせるために、2人を【素直な感情で行動する】ようにした! ついでに…! えい!」

ビクビクン!

また2人が震える。

人形「2人の意識を戻させた!ちゃんと僕のことを好きなのを本人が確認できるようにな!」

幸恵「……。ん?それつてもう既に2人が人形さんのことを好きじゃないと成り立たないんじゃない?」ボソツ

そんな幸恵の眩きは聴こえず

人形「さあ!!! 洩矢の国の神よ!!! 己の心のままに動き出せ!!!  
ぼくのことを好きになるのだ!!!」

人形は手を広げ天を仰いだ。

諏訪子「だいすきだよ!!!」

神奈子「…すき…だ。」

そう言つて2人は

『海星に抱きついた。』



## 生き恥

幸恵「あちゃー…」

海星「お、おい…。さすがの俺でもびっくりするぞ。」

---

side 諏訪子と神奈子

チクリとした瞬間に急に意識を失った。

その後、再び目を覚ましたときには…

【大胆にも海星に告白していた。】

諏訪子、神奈子

(うわああああああ) プシユウ…

顔が真っ赤になる。

神奈子（なんなんだ…？意識があるのに…操られているのか??）

諏訪子「海星いつもありがとう。だいすきだよ。」

（なんなのこれ!!!素直に全部はなしちゃう!）

神奈子「なあ…か、海星!!その…諏訪子と幸恵ばかりみるな!出会って間もないが、少しは私のことも見てくれ…。」

（…恥ずかしい…。これが…本心…だと?）

海星「ああ…。2人とも、落ち着くんだ。おれも2人のことをちゃんと大切に思っているよ。」

神奈子「そうやって、お前は！またのらりくらりと躲すのか！！」

諏訪子「そうだそうだ！少しは想ってる方のことも考えてよね！」

（あああああ…穴があつたら入りたい…。）

諏訪子「こうなりや実力行使だ！」（まって！）

神奈子「そうだな！」（お、おい！生まれ！私の身体！）

海星「お、おい！2柱の力が…うわっ」

そう叫びながら2人は海星を押し倒し…

海星を…

人形「させるかあああああああ  
パチン!!  
!!!!!!」

人形が4人の目の前に現れて指を鳴らした。

神奈子と諏訪子の動きが止まる。

人形「ああああ、もう!!!なんだこれ!イラつきすぎて出てきちやったじゃないか!!!!」

人形「僕のことを好きになって欲しかったの!!!!解除!解除!!!!なにが海星だ!!!!」

海星「あ、おい。」

人形「うるせえ!!!男の敵め!!」

幸恵 「人形さん…後ろ…。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

人形 「あ？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そこには洞窟の形が変わってしまふほど怒りが頂点に達したこの国の頂点の2人が立っていた。

諏訪子 「海星や幸恵の前であんな醜態を…。」

神奈子 「殺す…。殺す…。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
ゴゴゴゴゴゴゴ

洞窟がうねり始める

諏訪子、神奈子 「覚悟はできてるんだらうな（ね）？」

人形「ひっ…」

幸恵「さよなら。」

ぼふつ。  
実際はこんな優しい音ではなかった。

その日地図から洞窟は消えた。

---

---

幸恵「ふうくなんで、私と海星さんは操られなかったんですかね？」  
神奈子「もうそいつの話はやめてくれ。」

諏訪子「うう……。でも気になるね。」

海星「それはあいつの人形のモデルが答えだな。」

諏訪子「モデル？」

海星「あいつは蚊の人形だったよ。」

「おそらく、蚊に刺されたら操られてしまうのだろう。」

諏訪子「え！そうだったの??？」

神奈子「気が付かなかった……。」

海星「2人は姿を見る間もなく、跡形も残さず消してしまったからな笑」

諏訪子、神奈子「ハハハ……。」

幸恵「それがなんで答えなんです？」

海星「俺は蚊に刺されないように能力で昔いじったし、幸恵は運だろいな笑」

幸恵「なんだ：そんな理由だったんですね：。ほんとに運が良かったです。」

諏訪子「なんだよ！幸恵も自分に正直になっっちゃえばよかったのに！」

海星「やっぱりあれは本心なのか？」

神奈子「うえ？  
：そ、そんなわけないじゃないか!! 咄嗟に相手を挑発す

るための嘘だ！」

海星「そうなのか：：そうだよな！」

神奈子「ああ：。ああ。そうだ：」

諏訪子「え？私は本心だよ！海星!! だいすき！」



海星「諏訪子は、本心だったのか？ふふ、ありがとう。」

神奈子（あっ…くっ！）

諏訪子「にやり」（神奈子につんつんしながら）

神奈子「わ、わたしもほんす」

海星「さて！家に着いたぞ!!」

海星「ん？神奈子何か言ったか??」

神奈子「いや…なにも…。」

海星「そうか??まあ、とにかく危ない能力をもったやつを倒せてよかった。頭がぎれるやつだったら、世界規模で危なかった。」

幸恵「そうですね、良かったです…。

ま！諏訪子様と神奈子様の2人がいれば問題なしです!!」

海星「それでなんだが…諏訪子、神奈子、幸恵。」

海星「旅に出ようと思う。」

## 守矢神社との別れ

諏訪子「え？」

幸恵「いま…なんて??」

神奈子「…どこにいくんだ??」

海星「いや、まだ決めてはいない。

とにかく世界を見て回りたいんだ。」

幸恵「つてことは…当分ここには…帰ってこないと?」

海星「ああ…そうなるね…。」

神奈子「どうしてだ！」

不安と焦りの混じった顔で聞いてくる

諏訪子「もっと一緒に居ようよ!!」

幸恵「そ、そうですよ…。」

諏訪子「もしかして…嫌いになっちゃった?？」

諏訪子に至ってはもう泣きそうだ。

海星「落ち着け。お前ら3人のことを嫌いになる訳ないだろう。

大切な仲間、大好きだ。」

諏訪子「なら!っ…。」

海星「最近、洩矢の国の外の妖怪の動きが過激になっているとの噂を聞いた。」

海星「それに対抗すべく、他の国の人々も妖怪に対抗する動きをみせているらしい。」

海星「俺の本来の夢は妖怪と人間の共存だ。問題があるならばそれをなんとかしたい。」

神奈子「じゃあ…もうお前の中では決まっているんだな。」

海星「ああ。この国は、諏訪子、神奈子、幸恵。

お前らがいればもう安泰だろう。俺がすべきことはもう無い。」

諏訪子「ううっ…。」ダツ…。

諏訪子は家に駆け込んでしまった。

幸恵「あっ！諏訪子様！」

心配になったのか幸恵も追いかける。

神奈子「寂しく…なるな…。」

海星「ああ…家族…のようなものだからな。」

神奈子「なあ…。東方 海星。」

海星「なんだ？」 不意に名前を呼ばれたので振り向く。

ギユツ。

神奈子に洞窟を出て以来、再び抱きつかれる

海星「…。」

神奈子「私にとっては、八坂神奈子にとっては、お前は家族の一員だ。それほどお前は大切に、大好きなんだ…。」

「さつきも、今も全部本心だ。

私のこと、忘れないでくれよ？」

そういつて涙を浮かべた神奈子は微笑む

海星「神奈子。」ギユツ…。

そう言つて神奈子を抱きしめる。

海星「そう言つてくれて嬉しいよ。神奈子、おれも神奈子のことが大好きだ。

「その気持ちとして。これを…キミに…」シヤラララ

そう言いながら杖としめ縄を模した、髪飾りを水晶で造る。

神奈子「…ありがとう…一生大切にしよう。」

照れているのか、下を向く。

海星「また会えるさ。お互いまだまだこれからだろう？」

そう問いかけると。

神奈子「ああ！海星に勝てるほどに強くなつてみせるよ。」

いつもの元気な神奈子に戻つたようだ。

side 諏訪子

ちょうど想いを伝えられて、これからもっと一緒に居られると思つた矢先：

諏訪子「あーうー。」

そうだよね…海星は私達だけの人ではなかった。

強大な力、それは洩矢ではなく、もっと大きな世界に使われるべきである。

それは十分すぎるほど思い知らされていた。

幸恵「諏訪子様…。」

そこに追いついた、幸恵が家に入ってきた。

諏訪子「ごめんね…幸恵。」

幸恵「なんであやまるんですか。いいんですよ。洩矢の私達らしく!!!元気で!!!笑顔で!!!見送ってあげましょう!!!」



いつもと変わらず元気いっばいな声に似合わず、幸恵は泣いていた。

諏訪子は分かっていたのだ。

一番悲しいのは、幸恵なのだ。

風祝だが…諏訪子や神奈子とは違う、ただの人間なのだ。

海星が言った旅に出る。

これは幸恵にとって、もう二度と会うことが出来ないことを示していた。

諏訪子「ごめんね…。そうだよね!!海星がいっばい頑張れるよう!!!笑顔でね!!!」

諏訪子「ありがとう、幸恵!わたしたち3人いれば!!!なんでも出来るんだから!!!」

幸恵 「はい!!! 諏訪子様!!」

神奈子 「なんだい？ さつそくのけものかい？ 笑  
混ぜておくれよ。」

幸恵 「えへへ！ もちろん！ 神奈子様も大切ですよ!!!」

微笑ましい家族の絆はより一層深まったようだ。

海星 「ふふふ、洩矢も安泰だな。」

幸恵 「さて！海星の洩矢で最後の夜です!!一緒に寝ましょう！」

神奈子 「そうだな！」

諏訪子 「なんだい！神奈子！一緒に寝るのは反対じゃなかったかい？笑」

神奈子 「いいんだいいんだ！海星は私の心に決めた人だからな！」

諏訪子 「なにー??負けないよ!!」

幸恵 「わたしもです!!」

海星 「おいおい笑」

こうして海星の洩矢最後の夜は  
ゆつくりと4人で幸せに時を刻んでいった。

## 今の妖怪

海星「じゃあ、さよならだ。」

神奈子「ああ……またな。」

諏訪子「うう……またね……海星！」

幸恵「……。さよならです。海星さん、ほんとにありがとうございました……どうか……お気をつけて。」

海星「幸恵。お前は本当にすてきな女の子だ。この世の誰よりも優しく暖かい心をもっている。」

こちらこそありがとう。楽しかったよ。」

そう言っつて抱きしめる。

幸恵「あう……。生きてて良かったです……。」

海星「はっはっは、幸恵の人生はまだまだここからだ。2人を支えてやってくれ。」  
幸恵「はい!!」

幸恵の目には、もう不安もなく輝いている。

海星「ふふ、頼もしいな。」

諏訪子、お前の国、居心地良かったよ長い間、世話になったな。

神奈子、すっかりやれよ、お前なら大丈夫だ。頼んだぞ。」

諏訪子「掘り出ただけでこんなにお釣りが貰えるなんて思わなかったよ笑  
一緒に過ごせて楽しかった！ほんとまた来てね？」

神奈子「ふふ、任せておけ。軍神の名に誓おう。」

海星「よかった。」

海星「…。名残惜しいが。」

幸恵「こくり」

海星「じゃあ。さよならだ。」

幸恵「…行つてらっしゃいませ、海星さん！幸運の導きがあらんことを…。」

神奈子「行つといで！誰にも負けんじやないよ。」

諏訪子「またね!!海星!!」

海星「ああ。またな！」ザツザツザツ

海星は洩矢の国を後にするのであった。

side 幸恵

幸恵 「ついに行ってしまいましたね…。」

神奈子 「ああ…そうだな。」

諏訪子 「さびしくなるね…。」

幸恵 「なんででしょう。なぜか…」

諏訪子 「どうしたの??」

幸恵 「…いえ!なんでもないです!」

神奈子 「なんだ笑 お腹でもすいたか?笑」

諏訪子 「そういえば!!早速ご飯でも食べよ!」

神奈子 「おー!で?誰が作る?」



今まで頼りっぱなしだったからな」

幸恵「ふふ、任せてください！」

諏訪子「やったー!!じゃ!戻ろう!」

神奈子「ああ、たのしみだ。」

スタスタスタ

諏訪子「さちえー?はやくもどるよー!」

幸恵「はーい!」

幸恵「海星さん…またどこかで…いつの日か…会える気がします。えへへ、楽しみで  
す!」ボソツ

幸恵「さーて！海星さんのぶんも補って張り切っていきます!!」

スタスタスタ!!

side 海星

さて、久しぶりの一人旅。

どうしようか、どこへ行こうか

海星「つて考えるのも楽しいよな。」

とりあえず情報収集だな。

洩矢の国の外の情報が欲しいので、国境付近まで飛んでいく。

海星「お、団子屋だ。」

みると昔ながらの（いまが昔だが）  
団子屋らしい団子屋があった。

海星「情報収集といえど！ここしかないな。」

団子屋の前に降り立ち

海星「すいません。」

早速入る

おばちゃん「はい！いらっしやい！」

元氣そうなおばちゃんが一人で経営しているらしい。

海星「お団子みってくださいなー！」

おばちゃん「はい！お茶もいれるからまってね！」

海星「わー、ありがとう！」

海星「いい店みつけたな。」

数分後

おばちゃん「はい、お待ちどーさま！」

これまた昔ながらの（○）団子がでてきた。

海星「おおー、美味しそうだ。」

海星「いただきまーす!!」

おばちゃん「なんでまたこんなところに1人で？」

海星「ん？まあいろいろあって、洩矢の国から来たんだけど、おばちゃん最近変わったことは無い？」

おばちゃん「変わったことねえ：風が強いとかかねえ？」

海星「あー、そう？平和だね。妖怪とかはいないのかい？」

おばちゃん「あー、妖怪！そういうえば最近、もう少し行ったところの山は

【妖怪の山】

って呼ばれるくらいに妖怪が集まっているらしいよ！

お兄さんも気をつけなね！」

海星「ほお……。なるほど。」

おばちゃん「なんでも、人が攫われて決闘をさせられてるだけ：恐ろしいねえ。天狗  
だか、【鬼】だか。」

海星「!？」

海星「いま、おばちゃんなんて!？鬼??そう言ったのか？」

おばちゃん「ああ、たしかに、鬼。そう言ったよ。近頃人を攫っているらしいよ。こ

わいねえ…」

海星「そうか…。ありがとうご馳走さま！

お釣りはいららないよ！」

おばちゃん「まあ！こんなに、もらいすぎよ！」

海星「楽しい話を聞かせてくれたお礼！」

おばちゃん「なら、おにぎりを持たせてあげようね！バチが当たるよ、こんなに。」

海星「なら、貰ってくよありがとうね」

そうして、海星は団子屋を後にした。

海星「…鬼…ねえ…。また別の鬼が増えたのか。とにかく行ってみるか。」

## 一人旅編

## 邂逅

ほのぼのと歩くつもりだったが

先程からずつとつけられている気がする

パツと見で妖力の出処を探しても見つからない。

それならば逆に流して、どこに繋がっているのかを見るだけ。

すると、なにやら空に別次元のような気味の悪い裂け目が出来ていた。

これはほつとけないな…。

瞬時に気配を消し抜刀する。

「おい。」

チャキ。

背後をとった。

？――――――――――

side???

???"「なんなのかしら？この殿方は？」

わたしは妖怪と人間の共存を願う他とは変わった妖怪。

周りからはそう思われても仕方がない。

本気でそれを願っていて、すべてをかけて実現したいと思う夢なのだから。

いま、団子屋に男が1人入っていった。

しかし、1人。という表現は似合わない。

この男、人間ではないのだ。

精巧に化けているが、纏っている雰囲気人がとはちがう。

きつと団子屋を襲うのだと思い、警戒していたが

和気あいあいと会話したあと、礼儀正しく店をあとにした。





??? 「…。ここまでのようね。とんでもない人に目をつけてしまったみたい…。貴方に興味が湧いただけ、人間を襲わない人外の存在にね。」

海星 「あつ」殺気をしまう

海星 「大丈夫だ。君を襲うつもりもない。」

??? 「えっ？」

海星 「いや、すまなかつたな。いきなり襲ったりして。

でも、盗み見はよくないよなあ。」

??? 「つけていたことは申し訳ございませんでした。

まさか、この能力に対応できる人がいるなんて思いませんでしたわ。」

海星 「まあ、感覚でな。長生きしていると鋭くなってしまう。」

??? 「妖怪……？」

海星 「んー…元人間。つてところかな？」

??? 「難しい人生を送ってきたのですね？」

ところで、わたしは八雲 紫、貴方は？よろしければお名前を伺いた

いのですが。」

海星 「ああ、私の名は東方 海星だ。海星でいい、よろしくな。」

紫 「海星、よろしくお願ひしますわ」

海星 「それで？妖怪の君が、なんでわざわざ人を襲わない人外の存在を気にしていたのかな？」

紫「それは…。」かくかくしかじか

紫はそれまで歩んできたことと

妖怪と人間の共存について話した。

紫「…つてことですの。」こんなに真剣に聞いてもらったのは初めて。

海星「ふっふっふ…。」

紫「…。」やはり笑われてしまった…。

海星「素晴らしい夢じゃないか。人と妖怪の共存。

しかも私の考えより遙かにしつかり考えられている。興味深いね。」

紫「…えっ?」

海星「こんなところに私と同じ夢を持った人がいるなんてね。」

紫「笑わないんです…?」

海星「誰かが全力を注いでいることを笑わないよ。  
それに私も君の夢の実現には賛成だ。」

紫「…!!」

海星「私に出来ることなら、協力しよう。」

## 握手

紫「なんと…協力してくれると…。」

紫は震えながらよろこんでいるようだ。

海星「すてきな夢だからな、一緒に実現させて見せよう。」

紫「…。」

ありがとうございます。

改めて、よろしくお願いします、東方 海星さま。」

海星「ああ、改めてよろしくな、八雲 紫。」

紫と海星は握手を交わした。

「これが後に、人間と妖怪という存在に大いなる影響を与える事を2人はまだ知らない。」

海星「さて、まずは…。仲間を増やしていかないとな！」

紫「仲間…ですか…？」

失礼ですが…海星以外、今までどの妖怪もこの夢を馬鹿にしてきましたのよ。」

海星「まあ、仲間というか、理解者…だな。

心当たりがある。

古い古い種族なんだ。」

紫「鬼…ですわね？」

海星「そうだ。さすが聞いていただけ話が早い。」

紫「すみませんでした…、ですが、なんで鬼なんですか？」

海星「太古の昔。人間だった俺に手を差し伸べてくれたのが鬼だったからだ。

人間を攫っていると聞いたが…。本質がもし変わっていなければ…きつと力になっ

てくれるかもしれない。」

紫「なるほど…！わたしもほかの種族のところに当たってみますわ！」

紫の顔に希望と焦りがみえる

海星「まあ時間はある。のんびりいこうじゃないか。」

紫「…ええ！気長に参りましょう！」

紫「そうだ、私を呼びたくなったらいつでも呼んでくださいね。どこからともなく現れますから。」

海星「ほんとに便利な能力だな…笑

ああ、頼りにしてるよ。」



紫「…では！」にゆん。

そう言つて紫は早々と消えた。

海星「さてと、目的は出来たし！のんびりと一人旅を再開しますか！」

そうつぶやきながら、海星は歩を進めるのであつた。

海星「とりあえずは妖怪の山とやらに向かうか。

妖怪の情報は妖怪に聞くべきだな。」

海星移動中

遠くの方に煙が出ているのを見つけた。

海星「ん？なんだあれ？火事では…なさそうだが。」

そのまま近づいてみると…

海星「温泉…か！すごいな。」

溪谷の間に立派な温泉があつた。

海星「これは…入りたくなくなってしまふのが…生きているものの性だな。」

そう言いつつ向かうと

がやがやわいわい

温泉の前に人だかり？が出来ていた。

海星「なんだなんだ??」

うお!!

タヌキの妖怪「うわあああ」 ドシーン!

先程たっていたところに妖怪が降ってきた。

タヌキの妖怪「きゆう…。」

海星「お、おい、どうした??大丈夫か?」

タヌキの妖怪「おいらは温泉に入りたかったただけなのに…」

海星「入れなかったのか??なんで?」

タヌキの妖怪「温泉に入れるのは言い伝えによって、1日1種族だけと決まっているらしく…。」

海星「ふむ…。」

タヌキの妖怪「安全に配慮した結果、腕相撲で決めているのですが…、鬼が現れてから誰も勝てなくて…。」

海星「あー…なるほど。お前はよくやった。

あとは任せておけ。」

タヌキの妖怪「強すぎるんです！無理ですよオ…。」

海星「まあ見てなつて。」

そう優しい声の反面、海星は

海星「温泉の前に一汗かきますか。」

珍しく、やる気に満ちていた。

## 温泉ふあいと

海星はそのままタヌキの妖怪が飛んできた  
もとい温泉のほうに歩いていった。

青鬼「よっしやあ！今日も俺らの勝ちだ!!

もう敵なしかあ？挑戦者はいないのかよオ！」

猿の妖怪「…くう…。勝ち目が無さすぎる…もう二度と入れないかもしれないな…。」

猿の妖怪の子供「そんなあ…父ちゃん…。」

犬の妖怪「仕方ない…鬼に目をつけられてしまつてはな…。」

腕相撲っていう安全に配慮してくれてるだけ、感謝しよう。」

海星「おー、ここか！イザナギ温泉…？」

海星（なるほど、1種族しか入れなくしたのはアイツだな？それで種族同士でぶつか  
るようにするよう仕向けているのか…）

いかにもイザナギが考えそうなことだな。）

さてと。

海星「あの一、温泉に入りたいんだが？」

青鬼「へいへい！お兄ちゃん見ない顔だね！

ここはな、古くから1日1種族しか入れねえ決まりになってるんだ。」

赤鬼「腕相撲で勝負を決めてるんだが。」

青鬼「お兄ちゃんみたいない腕じゃあ、勝負にならないぜ？」

赤鬼「悪いことは言わねえ、出直してきなあ！」

海星「なるほど。腕相撲に勝てばいいんだな？」

猿の妖怪「お、おい！人間のお兄ちゃん！危ねえぜ  
そもそも人間が来るところじゃねえぞここは！」

海星「まー、いいじゃないか。温泉に入りたいたんだ。」

赤鬼「なんだ？面白いじゃねえか。」

犬の妖怪「人間がこんな所に来て…。」

猿の妖怪の息子「お兄ちゃんががんばれ〜！」

猿の妖怪「こら、人間なんかを応援するんじゃない!!」

海星「ふふ、頑張るよ。」

さて、最初は誰がやる？」

青鬼「くつくつく、ほんとに後悔させてやるぜ…。」

がやがやがやがや

妖怪たち「なんだなんだ??？」

妖怪「なんか人間のあんちゃんか、鬼に喧嘩売ったらしいぜ！」

ワイワイがやがや

???'「ほお。それは楽しそうだねえ。」

海星と青鬼の周りにはもうすごい人ばかり？（妖怪）が出来ていた



海星「さあ、こいよ。」

青鬼「悪いが、嘘はつけねえから、本気でいくぜ？」

海星「昔と変わらないな笑」

青鬼「なにをわけわからんことを」

スっ…

両者腕を出す。

ガシイイ!!!

お互い腕を組んで睨み合う

海星「ここまで盛り上がったなら、魅せないとなあ。」

赤鬼「両者見あって、見あって!!…はっけよーい…。」

妖怪たち 「二のこつたあああああ  
!!!!!!」

一斉の開始の合図で鳥たちが逃げる。

ズシン!!!!

青鬼の腕に力が籠る

青鬼 「うおらあああああ  
!!!!」

海星の腕がグイッと持つてかれて

妖怪たち 「二ああ〜。」

赤鬼 「まあ、こうなるか…勝者!!!! 青おr」

??? 「まちな!!」

ザワっ!

妖怪たち 「?」

??? 「まだ勝負はついてない…だろ?」

青鬼 「くっ…」ぷるぷるぷる

海星 「…その通り。」ぐぐ…。

海星は3センチほどのところで耐えていたのだ。

青鬼 「なん…だ…動か…」

青鬼 (まるで地面をつかんでいるような感じだ…)

海星「鬼はやっぱ力がつよいな。」

ググググググググ  
!!!!

徐々に青鬼を押し返していく

青鬼「うお…お…お…うおおおお!!!」

妖怪たち「「うおおおおお!!!すげえ!!なんだあの兄ちゃん」」

海星「じゃ、いくよ?手加減なしだ。」

青鬼「なにつ!」

海星「おらあああ  
!!!!!!!」

どがあああん!!

青鬼をさっすきのタヌキの妖怪のように腕相撲の体勢から一回転させて吹き飛ばす。

海星「勝者は？」

赤鬼「なっ…勝負!!!人間!!!!!!」

妖怪たち「「「うおおおおおおお!!!!!!」」」

海星「よーし!!これで温泉だ。」

???「面白い…面白いねえ…。」

## 鬼の四天王と古の

海星「さて、これで温泉に……！」

??? 「まちな！」

唐突に声をかけられる。

先程勝負を見極めたときの妖怪と同じ声だ

海星（女の声だな。）

声の主を探してみると

??? 「ちよーつとごめんよ。」

そう言いながら、集まった妖怪をかき分けて

金髪のロングヘアで立派な赤いツノが生えている美しい女の鬼がでてきた。

??? 「わたしの名前は星熊勇儀。妖怪の山の鬼の四天王

お兄さん、面白いね。

わたしとも勝負を…してくれないかい…?」

ギンツ。

その一言を勇儀とやらが発した瞬間。  
プレッシャーで周囲の空気が変わった。

先程までがやがやしていた妖怪たちが萎縮している。

妖怪たち「ごくり。」

海星「戦う義理はない…訳では無さそうだな。」

勇儀「ああ…。わたしも鬼だからね、温泉をかけて勝負といこうじゃないか。

まあ、温泉なんて…どうでもいいんだけどね?

お兄さんに興味湧いちゃったよ。」

海星「おいおい笑

本音がでてるよ…。」

勇儀「じゃあ、勝負といこうか。」

海星「ああ、腕相撲で…？」

ズガン。

勇儀「あーあ、土俵が壊れちゃったねえ…。」

お兄さん…どうしようか？」

妖怪たち「ひっ…。」

ざわざわざわ

海星「ふふふ、どうしようかね。

おねーさん？」



勇儀・海星「…。」

ヒュッ

ヒュッ

お互いの姿が消える

ドンツツ

ガラガラガラガラ  
!!!!

お互いの拳がぶつかり、立っていた場所が割れる。

妖怪たち「逃げろおお!!」

鬼たち「勇儀姉さんが闘ってるぞ！なんだなんだ?？」

いつの間にか周りのギャラーは鬼に変わっていた。

海星「ふう、おいおい。俺が普通の人だったら消し飛んじやうよ？」

勇儀「あははは！お兄さんほんとに面白いねえ：

ゾクゾクしちやう…！」

ガン！ガツガツガツ!!!ガツゴツ!!!  
勇儀の連撃をいなして行く

バシィ!!ドツ!!!

海星「はあっ！」

ドン!!

ずぎぎぎ  
勇儀「ほお…。」

決まったかのように見えたカウンターも

勇儀は腕をクロスして防いでいた。

勇儀「やるねえ！お兄さん！」

海星「懐かしいな…ほんとに…。昔を思い出すよ。」

勇儀「よくわかんないけど、もっと思い出させてあげるよ!!」

ガツ!!!  
ガン!!

勇儀の細い腕から想像できないほどの威力の突きが連続で繰り出される。

ヒュッ! ヒュン!!

海星「ほんとにあぶないな。 …でも、ここだろ??」

ゴッ! バキッつつ!!

合わせてお腹に掌底を当てる

ズんつつ!!!

勇儀「ぐっ…!!」

鬼たち「ほんとに何者なんだあのあんちゃんは。勇儀姉さんが押されてる？」

勇儀「くつくつく…ほんとにわたしの目に狂いはなかったよ。

全力でいくよ!!」

海星「ああ!!こい!!」

勇儀「すう…。」

勇儀の纏っていたオーラが

動のイメージから静のイメージに切り替わった気がした。

海星「…。」こちらも構えをとる

勇儀「三步必殺!!」

海星「その技はっ…!」

勇儀「一步!!」ズンっつ  
!!!!

海星「なっ！」地形が沈み周囲が塞がる

勇儀「二步ツ!!!」ズンつつつつ  
!!!!

勇儀の動と静の相反する力が拳に集まっていくのが見える

海星「いいぜ！正面から受けてやる!!! ついでに新技だ！」

海星「はあああああああ」ピキピキピキ

右手に水晶を纏わせる

勇儀・海星「いくぞ!!!」

勇儀「三步必殺!!!」

海星「水晶拳

!!!!!!  
!!!!!!

海星「うおおおおお!!」

勇儀「はああああああ!!」

カツツツ!!!ドガアアアアアン!!!  
拳と拳がぶつかり合ったとは思えないほどの音が響き渡る。

鬼たち「うおっ!!」

鬼たち「どうなった??」

鬼たち「どっちが勝ったんだ?」

土煙があがる。

.....

勇儀「くっ……!」ガクツ

倒れそうになる勇儀と

ぼふっ

海星「俺の勝ちだ。」

支える海星が立っていた。

鬼たち「……。勝つちまいやがった……。」

海星「三步必殺……だったか？」

動と静のコントロールが途中でブレただろ？」

勇儀「ふふ、久しぶりの全力の闘いで昂りすぎちゃったよ……。」

いい勝負だった。そう言えば、名前は？」

海星「そうだな、言っただけじゃなかったな笑

俺の名前は東方 海星。よろしくな、勇儀。」

勇儀「……。海星？」

鬼たち「…。海星…。」

ざわざわざわ

海星「おい、どうかしたか？」

なにか不味いことでもあつたのか？

そして突如放たれる凄まじい殺気。

海星「なっ!!!!」

勇儀を咄嗟に水晶で囲み

龍をかたどった水晶を纏う

??? 「雷鳴一步圧殺。」

一瞬で間合いを詰められ、懐に殺気が飛び込んでくる

海星「うおおおおおああああ!!!! 水晶拳ツ

撃龍槍ツ!!!!」

瞬時に渾身の全力で迎え撃つ



ゴツツツ!!! ドガガガアア!! バキバキバキバキバキバキ  
地形が崩壊し、砂煙を巻き上げ、衝撃波が地表を駆け巡る!!!!!!

鬼たち「うわあああああああ!」

勇儀「……!!!」

……。

静寂の後。砂煙が晴れ

そこには

「雷鬼…。」

「…海星。」

涙を流し抱き合う  
2人がいた。

## 鬼の協力と湯けむり鬼

鬼たち「雷鬼様！」

ばっ！

先程まで騒いでた鬼たちが一斉に皆、跪く

赤鬼「あの雷鬼様が泣いておられる…。」

お互い長い年月溜め込んでいた何か、一気に崩壊するように涙を流す。

雷鬼「くっ…うっ…生きていたのか…。」

海星「お前こそ…。ああ…本当に…。」

涙なんて流すのはいつぶりだろうか。

それほど、この再会は2人にとって本当にかげがえのないものであった。

海星「雷鬼よ……。見ないうちに老けたな？」

雷鬼はかつて共に修行し、妖怪大戦争を共闘したときより

髭が生え、白髪になっている

すこし歳をとったようだ。

雷鬼「いや、お前が変わらなさすぎるんだ。

あれからどれほどたったと思つてやがる。」

海星「そうか……。おれは自身を封印したからな。

お前のおかげで生きながらえたんだ。」

雷鬼「あの後どれだけ探しても見つからなかったから、ほんとに死んだと思つたぜ  
……。」

海星「雷鬼…今一度礼を言わせてくれ。

ありがとう。お前のおかげで俺は今こうして生きている。」

雷鬼「ふん…、お互い様だろ。俺もお前のおかげで今こうして生きてんだ。

そんな改まらずとも、俺らの仲だろ??」

海星「くつくつく。そうだな！

雷鬼「会いたかったぞ！」

雷鬼「くつくつく！俺もだ！海星!!」

ガシツ！

そう言つて握手をする。

勇儀「雷鬼…さま…そのお方は…やはり。」

雷鬼「ああ。こいつが俺の最初の友人。  
東方 海星だ。」

勇儀「どーりで、強いわけだ。」

雷鬼「そうだな笑

俺より強いだろうな。」

鬼たち「「ざわざわ……雷鬼様よりも!?!」

海星「勇儀も、すごく強かったぞ。修行しだいではもつと高みを目指せるだろう、潜在能力のそこが見えなかった。」

勇儀「ほんとか?海星からそう言って貰えるなら嬉しいな  
修行に励むとするよ。」

海星「ああ、楽しみにしてるよ。」

ところでだ。話が変わるが雷鬼、最近鬼が人を攫うとの情報が入っているのだが。どういうことだ？」

雷鬼「ん？ああ！それは、友達になるためだ!!!」

…。

海星「……。」

海星「はあ？」

雷鬼「ふっふっふ、まず人里から人質を攫ってきて、もてなす。

そして、助けに来たやつと軽く決闘をして

勇気を称えて、もてなす！

これで、仲良くなれるはずなのだ！」

海星「まさか……。そんなことを……」

青鬼「…だから雷鬼様…。それは難しいと言っているんだが…」

海星「まあ難しいだろうな…。人間を俺基準で考えてないか??？」

雷鬼は古来から生きているため

人間がタフだと思っっているようだ。

今の村から人をさらったところで、農民が助けにこれる確率は…  
低いだろう。

雷鬼「違うのか…。だからこないのか…。」

海星「まあでも、人々と共存しようとする本質は変わってないようですね。安心したよ。

八雲「紫というやつがいてな…。かくかくしかじか。」

雷鬼「なるほど。面白いな。昔のおれらみたいじゃないか。」

海星「だろ？協力してくれないか？」



雷鬼「当たり前だろ！鬼の一同協力するぜ。」

鬼たち「「おおおおおー！！」」

海星「ほんとに頼もしい限りだ。ありがとうな。」

雷鬼「ああ!!!任せろよ。」

さてと。積もる話もある。今日は海星!!飲み明かすぞ!!」

海星「おお!!いいねいいね!!!」

雷鬼「そうこなくてはな!!野郎ども!!宴会だ!!!」

鬼たち「「うおおおおお!!宴会だ!!!」」

海星「さて、準備できるまで、ゆっくり温泉でも入るとするかな。」

イザナギ温泉

海星「このムカつくルール。壊してやるか。」

勇儀「ん??」

海星「昔、イザナギに勝ったことあるし、多分ルールの上書きは出来るはずだ。」

勇儀「ほんとに規格外の人だねえ。」

海星「まあね笑  
はあっ!!」ピキピキピキ

バキツ!!!

赤い水晶を割った。

海星「いけたいけた。これで1日だれでもいつでも入れるようになった。」

勇儀「おお。」

さて!!!いざ念願の温泉だ!!!

カポーーーーー

海星「うあああ…景色もいいし、最高だな。」

ざぶうー

勇儀「おー！そうだねえ…。」

てくてく。

タオル姿の勇儀が脱衣場から出てきた。

海星「お、おい！なんで勇儀がいる？」

勇儀「なんでって…。海星と闘って汗かいたからねえ。」

海星「いやいや、俺が入ってたの分かってただろ！」

勇儀「いや、海星がいつでもだれでも入れるようにしてくれたんだろお？」  
混浴にした覚えはない。

海星「いや、おれ男だぞ」

勇儀「んー？私は気にしないが？

あー。海星もしかして。そーゆーところは弱いのかい？」

海星「なっ…！綺麗な女の子なんだから気にしろよ。」

確かに勇儀はとんでもなくスタイルがいい。

濡れた髪や身体の雰囲気などがとても妖艶である。

勇儀「くつくつく、意外なかわいい弱点があつたんだねえ。」

勇儀ものぼせたのか、顔を赤くしながら意地悪っぽい顔で

馬鹿にしてくる。

海星「くっ…。」

勇儀「あの…か、海星？身体でも流してやろうか？」  
まだ馬鹿にしてくるのか。

海星「温泉くらいゆっくり息抜き、させてくれ———!!」  
そういつて温泉から飛び出す。

また後で1人で入り直そう。そう固く誓った。

—————  
勇儀「…にげなくてもいいのにねえ。」プクプクプク  
膨れながら温泉につかる勇儀がいたことを  
海星は知らない。

## 鬼の宴と天狗

そろそろ日が傾き、夕暮れ時になってきたようだ。

海星「ほんとにこの辺りは景色がいいな。」

いま温泉を飛び出してしまい、まだ宴会まで時間があつたので周囲を散策している。

妖怪の山とは周囲の山より一際目立つ、壮大な山で

人は迂闊に入れないような雰囲気醸し出している。

ふと木を見ると、所々に葉が抜け落ちているところがある

海星「さしずめ、妖怪が飛んでつくった、妖怪のけもの道か？」

海星「少し寄り道してみようか。」

そう言って、けもの道を通ってみる。

ブナやクヌギが生えており

森の香りが鼻を抜ける

海星「前世ではこれが当たり前ではなかったからな…。」

そう言いながら思いにふけっていると

??? 「おい!…と、生まれ!!にんげん!」

海星「ん?」

不意に声をかけられ、足を止める

海星「…。」

…静寂、風の音と揺れる葉の音だけが通り過ぎていく

海星「おい、声をかけたなら出てきたらどうだ?」

生まれ!と言われたのに用件をいわないとは思議だ。

??? 「ひっ!ふ、ふあい…すいません!」



海星「…な、なんだ？」

止めておいて謝られるなんて初めての経験で、こちらも戸惑う

ガサゴソガサ。

パキッ。

木々をかき分けて出てくる音がする

人型の妖怪のようだ。

??? 「イテテ…。」

見ると、白い尻尾と耳が特徴的な優しそうな女の子が藪からでてきた。

盾を持っている…が。

??? 「…。」

海星「…。」

相手が何も言っていないので、そのまま見つめ合うことになる。

どういふ状況なのだ。

盾と劍そして、山伏のような帽子に、高い下駄を履いている。なにか役職についているのだろうか。

進まないのて話しかけてみることにする。

海星「あのー…。」

??? 「ひっつ!」びくっ

怯えてるようだ。何故引き止めたのだろうか。

海星「あー、すまない。なにか引き留められるようなことをしたのか?」

??? 「…こ、ここは妖怪の山でして。天狗が統治しているため、これ以上人間は入っては行けないのです。あ、危ないですよ」

海星「なるほど。」(この子は見回りかなにかの天狗なのだな。)

言い伝えの天狗は鼻が長いイメージだったが。

(こんなにも可愛いものなのだな。)

??? 「えっ？」

海星「すまなかつた。人間が入れないのは知らなかつたんだ

日が暮れそうだし、また改めてくるよ。」

そう言つて引き返す。

??? 「はい……え？じゃなくて人間はもう来ないでくださいーい!!」

後ろのほうでなにか言っているが、聞こえなかつた。

移動中

海星「ふうー、やっと戻つてこれた。」

先程。雷鬼と会つたところまで戻つてくる

雷鬼「おー！海星、どこ行ってたんだよ！随分長風呂だったな！」

海星「いやー、誰かさんのせいで早々と温泉を出てな。ちよつと森の方を見に行つて

たよ。」

雷鬼「なんだそりや？

ま！とにかく宴会だ！おれらの住処まで案内するぜ。」

海星「ああ、ここでやるんじゃないのだな。お願いするよ」

雷鬼「俺の千年来の親友をこんな所でもてなしたらバチが当たるつてもんよ。さ！いこうぜ」

再び移動中

—————

少し飛んだところに

集落があった。

中心に大きなキャンプファイヤーが用意されており

多くの鬼がいた

海星「…?!」

雷鬼「どうした？」

なぜかニヤニヤしながら雷鬼は問いかけてくる。  
海星「…。いや…。なんでもない…。」

雷鬼「そうか？」

まだニヤニヤしてる…なんだろうか。

鬼たち「雷鬼さまが帰ってきたぞ！」

勇儀「海星もちゃんと来たね！」

雷鬼「さ、て、と。

野郎ども!!! 準備は出来てるかあああ!!!」

鬼たち「「おおおおお!!!」

ガヤガヤガヤ

そして大人数で火を囲み円になる

海星「まさしく宴会って感じだな!!」

雷鬼「さあ!!!海星!!よく来てくれた。盛り上がろうぜ!!」  
海星「ああ!!」

スウツ：雷鬼が息を吸い込み

雷鬼「さあ!!皆の者!!!盃をもて!!!掲げろ!!!」

太鼓のような声を響かせる

昔よく一緒に夜まで語り合ったあの声で。

鬼たちは並々注がれた盃を、一斉に掲げる

雷鬼「俺と!!!海星の約1000年ぶりの再開の日だ!!今日という日が来たことを俺は

心から喜んでいる!!!

俺たちで盛大に今日という日を祝おう!!!!

よっしやああああ!!!かんぱあああい!!!」

落雷のような声で乾杯のかけ声をする。

海星、鬼たち「「「かんばあああああいい!!!」」」

こちらも落雷のような大きなかけ声で

盛大に宴が始まった。

鬼の代名詞と言わんばかりの激しさに宴会が進む。

豪快な料理に規格外の量のお酒。

ワイワイガヤガヤとみなで話す声

海星「やはり鬼はいいな。」

青鬼「おー!嬉しいことを言ってくれるじゃねーか」

腕相撲で吹き飛ばした鬼がやってくる

海星「おー!お前は!」

青鬼「いやー、海星には驚かされたよ。

まさしく、人の形をした化け物だったからな。」

海星「お前の力も相当強かったけどな。この辺だと敵無しなのが納得出来る。」

赤鬼「ほんとに嬉しいことをいってくれるな!!  
気に入ったぜ!!雷鬼さまの友人つてのも領ける。」  
海星「よせよ、照れるじゃないか笑」

勇儀「おー、いたいた。海星!!」

勇儀も盃をもつてこちらに歩いてくる

青鬼「あ、勇儀姉さん!!」

海星「おー、勇儀か!!一緒に飲もうじゃないか」

勇儀「嬉しいねえ!」

海星の隣に腰掛ける

勇儀「さあ、海星」

海星「ああ、乾杯!」カチリ

一口飲むと、喉が熱くなるが

すーっと鼻から冷たい風が抜け気持ちがいい



鬼のお酒は極上の味わいだ

海星「うまいな。」

勇儀「おっ！海星は飲める口かい?」

青鬼「いかにも強そうって感じですねえ」

海星「どうなんだろうな、この前初めて飲んだばかりでな、まだよく分からんのだ。」

勇儀「なんだと!?勿体ない!そんなに生きているなら酒を知らねばな!」

海星「みんなそうやって言うな。」

雷鬼「今日はどことん飲んでもらうからな?」ザクザク。

雷鬼も一通りまわり終わったのかこちらに向かってくる。

海星「雷鬼!!もちろんそのつもりだ! 乾杯!」

雷鬼「そうこなくっちゃな?乾杯!」カチリ



感の正体はこれか。」

雷鬼「くつくつく。その通り気づいてくれてよかったぜ。」

海星「お前は…ほんとに…。」思わず涙ぐむ

勇儀「ほらほら、私たちを置いてけぼりにしないで教えてくれたら嬉しいねえ」

海星「ああ、すまない笑  
それでな？」

いつの間にか周りに鬼達がたくさんいた。

鬼たち「「うう…雷鬼さま…一生ついて行きます…」」

勇儀「ぐすん…雷鬼さまから海星のことは聞いていたが、まさかこれほどのエピソードがあるとはねえ。」

雷鬼「懐かしいな。」

海星「次は俺から聞きたいことがあるんだが。」

雷鬼「なんだ？」

ここで俺はずっと疑問に思ってたことを聞いてみる。

海星「なんでこんなにどうやって鬼が増えたんだ？」

雷鬼「あー、そんなことか。人が増えてまた妖怪が生まれ始めたんだよ。勇儀もそのひとりだ。」

それで俺が同じ鬼として、長を務めてるってことだ。」

海星「なるほど！そーゆーことか笑

てつきりだれかと結婚して、みんなお前の子供かと思ったよ笑」

雷鬼が結婚できるとは思えないしな

雷鬼「俺の子供もいるぞ？」

海星「ははは!!……え？」

海星「なん…だと？」

いま雷鬼は日本語を話したのだろうか

雷鬼「結婚して子供もいる。」

海星「けっ…こん…して。子供…も？」

雷鬼「ああ。おーい、風凛！」

??? 「はい？」

風凛とよばれた女がこちらに来る。

海星「なん…だと。」

現実をまだ受け止められないでいた。

雷鬼「これが俺の嫁、風凛（ふうりん）だ。」

風凛「海星さま、かねがね旦那から聞いておりました、風凛と申します。以後お見知

り置きを。」

海星「ああっ…ああ。」

目の前が真っ暗になりそうだ。

## 結婚とは。

海星「そ、そうか……。風凜か……。よろしくな。」

突然の結婚報告に戸惑う。

海星（確かに雷鬼は良い奴だし、思い出を大切にしたりする節があるし……。そうか……。思い返せば、雷鬼の悪いところは何か一つ見つからなかった。そもそも命をなげうってまで自分を助けてくれたのだ。

雷鬼「どうした？ そんなにびっくりしたか？ 笑」

雷鬼が問い掛けてくる。

海星「あのお前が結婚して子供がいたなんてな、驚くに決まってるだろ!! とにかくおめでどう。すてきな伴侶を見つけたようだな。」

素直に祝福の言葉を贈る。本当に我が身のように嬉しい。

雷鬼「ありがとうよ。」

風凜「勿体ないお言葉、ありがとうございます。」

雷鬼「さあ！こんな感じで積もる話もあるだろ！どんどん呑もうぜ」  
そう言つて皆がまた酒を煽る

青鬼「この人達はほんとに絵に書いたような幸せな夫婦だからなあ」  
海星「それなら何よりだ！」友人の吉報に酒が心地よく進む。

雷鬼「で？お前はどうかんだ？」

雷鬼が無垢な顔で聞いてくる。

ピクっ!!

何故か遠くの勇儀の肩が動いたように見えた。

海星「何がだ？」

なんの事かわからず聞き返す

青鬼「あれ？海星はもしかして鈍いのかい？」

青鬼がまさかと言つた顔で聞いてくる。



海星「だから何のことだ?? 鈍い：昔の知人によく言われたが。」

青鬼「だから、雷鬼様は海星は結婚相手や恋人は居ないのかって聞いてるんだぜ。」

青鬼がやれやれとした顔で教えてくれる

海星「ブツ！」酒を思わず吹き出す。

雷鬼「おまえ、その感じだと」

海星「そうだな。恋人なんてのは居ないよ。しがな旅人なものでね。まったく：困ったものだ！」

酔っているのか余計なことまで話してしまう。

ピクっ!!!

勇儀が再び揺れる。

雷鬼「くっくくく！海星ほど強ければ貰い手はいくらでもいそうだがなあ！」

青鬼「まったくだ!! ま、人の世界は強さがものを言う世界じゃないらしいけどよ」

海星「そのようだ、相手の心というものを読まなくてはならないようだが、どうにもそういった方向は苦手だな。怒られてばかりだ。」



雷鬼「くつくつく!! 違いねえ! 海星はどう思うよ。」

勇儀「なっ…!」ドキドキ

凧凧「どうしました? 姉御さつきから様子が。顔も赤いようですが…」

勇儀「な、なんでもないぞ。」

勇儀は遠くの輪からこちらを盗み聞きしているようだ。

海星「はっはっは!!! 勇儀か!!! あいつはほんとに女の美しさの中に力強い信念が感じられて凄く好きだぞ。」

ピクっ!!

勇儀の肩が大きく震えた

勇儀「…。ああ。」

勇儀（なんで私はこんなにも動揺しているのだ。）

風凜「あー、なるほど…姉御、行きましょう。」

勇儀「お!!おい!!風凜!!ちよつとまて!!おい!!!」

ズルズル

勇儀を引きづつて雷鬼たちの元に向かう。

風凜は見かけによらず馬鹿力のような。

勇儀（くそ…風凜め…!!こうなつたらもう!!!）

勇儀「お、おう!お前らなんの話しをしてるんだ?」

海星「ああ、ちようどお前のことを話してたんだ。勇儀」

勇儀「そ、そうか!!それは偶然!聞かせてくれよ」

声が若干上ずっている

雷鬼（たしかに勇儀は強すぎて、みんな男どもは寄り付かないからなあ。慣れてないのかもな。）

海星「そうだな。」そいいながら勇儀の手を引つ張りを抱き寄せる

勇儀「なっ?!?!」唐突な出来事に理解が追いつかない。

普段まったく酒に飲まれることは無いのだが  
緊張で目が回りそうなくらいだ…!

風凜「あらあら。」

青鬼「ひゅー!やるねえ」

海星「勇儀、お前は美しいな、鬼という種族でありながら、その剛腕の中に繊細さも兼ね備えている。その綺麗な嘘偽りない瞳も、陽気な性格も引き込まれそうだ…。皆から慕われているのはそういったものの現れだろう。」

勇儀「あ…あ…」プシユウー

生まれてこの方そんな言葉を掛けてもらったことがなかった勇儀はもう爆発寸前のようだ

海星「よくも昼間はからかってくれたな。それのお返しだ。」

海星は不敵な笑みでにやりと笑った。

勇儀「…！」

少し固まったあと。

勇儀「はっはっは！ほんとに海星は面白い冗談を言うねえ！びつくりしちやったよ」  
普段の勇儀に戻る、どこか寂しそうだが。

海星「まあさっきのは冗談ではないぞ。全ては本心だ。

鬼と話す時は嘘はつかないことにしているからな。」

勇儀「…。」。ぶしゅー

勇儀は2度殺された。

??? 「あの勇儀がこんなになるなんてねえ。予想以上だよ。」

雷鬼「やはり、赤鬼をけしかけたのはお前か、萃香。」

雷鬼がやれやれと言ったように呼びかける。

海星「だれだ？その子は。」

雷鬼の隣に角の生えた背の低い女の子が立っていた。

萃香「だって楽しそうだったから…つい！」

すう…

次の瞬間。

気配が完全に消える。

萃香「私は、伊吹萃香！よろしくね!!」ぎゅっ!!

いつの間にか自分の腕の中にいた。

海星「なっ!!?よろしくな、おれは東方海星だ。

いつの間に…:ていうかなぜ抱きついている…。」

萃香「だって楽しくなりそうだったから！ねえ、勇儀？」

そこには…

ワナワナと震える勇儀が立っていた。  
宴会の夜は恋の炎を囲んで更けていく。



## 恋は盲目　鬼は全力

S a i d 勇儀

こいつとあたしが出会っちゃったのも何かの運命なのかねえ…。

これから長い人生の中で、忘れることはないだろう。

温泉の前での人集り。

普通はこんな妖怪の山の麓に人間は来ない。

雷鬼様は人を攫ってきたり、あんなことをしているが骨のないやつばかりで正直退屈に思っていた。

雷鬼様の話にきく男とは、全然掛け離れていたのだ。

そんな中でこんな妖怪しかない温泉でましてや鬼に喧嘩を売るなど自殺志願者だろう。そういつて何気なく目を向けた。

そこには1人の男が妖怪の中心に立っていた。  
そして次の瞬間、私の考えは軽く打ち砕かれた…。

第一印象は『強い。』至ってシンプルだった。

巧妙に隠されてはいるが、心から恐怖を覚える、得体の知れない力強さがあった。

勇儀「おもしろい…おもしろいねえ…!!」

鬼が人間に腕相撲で吹き飛ばされる。

そんな様子を見て

高ぶっていく心が手に取るように解る。

そして半ば強引に闘いを挑み。

「負けた。」

失望していた人間という存在に完全に敗北したが

不思議と生きるという私の存在意義に光が刺したように……  
悪い気持ちはしなかった。

そしてこの海星という男、昔から伝説のように聞いていた雷鬼様の古くからの友人であつた。

正直、この時は運命だと思つた。

数少ない、女の鬼の風凛と萃香に相談したが

いまいちよく分からなかつた。(萃香にお風呂で襲え！と言われたが……)

周りの男どもは、強さに慕つてくれていたのだが、

まず、男の人と本気で話す経験も少なかつたのだ。

そして、宴。

まさか海星に相手がおらず

まさか海星からあんな言葉を……(あの時は顔が真っ赤だつたに違いない……)

もう、冷静で居られない……。

本来の私を見失つてしまひそうな時……!!!

!!!!

萃香め…!!さすが私のライバル…!!やってくれるねえ…  
面白い…!

side 海星

海星「なあ萃香、降りてくれないか。」

そういつて胸にしがみついている萃香に手を伸ばす。  
スカッ

海星「…なに？」掴めない

霞を掴もうとするようにすり抜けてしまった。

勇儀「おい！萃香！海星に迷惑をかけるなよ」

勇儀がいつもの口調に戻る。

萃香「へへ〜！海星、嫌だった？ごめんね。」そう言いながらも抱きつくのをやめない。

海星「いや、嫌ではないからな、大丈夫だ。」

とくに嘘はつかずに伝える。

萃香「…。だつてさ、勇儀？」

にやりとした顔で勇儀の方を向いたのであるう。

勇儀「…。萃香。」

勇儀の声が震える。

嫌な予感がする…。

海星「さ、萃香、降りるんだ。」そう言いながら持っていた盃などを地面に置く。

萃香「はあく海星って男なのにいい匂いがするんだね…。」

うっとりとした顔でスリスリしてくる。勇儀の方を見ながら。

勇儀「…、…、」ヒュッ

海星「お！おい！！」

ズン！！！！

勇儀が一瞬にして消え

萃香がしがみついていた所に拳があつた。

海星「ぐっ…」拳の寸止めでこんな風圧か…。

萃香はどこにもおらず…？

萃香「どーしたの勇儀、いつもらしくないじゃない」

ケラケラ勇儀をからかうような口調で話しかける。

勇儀「やりすぎだな。萃香あ！」

涙目で拳を振りかざす勇儀

鬼達「！！！！お！！！！いけいけえ！！！！」

海星「いいのかよ。」

青鬼「まああの二人はいつもこんな感じだからな！」

雷鬼「そうだな!! まあ今日は特殊だが。」

海星「なんだそりや、ま! いつも通りならいいか。」

風凜「…姉御…これはなかなか厳しい殿方ですよ…」（ぼそり）

風凜の心配そうな声は…

どがあああん!!

ズドオオオン!!

勇儀の岩を破壊する音にかき消されていった。

勇儀「萃香ああああ!! 羨ましいねえ…」

そう萃香に言いながら突貫する

萃香「怖いよ勇儀!!」

スイスイ避けながらも青ざめる萃香

ここまで怒るとは思ってたようだ。

勇儀「あんなこと…あんなこと…!!こら!すり抜けるな!!!」

ズドオオオン

!!!!!!

バキバキ…!

木や岩がどンドン塵となっていく。

雷鬼「お、おいおい」

赤鬼「んあ?ぐええええ!」酔った赤鬼に木が落ちてくる

勇儀「萃香あ!!」

萃香「こうなったら…!!」キツ!

二人とも拳を握りしめて…



「そこまでだ。」

パシッ。

勇儀 「……！海星。」

萃香 「……なんで私の事、つかめるの!？」

2人の拳を掴まえて

呑み会の騒ぎはひとまず終わった。

## 夢の現実と実現

海星「やれやれ……。鬼を二人止めるのは骨が折れるぞ……。二人ともすこしは周りを見たらどうなんだ？」

周囲はもう目も当てられないくらいボロボロだ。

土は抉れており、岩や木も倒れ、壊れた小屋もある。

さすがにやりすぎだろう。

勇儀「ああ……。やりすぎちゃったねえ……。」

萃香「あ……。やっちゃったね……。」

2人ともよっぽど周りが見えなくなっていたのか、びつくりした様子で周りを見渡す。ほんと鬼の潜在能力というか、種族の力強さには驚かされる。

二人とも落ち着いたようなので手を離してやる。

勇儀が名残惜しそうな顔をしていた気がしたが勘違いだろう。

ま、こんなところで落ち込んでてもせっかくの宴会が勿体ない。

もう一肌脱いでやるとする。

酔っ払いが多いが鬼だし大丈夫だろう。

海星「みんな！足元に気をつけろよ!!」

鬼たち「??」　　おー!!」当たり前だが、なにか分かってないようだが

水晶を創り出す。治すイメージで：

ピキピキ…。

ダイヤモンドカットが施された、こぶし大の美しい水晶が出現する

これを…。

砕く。

バキン!!!

心地よい響きの後の静寂。

そして地響きによる脈動。

ゴゴゴゴゴゴ…。

地面が、岩が、小屋が

時が巻き戻っているかのように治っていく。

萃香「…え!?なにこれ!!?」

目の前を巨大な岩が元の位置に戻っていくのを目で追っている。

勇儀「まったく…ほんとに人の範囲を越えてるねえ…。」

継ぎ目がなく塞がっていく地面をみながらしみじみと呟く勇儀

正確にはもう自分は人と言えないのだろうか…まあいい。

赤鬼「んー?ぐええ…。」無事に木も元に戻ったようだ。

雷鬼「ありがとうよ海星!

勇儀!萃香!喧嘩は別に構わんが地形を変えるほどなのは程々にな!」

雷鬼も優しく宥める。こいつが長でほんとによかった

鬼という種族はこの先も安泰であろう。

萃香「申し訳ありません雷鬼様…。」

勇儀「ほんとにすまなかつたね……。みんなも……」

鬼たち「さすがの2人のパワーはすげーな!!」

男を取り合つて戦うなんて、鬼の村にも春が来たつてもんだア!!」

鬼たちは何事も無かつたかのように宴会を再開する。

鬼という種族はほんとにそのパワーに恥じない心の広さを持っているようだ。ほんとに一緒にいて心地いい

海星「だそうだ、よかつたな萃香、勇儀」自然と笑みがこぼれる。

勇儀「海星も……止めてくれて助かつたよ!ほんとあのままだとこの憎たらしい友達を我を忘れてすり潰してしまふ所だったからねえ!」いつものような豪快な勇儀に戻る。

萃香「ほんとありがとうね!!ってことで!!」すう……

霞のように姿がぶれて気配が消える。

勇儀「まさか!!萃香!」

萃香「へへっ……ぴとぴとく!」いつの間にかまた胸にしがみついて顔をすりすりしてくる



らないを繰り返しながらゆつくりとこちらに寄ってきている

次の瞬間。

スーッと空間に切れ目が入る。

海星「紫か。」

紫「ええ、報告にきましたわ…お取り込み中でしたか？」

海星の胸に抱きつく萃香と

顔を赤くしながら今にも抱きつくようとしていた勇儀をみて

扇子で顔を隠しながら「あらあら。」と言う。

海星「まあこれは遊びみたいなものだ。気にするな。

して、報告とは？」

紫「左様でしたか。はい、天狗との接触到に成功をして明日、海星様を交えて天魔との交渉をさせて頂こうかと。」

海星「そうか。よくがんばったな。」笑顔で紫を褒める

紫「ありがとうございます。」

海星「俺は鬼たちと再開し、手伝ってくれることになったぞ、よかったな。」

紫「それはほんとうですか？」

海星「ああ、旧友にも無事に会えたしな。紹介するよ。」

おい、雷鬼！ちよつと来てくれ。」

向こうでこちらを伺っていた雷鬼が向かってくる。

紫「お初目にかかります、雷鬼様

話は海星様から伺っておりました。私の夢である人間と妖怪の共存を目指し、手を貸してはいただけませんか？」

雷鬼「紫とやら、喜んで手をかそう。懐かしいな…昔の俺らと同じ目をしている。こんなな心が踊るのは久方ぶりだ。」



一緒に頑張ろう。」

紫「ありがとうございます。ほんとに頼りになりますわ。

海星様も本当にありがとうございます、あなたと出会ってから夢が現実的に進んで……正直驚いています。」

海星「いいんだよ。紫がこれまでしつかり夢を思い描いていた当然の結果だ。もっと胸を張っていいんだ。」

雷鬼「ああ、夢つてのは願えば願うだけ、いい方向にしか転がらないからな。

あと、明日は天狗に会いに行くんだっけか？鬼が紫に協力すると言えばあいつらも大丈夫だろう。」

海星「鬼と天狗は仲がいいのか。それは助かるな。」

雷鬼「ま、そんなところだ！なら明日のためにこの辺で宴会はお開きにするかな。」  
すうつと息を吸い込み

「おめーら!!!これにて宴会は終わりだ!!各自残りたいやつは残ってやつても構わん!

じゃ!! 解散だ!!!  
!!!」

鬼たち「うおおおおお!!!」

海星「最後の最後まで元気なやつらだ」

やれやれというか最高というか。まあ鬼ってやつぱりいいよな。

雷鬼「海星、泊まるところがないならその家が空いている。自由に使うといい。」

雷鬼が親切にも宿を提供してくれた。

池のほとりにある小さくとも素敵な家だった。

海星「おお! 素敵な家だな。ありがたく使わせていただくよ。」

紫「では、海星様。また明日の昼頃お迎えに上がります。」

こうして終わりの見えない楽しい宴会も終わりを告げ

各自、家に向かうのであった。

## 閑話休題 鬼の1夜

「さて、貸してくれた家に行きますか。」

海星はそう呟き、案内してくれた家に向かって歩いていく

「海星！おつかれさん！参加してくれてありがとうよ！」

「こんなに気のいい人間が居たなんてな！変わったぜ！おやすみ！」

帰り際の鬼たちが声をかけてくる

「ああ、鬼という種族の良さを再確認できたよ、ありがとうおやすみだ。」

そして家の前に着く。

「ほお…。素敵な家だな。」

大きいとは言えないが、しっかりと作られており

裏手には池があり、鯉が1匹で悠々と泳いでいる。

「酔い覚ましたがてら、もう少し外にいるか…。」

ピキ…シヤララ…。

池のすぐそばに水晶で椅子を作り腰掛ける。

「はあ…ほんとに色々なことがあったな…。」

雷鬼は生きていたし、夢のようだ…。」

ほんとに奇跡のようだ…死んでしまったと思っていたのに…長い年月を超え再開した。

それは運命としかいいようがない。

「東方海星…か…。完全に無から産まれて…。ここまで色々な出会いをしてきたな…。」  
身寄りのない自分がここまで来れたのはたかさんの優しさで成り立っているのは自分が1番理解している。

ピシヤッ!

鯉がこちらを見ながら跳ねた

池の水面に満月が映り込み、より1層幻想的に夜を彩る。

「お前も独りは嫌か?」

鯉に語りかけてみる。白の中に赤と黒が入っている美しい錦鯉だ。

「これからも俺は色々な出会いをして行くのだろう…。俺自身ここからどう成長していくのだろうか。楽しみだ。」

ピキピキ…

「水晶の透明にルビーのような赤とエメラルドのような緑色の鯉を創る。」

ほちゃん。

それを池に入れる

「話を聞いてくれた礼だ。独りから救ってやるよ。」

ピキピキピキ…。

そしてもう一つ

「お前もな。勇儀。」

背後の木になげる

「なっ…！気づいてたとはねえ…。これは？」

水晶でできた大きな盃を勇儀は受け止める。

「酔いで注意力散漫になっていたよ…。」

それは、俺の能力を乗せた盃だ。注ぐとどんな酒も一級品の味になる」

勇儀に気づいたのはつい今だ…

変なこと聞かれてないといいのだが…。

「ありがとねえ…宝物にするよ…。」

勇儀は嬉しそうに盃を見つめる。

「ああ、いいってことよ。それで？何か用か？」

こんな所に勇儀がいるとは思わなかったので聞いてみる。

隠れている様子だったが？

「ああ…、ちよつと話がねえ。」

そう言つて勇儀は海星の隣の石に腰を下ろす

「どうした？」

その問いかけに

「不思議とねえ…。ハア…私はあんたが気になつてゐるみたいでね…。」

いつにもなく小さな声で呟くように言った

優しい風が吹き

勇儀の美しい金色の髪の毛がなびく。

満月を背にしたその姿は、この世の何よりも美しいかもしれない。

そう思った。

「そうなのか…まあ。あんな出会い方だったもんな。

俺もお前のことが気になってるよ。」

今日、温泉の前で出会い、そしていつの間にかこうして隣にいる  
興味がわくのも仕方ないのだろう。

事実おれも鬼の潜在能力や生き方に興味が湧いた。

「…。ぷっ！ハッハッハッハ!!」

勇儀が突然笑い出す、なんでなのだろうか分からないが

「あー…ハッハッハ…。あれだね！んー、海星はほんとに鈍いんだねえ。」

勇儀は笑いながら呆れた様子で呟くように言う

「なんだろう…。期待に答えられなかったのなら、すまないな」  
そう謝ると同時に

チュツ。

顎を細い指で優しく持ち上げられ  
キスをされた。

「な!!勇儀!?!」

慌てて名前を呼ぶと。

「鬼つてのはねえ、回りくどいことが嫌いなもんでねえ…。

これから時間をかけてもつともつと分かせてあげるよ。」

勇儀はニヤリと笑いながらも、顔を赤くしてそう言い放つ

「まー今日はこれくらいにしといてあげるよ。こんな素敵なものも貰っちゃったから  
ねえ…。ありがとう。ほんとに一生大切にするよ。」

じゃあ、おやすみだ海星。

お前はもう孤独なんかじゃないぞ。」

そう言いながら、森に向かって歩いていった。



「…鬼つてのは分かりやすいようで、わからんな。」

鬼というものではなく、女性というものを海星が理解する日は  
まだまだ来ない。

そんなことを知っているものはこの世にはまだおらず。

池の鯉は嬉しそうに2匹で泳ぐ。

## 妖怪の山の頂に

昔ながら木でできた家。

その継ぎ目から朝日が差し込んでくる。

海星「ん…。朝か…。なんだろう久しぶりにぐっすり寝れたな。」

身体を大きく伸ばし疲れが取れたことを再度確認する。

筋肉の動きがスムーズに全身に伝わる。

本人は気づいていないようだが、久しぶりに自分一人で寝たのである

海星「さて、今日は。たしか妖怪の山の天狗だったか？」

昨日教えられた予定の通りなら天狗の長に会って

人間の共存に協力してもらえるか話に行くはずだ。

海星「までよ。そういえば…この前森に入った時は…。」

そう言いながら記憶を辿る。

??? 「生まれ！人間！」

白い髪で耳と尻尾が特徴の女の子に止められたことを思い出す

海星「あー、なんか人間は森に入らないように巡回してた気がするなあ……。結構統率が取れてるのか？ なかなか難しそうだ。」

あーゆータイプの妖怪は人間と関わらないことで、トラブルを回避している。

逆に言えば関われば少なからずトラブルが起きると踏んでいるからだ。

早速交渉にくらい影を落としていく雰囲気だが

海星「ま、天狗という種族に会うのも楽しみだし。何とかなるだろう！」

目を覚ますがために、思考をしていただけなので、

いつも通りポジティブに発想を変えて支度をし、家を出る。

昨日宴会をしていた広場に向かうと。

紫「お待ちしておりましたわ。海星様。」

広場には紫が既におり、待っていたようだ

海星「すまない、待たせたか？」

実際ごろごろしていた節があるので素直に詫びを入れる

紫「いえ：私は海星様が家を出たのを確認してから移動をしてるので、お気になさらず。」

紫はふわりとした笑顔で答える

そう言えばこいつの能力は境界を利用している。

移動など朝飯前なのであろう。

海星「そうか、それならよかったよ。

それで今日は？」

紫に再度確認する。

紫「はい、今日は予定通り、この山の頂上に住んでいる

天狗と一緒にお会いしていただきたいと思っておりますわ。」

海星「分かったよ。ところで、何故俺もなのだ？」

紫「ありがとうございます。それはですね…。」

紫は一呼吸おいて。

紫「率直に申しますと、天狗の長が一癖あるようでして…。

戦闘になる可能性があるということですね。

私でも一応闘えるのですが…、万が一負けるなんてことがあれば今後の活動に支障をきたすかと。」

なるほど、確かに仮にこの序盤で計画のトップが交渉でやられることがあればもうそれ以降天狗を含めほかの種族は下に見てくるだろう。

海星「なるほどな、分かったよその時は俺が出よう。

天狗という種族は気になるしな。」

今後の人生に大きく関わってきそうなので楽しみだ。

紫「ありがとうございます。心強いですわ。」

紫はほっとした様子で安堵が顔に出る。

普段他の人と話す時は扇子で表情を隠したりと

読み取られないようにする紫だが

こうして自分と居る時は素を出してくれているようでこちらも嬉しい。

海星「じゃあ、早速いこうか。」

まずはあつてみないとどうなるか分からないのでとにかく出発を促す。  
というときつとこいつは。

紫「それでは…あら…？海星様？」

紫はスキマを展開しようとするが

ピキ…。ピキ…。

水晶で両端を封じてある。

海星「やはりな。

あのなあ…紫。交渉に行くのにいきなり本部に乗り込むのはよくない。まずは相手のことを知る為にも、地道にいくぞ？」

紫のことだから、能力を使って一気に行くつもりだったのだろう。

それだとパニツクになり俺が和の国に

攻め込んだ時のようになってしまいかもしれない。

こーゆーのは部下とかと話を通してからだ。

紫「一理ありますわね…。では…行きましようか…。」

能力で疲れず行けると思っていたのが急に体力を使うことになったので紫は不本意そうな心を露わにする。

海星「体力を付けないと強くなれないぞ？」

それらしいことを言って誤魔化す。

紫「海星様がそう言うなら…。うう…。」

そう言つて2人は歩き出す。

鬼の集落は妖怪の山の麓にある。

この前見つけた温泉の近くにあった山道から登ることにする。

紫「海星様…。」

海星「ああ、分かっている。」

山道に入っすぐ。  
妖怪の気配がする。

海星「この感じh…」

??? 「止まれ!!人間!!」

また聞き覚えのある声が森にこだました。



## 天狗という種族

??? 「止まれ！人間！」

聞き覚えのある声がした。

記憶が正しければ、優しそうな女の子の天狗のはずだが…。

ガサゴソ

??? 「あー!! やっぱりまたあなただったんですね!!

…まったく!!! だから人間は入っちゃダメなんですって！」

この前と同じ、白い耳と尻尾が特徴の可愛らしい女の子がこちらにやれやれと言う顔をしながらこちらに飛んでくる。

海星 「この前忠告してもらったばかりですまないな。

でも、今日は君に会いたくてきたんだ。」

今歩いてる目的は天狗という種族の成り立ちと統率のレベルを確認するようなものだしな

??? 「え…？わたし…に？」

白い天狗はキョトンとした顔をする。

ただの侵入者だと思いきや、この男の認識を変えなければならぬようだ。

??? 「あつ。」

ここでふとこの前あつた時のことを思い出す。

この男…たしか去り際に私のことをかわい…いとかなんとか言っていた気がして…

??? 「その…私に逢いに来てくれたん…です。その…うう嬉しいというか。」

不意打ちにどうしていいかわからず狼狽える。

どうしたものか…でもこの場合でも人間をこの森に入れる訳には行かず…。でもこの先もしかしたらその…その…お付き合い…とかそういう…

でも…

??? 「とにかく。て、天魔様に。

えーっつと！あの、天狗の長である天魔様にあつていただきたいと思えます！」

海星「ああ！話が早くて助かるよ。よろしく頼む。」

海星は笑顔で礼を言う。

??? 「あー…まだ名前も知らないのに…！」

あの！私は犬走椀といいます！お名前はなんというのです？」

この天狗は犬走椀というらしい。

確かに会うのは2回目だが名前を知らなかったな…。

海星「犬走椀か…いい名前だね。俺は東方海星。あらためてよろしく。」

椀「はい…。よろしくお願ひします…。」

椀はなぜか顔を赤らめながらもじもじしている

どうしたのだろうか。緊張でもしているのだろうか。

それと先程から紫の気配がスキマに隠れている。

恥ずかしがり屋といった感じではないのだが…。

椀「では、ちょっと天魔様に掛け合ってきます！少しここで待っていていただけますか

？」

実際紫がすでに許可をとっているはずなので、必要ないのだが…

??? 「その必要は無いわ、椛。」

どこからともなく別の声が聞こえてきた。

そして…。ふわり。

黒い羽根を持つ女の子が上から降りてきた。

??? 「私がこの人をお連れするわ。あなたは天魔様に聞いてきて。」

椛 「文さん！ありがとうございます！では！」

ひゅーん

椛は山の山頂に向かっていった。

文とよばれたこの女の子がこの場に残る形となった。

文 「この人、というより…。この人達…ですかね？」

キラリと光るその怪しい目に

海星は美しさと恐怖を覚えた気がした。

# 文 という天狗

side文

「さて、今日も元気いっぱい！持ち前のスピードでスクープ探してもしますか！」  
 そう言って、紙とペンを握りしめいつものように家を出る。

私は射命丸文、天狗だ。

誰かと話すことが好きで、なおかつ事件や自分の興味のあることをとことん追求した  
 いつてのが私の性なのです！

ちよこーつとだけ大袈裟に話したいってのも私の悪い性ってやつですかね？

ま！ご愛嬌ご愛嬌！

そんな自己紹介もしつつ妖怪の山を飛んでいく。

文「まー、いつもみたいに平和な毎日なんですけどねえ」

そう、妖怪の山は基本的に侵入者などはいない。

犬走椀という、私の後輩みたいな天狗が常時見回りをしており

天狗以外の危険な妖怪やましてや人間は入れなくなっている。

なので、大抵いつもスクープをさがしつつ

結局椀と世間話をしたり、弄ったりして過ごしている。

文「今日は河童のにとりでも訪ねてみますかねえ…。

なにか新しい発明でもしてるかもしれないですし。」

この妖怪の山にはなにも天狗しかいないという訳では無い。

鬼も妖怪の山の麓に住んでいるし、

今言った河童の集落も、妖怪の山の滝のほうにある。

鬼は…正直怖いので今まであまり関わりはないのですが…（実際話したことは少ない）

河童は優しいので仲がいいと言えるだろう。

河童は手先が器用なのと、素晴らしい発明を持っておりいつもみんなが驚く発明をよくしている。（役に立つことは少ないが…）

その中でもにとりという河童は群を抜いて発明の才能があり…

「パシヤリ。」シャッター音のあと一枚の写真がカメラから出てくる。

そこには見事に紅く色づいた紅葉が風になびく様が写っている。

これが「カメラ」という発明らしいです。

なにも、見たものを紙として捻出できるらしい素晴らしい素晴らしい機械なのです！

昔、困っているのを助けたお礼にいただきました！

お水ときゆうりをあげただけですけど…

私のスクープを探すという趣味にもばつちりで

愛用しています!!

そんなこんなで河童の集落を目指そうとしていると…。

ビュン！

離れているのにすごい音と、

視界に黒い羽根が横切る

文「あややや。あれは天魔様ですね…。いつも部屋に引きこもってるのに外にでてあんなに慌ててる様子で…

これはスクープの香りですねえ…。」

にやりと悪い笑顔で微笑むと

空中で踵を返す。

文「まずは権を探しますかね、あの子の『千里先まで見渡す程度の能力』で異変を探してもらいましょうか…。」

そして、天魔にも劣らないスピードで

いつもの権がいる方へと飛んでいく。

く文移動中く

びゅーっ

文「いたいた…あれっ？人間…？それと隣にいるのは…。」

人影を見つけたのだが、明らかに権ではなく

しかも、男だ。雰囲気と気配では人間に見える。

しかし…。

後ろの女の人は完全に妖怪ですねえ…。それも相当手練の…。

その人間の男のすぐ後ろには扇子をもった紫を基調とした和服を着ている女性がい



る。並々ならぬ妖力を持っていることがわかる。

文「これはスクープですよ…。何かが起こると私の長年の感が言ってますねえ！」  
そして上空からこつそりと追尾する。

文「あややや…。椀…、大丈夫かな？ いざとなったら助けに行かなきゃ…。」

歩き出した矢先、椀と遭遇したのか  
会話してるように見える。

しかも目を離したつもりは無いのに

女の妖怪の姿が見えない？

文「これは椀が危ないかもしれないですね…。先輩…いや友達として助けてあげます  
か。」

やれやれと言った顔をしながらも、心配なのか急いで近づく。  
なんやかんやで椀のことを気に入っている節があるらしい。

文「ここが話が聴けるギリギリの距離ですね…。どれどれ…？」  
茂みにこつそりと降り立ち聞き耳を立てる。

万が一のためにいつでも戦闘ができるように身構えておく。

椛「あ…あ…その…嬉しいというか…。」

文「ん？」

なにやら戦闘といった雰囲気ではないようだ。

椛はなにやら顔を赤らめてもじもじとしている。

椛「天魔様に！あつていただきたいと思います！」

??「話が早くて助かるよ。よろしく頼む。」

文「あややや。逢い引きですかね…？誰でしょうかこの殿方は…。」

妖怪の女の気配もないし…怪しいですね…。」

なにより私の可愛い後輩の椛をたぶらかさうなんて。

まずどんな人か確かめてみないとですねえ。

文は聞き耳そつちのけでうむうむ首を頷ける。

椛「では天魔様に掛け合ってください！少しここで待っていていただけますか？」  
そういったのを皮切りに

文「その必要はないわ、椛」

そうして茂みから空に舞い上がり

2人の前に降り立った。

文「私がこの人をお連れするわ。あなたは天魔様に聞いてきて。」

そう言って椛を山頂に先に向かわせる。

ふむふむ、顔立ちは悪くない

人間にしてはこの状況に落ち着いており不思議だ。

分析もしつつ核心に迫る。

文「この人、というよりこの人達…ですかね？」

絶対に正体暴いてみせます！

久しぶりにワクワクしてきましたよ！

## 『ある』勘違い

気配には気づいていたが奥の茂みから

黒い羽の天狗が飛び出してきた、椀とはちがう種類のような。  
天狗の中にも種類があるのかもしれないな。

文「この人、というよりこの人達：ですかね？」

なるほど、品定めするような視線とこの質問：

かなり警戒しているな。

椀と話しているタイミングで紫をスキマに隠れさせたのが間違えだったか…。

それに、紫の気配が完全に消えている。

どこに行ったのだろうか…あいつの事だ。何か考えがあるのだろうか。

海星「ありがとう。」

文といったか…？俺の名前は東方海星だ。案内よろしく頼む。

それにもう1人、友人の八雲紫という奴がいたんだが…。

今は別行動になってしまった。後で紹介させるよ、すまないな」

警戒されているのは100も承知だが、どうしようもない

失礼がないように素直に非を詫げる。

文「…なるほど。東方海星さんつと…。

字は…なるほど…。

改めて自己紹介させていただくと、私は鴉天狗の射命丸文です！」

平常を装っているが、会話の間や、表情などからまだ警戒している事が読み取れる

文は手に持っている手帳に東方海星と手帳にメモを取る。

やけに手慣れているようだ…。

海星「文はなにか、探偵のようなものをしているのか？」

気になったので率直に聞いてみる

コミュニケーションを図ることで警戒が少しでも解ければいいのだが…

文「…探偵？いえ、どちらかと言うと私は新聞記者ですわね！」

天狗の中では、日々起きたことや、事件などをスクープとしてまとめることが流行ってるんです」

この時代から新聞記者という言葉があることに驚いたが

天狗はわりと文化がしつかりと進んでいるのだろう。

文が使っている筆も、ほかの人里などでは見られない形をしている。

海星「なるほどね、だからそんな手慣れているのか。」

さらさらと書き連ねているが、達筆であり

要点をまとめたり、場所や日時などを補足で書き込んでいる辺り

もうお手の物なのだろう。

文「いつもこんなことしてますからね。私の新聞、割と人気なんですよ？」

そう言つてにこりと笑う文だが

やはり、どこか上っ面だけの笑顔で

その場を取り繕うような会話しか話していない。

どうしたものか…。

海星「そうなのか。いつか俺も読ませてもらうよ。」

社交辞令でもあるし、実際気になる節もあるので

当たり障りのない返答をする。

ここでさらに警戒されては今後に支障をきたすかもしれないし、慎重にいこう。

文「ぜひ、愛読者になっていただきたいものですねえ。」

そういいながら文は振り向かず速度を少し上げて山を登っていく。

文「…海星さんは今日は何故ここに？」

椀とは面識があるようでしたが。」

唐突に文が話しかけてくる。

山頂までまだすこし距離があるし

聞かずにはいられなかったのだろう

海星「今日は、天狗の長に『ある』交渉をしにね。」

権とはこの前、この山に迷い込んだ時に：まあ助けて貰ったんだ。」

天狗の長に話をする前にここで本題の内容を下っ端に言うのは

手順が違うので、内容は伏せておいた。

権には助けられた訳じゃないが、説明も難しいしそういうことにしておく。

????????????????????  
side文

この男の人、東方海星というらしいですが

なかなか本筋が読めてきましたよ…。

警戒してはいましたが、今日来た理由を聞いて確信しました！

『ある』交渉。

やはり！逢い引きですね…

多分、この山に迷い込んだ時に権に助けられて

恋に落ちてしまったのですねえ。

あやややや、権も隅に置けないですねえ。

でも人間なんて：やはり信用ならないって思うのが妖怪の性でしょうか。



色々確かめないとダメですねえ。

文「なるほど。交渉しにね……。天魔様は普段こそ不真面目な方ですが、独特のカリスマ性も強さも持っているお方です。交渉はどうなるかわかりませんが、上手くいくことを願ってますよ。」

そういうながら、にっこりと微笑む

何故だろうつい先程の笑顔とはちがう

緊張も警戒もすこし和らいだ微笑みだった：気がする。

海星「ありがとう、頑張るよ。」

そう答えると同時に山頂付近にたどりついた。

文「さて、到着しましたよ。人間にしては全く息切れもしてないし意外にすごいですね。」

標高はあまりないが

周囲を見渡すことができる高さの山だ。

山頂はしっかりと開拓されており

小さな民家のようなものから、奥には

大きな建物が建てられている。

あそこに天魔様とやらがいるのであろう。

文「いろいろな気になりますか？ま、行きましょう。」

そういいながら文は大きな建物に向かって歩いていくのであった。

## 天魔との対面

side 紫

少し前のこと。

海星「紫、この天狗は俺だけの方が話しやすい。すこしスキマに隠れていてくれ。」  
海星様は私にそういった。このお方がそういうのであれば、まあ間違いはないのであろう。

今までの信頼からもう導き出される解答は分かっていた。  
にゆん。

天狗が現れる前に一瞬でスキマに身を隠す。

そしてこの2人の会話の流れから出せるベストを私は実行するまで。

それがこの師匠ともいえる海星様に対する私の誠心誠意の行動。

…ところが。

椛といったかしら？この天狗、以前海星様と会ったことがあるようなのですが…。

少し様子がおかしい。

会話が噛み合っているようで、噛み合っていないようですわ。

これはまるで…海星様がこの女天狗と逢い引きしているかのようになっていますわね…。

海星様…これは狙ってやっているのでしょうか…？

とりあえずこのままでは本来の交渉が出来なくなってしまうかもしれないですわね。逢い引きの交渉と勘違いされても困りますし…。

先にはやはり天魔に会って話の本筋を正しておくのが正解かもしれませんわ。

そういつて紫は山頂へとスキマを繋げるのであった。

ここですわね。

紫は海星より先に天魔の元へとたどり着いた。

わかりやすく、天魔と書かれた札が部屋の前にあり

生活の場所というよりかは、業務をするような部屋に見える。

天狗はやはり統率が取れているのだろう。

コンコン

ノックをすると、どうぞ。と返事が来る  
紫「失礼しますわ。」

「やあ。そろそろ来ると思ってたよ。」

side海星

天狗の里は基本的に木の上に家があるようだ。

多分下っ端の天狗たちの住処であろう。

その奥の開けた場所に

木の上でなく、立派な赤と黒を基調とした、漆で装飾されている美しい建物が立っている。

おそらくあそこに天魔様とやらがいるのであろう。

大きな妖気が感じとれる。

ちなみに紫の気配もあそこからしている。

特に妖気などがお互い乱れてないことから

戦闘などが始まっているとは考えられない。

ひと安心だ。

文「さて、あそこですよ！まさか怖気付いたわけじゃないですよね？」

文は顔を覗き込んで問いかけてくる。

手荒ではあるがこの子なりに勇気を出させようとしてくれているのだろう。

すこしこの子の評価が変わる。

海星「ありがとう。大丈夫だよ。」

軽くそう返し

海星「さ、ほら連れていってくれるんだろ？」

文に不安感など抱いていないことを伝えて先を急がせる。

文「なるほど、普通の人間よりかはよっぽど肝が据わってますねえ…それともただ壊

れてるだけなのか…。」

感心と興味を同時に感じさせる返事をわざと何も返さず建物へと向かう。

間近でみるとその建物はさらに美しく、大きく瞳に映る。

文「さて、この部屋ですよ。」

中に入ってすぐの大きな扉に通される。

なるほど、扉の奥から大きな妖気が感じ取れる。

久しぶりに感じる…かつて、妖怪大戦争時代にいたほどの強敵の香りに

戦闘をあまり好まない自分だが、どこか心躍る懐かしさを感じる自分もいることに少し驚きつつ。

海星「失礼するよ。」ガチャ。

??? 「ああ、君…がね。」

そこには、左右に非対称の

漆黒と純白の大きく美しい羽を持つ  
女性为天狗が。

だらけて座っていた。



## 天魔との交渉

海星は文と部屋に入る。

中には、紫と椀もいた。

「先程まで感じていた巨大な妖気に自ら飛び込んでいくようなもの。下手な人間ではこの瞬間にわけも分からず気絶してしまうだろう。しかし、これまでの自分の人生数々の困難を乗り越え強くなった。ちよつとやそつとのことでは驚いたり、狼狽えたりしないのだが…。」

「??? 「やあ…妾が天魔じゃ…。」

天魔と名乗ったこの女性

身長は180くらいであろうか。

山伏のような服はほかの天狗と変わらない。

美しい灰色の長い髪の毛、すつと細い目を開きこちらをしつかりと見ている。そしてさらに特徴的なのが

右には純白。

左には漆黒の羽をそれぞれ生やしている。

座布団を折り曲げ、枕にして寝そべっていた。

そういいながら目の前でだらけている美しい女性を見て

海星は「心の底から恐怖した。」

海星「俺の名前は東方海星だ…。以後お見知り置きを、もう会ったようだが、その紫の付き添いで来ている。」

実際この瞬間にも、海星は今ままで一番気を張りつめていた。

ピキっ…ピ…キ…

服に水晶を忍ばせ、いつでも防げるように…この部屋を壊してでも…。

何故ここまで、この俺が緊張しているのか。

それはこの天魔というやつの中の異常さだ。

はつきり言っておりえないのだ。

普通の生き物は

リラックス状態と集中状態。

すなわち『オン』と『オフ』を使い分けて生活している。

かつての弱肉強食の時代に生き残る奴は、この『オン』と『オフ』を上手く使いこなせられるか。これに限る。

たとえば

敵と遭遇した時、集中し、敵を殺すことだけを考え自分の全てを出し切る。

寝る時は最大限に注意しつつもしっかりと寝る。

こーゆーことだ。

しかし、今、目の前にいるこの天魔は

人間を一瞬で卒倒できるほどの妖力を部屋に入る前から今も俺にぶつけてきておき

ながら…

完全にオフなのだ。

微塵も集中していない。本当にリラックスしているのだ。

得体の知れない恐怖に、能力の有無を疑いつつ話を進める。

海星「紫、どこまで話についているんだ？」

そう紫に問いかける。

紫「ええ、海星様を置いて先にこちらにたどり着いたこと、申し訳ございません。しかし、既に話は通っており天魔はこちらに協力してくれるとのこと。あとは海星様と最後お話して決めたいとか…。」

その紫はというと、特に普段と変わって居ないようだ。  
なるほど。

この天魔の妖力と殺気は自分だけにしか向いていないことを再確認する。

天魔「さて。」

天魔はそう言つて座布団から頭を離し、立ち上がる。

雰囲気が少し変わった気がするが…。

先程とはうってかわりハキハキと喋り出す。

天魔「椀、文。二人とも今さつき着いたばかりで、紫の話とやらは直接聞いてないよ  
うだが、此度の交渉とやらの内容、把握しているか？」

この部屋にいる2人に呼びかける。

文「はい、先程この海星さんから伺いました。」

文は天魔に対してしっかりと返事を

椀「は、はい…。」

椀は何故か顔を赤らめながら消え入るような返事をした。

天魔「よろしい。妾は天狗の長として、先程紫が言ったように賛成しようと考えてい

る。」

天魔は威厳のある声で部下に伝える。

椀「ほ、ほんとですか!？」

文「よかつたですねえ」

椀はびつくりしたように何故か俺の方を向き、

文は椀の方を向き手を握って喜ぶ

紫（何故か噛み合っていない様子がしますが、まあ天魔にはちゃんと伝えて、そして賛成してくれたならそれでいいとしましょうか？）

天魔「だが、待て。話は終わっていない。」

紫「…。」

ここでまた天魔の雰囲気が少し変わった気がする。

妖力とまではいえないが独特の気質でその場の緊張感が高まる。

天魔「この選択で、天狗の未来が左右されると言っても過言ではない。そうだろうか？」

紫のほうをみながら、そして言葉を続ける

天魔「紫のことを信用していないわけじゃないが、昨日の今日であった仲、さらに信

用させてくれないか。」

そういうながら紫の言葉を待たずに最後にこう続ける。

天魔「その東方海星とやら。又シただの人間ではないようだな。

天狗の未来を預けていい器なのか。確かめさせてくれるな？」

紫の言った通りになったようだ。

さすが先見の明を持っているようだ

紫もすかさず天魔をまっすぐ見据えてこう言う。

紫「ええ、この殿方は今後の妖怪の未来をも左右できるお方ですわ。その力ぜひみてから判断しても遅くはありませんわ。」

天魔「なるほど…面白い。

では文と闘ってもらおうか。」

にやにやししながらそういう天魔に

「え?!」

椀と文は顔を合わせて驚くのであった。



## 逢い引きの駆け引き

side 椛

この男の人、東方海星さん。

この人と会うのは2回目なのですが…、いまこの人とまるで…恋をしているようです…。

最初に会ったのは、いつも通り哨戒をしている時でした。

私はずっと人間なんて好きじゃありませんでした。

相手のことを思い、危険に巻き込まれないように人間を追い返していたのですが。

人間は時には武器を持ち、この森に火を放つたり次第に少しずつ対立するようになってきました。

最近では、人間なんて滅多に来ないので安心していましたが。

この海星さんがやってきた時には久しぶりに私は緊張に包まれました。

声も震えて、いまではどんな会話をしたのか記憶にないくらいです。

しかし、そんな怖い期待を打ち破るように

この海星さんが優しく話しかけてたことだけは今でもハッキリ覚えています。しかも…可愛い…? そんなことを言ってくれたような気もします…。

今まででそんなこと言われたこと無かったので、その日の夜はずっとその事を考えて、記憶違いかと迷ったり、やっぱり言われたはずと! 信じたかったりで…。寝ることができませんでした…。

そして、迷う日はついに終わりを告げたのです。

またすぐ海星さんがやって来ました。

内心すぐく嬉しかったのですが、勘違いだったらどうしようか。

違ったらもう恥ずかしくて多分一生、恋なんて出来ないでしょう…。

そうネガティブに思いを募らせながら

声をかけたんですが…。

なんと、私に逢いに来てくれたようですよ!

もう顔から火がでそうでしたが。(出てたかもしれません…)

内心喜びながらも

冷静に対応できたと思います…。

海星さんは天魔様に会いたいのこと。

もしかしたら、お付き合いの許可!?

確かに人間と妖怪の種族を超えたお付き合いななんて聞いたこともないですが…。

話が早すぎますよお…。でもこの犬走権！

文先輩にも後押ししてもらい…！

頑張つて幸せを勝ち取つてみます!!!

そんな思いで、天魔様の元に向かいました！

しかし着いてみると

着物を着た女の妖怪と、天魔様が話していました。

話はなぜかトントン拍子で進んで…。

と、思いきや

天魔様が滅多に使わない能力を使いだして、

人間と天狗の協力?!

なんか話が大きくなり

海星さんと文先輩が…闘うことに…。

私の恋はどうなってしまうのでしょうか…。

文先輩と海星さん…どちらを応援するべきなのでしょう…。

そもそも海星さんは人間…勝てるはずがないのですが…。

海星さん…頑張つて…！

side 海星

なるほど…。意外にも

文と闘うことになりそうだ。

ここまで殺気をぶつけて来ながらも

天魔が出てこなかったその理由を探るが見当がつかなかった。

あまり、能力が戦闘向きではないのか？

まああのちのちわかる事だろうと、思考を放棄し

会話に戻る。

海星「なるほど…、文と闘えばいいのだな？」

軽くそう返す自分に

文「なっ…!!海星さん!見くびってもらっては困りますよ!

先程までは私が合わせて歩いてきたからここまで着いてこられただけなんです!」

物凄い剣幕で文が反論してくる。

そう言えばこの山に入った時から妖力の類はすべて隠し

ただの人間しか思われていないことを忘れていた。

まあ忘れていたというよりかは、それが自分の体に染み付くようにしているのだが。

文「そもそも人間と妖怪が闘うなんてありえないんです!!

天魔様!! お言葉ですが、危なくて認められません…!」

素晴らしいながら、天魔と椀を見る。

椀「そ、そうですよ!! 天魔様! 海星さんも!! 無事では済まないですよ!」

珍しいな、会ったばかりだが

この2人は上下関係を重んじるタイプであろう。

それなのに圧倒的立場が上である天魔に向かって反論することに

少し驚く。

たかだか先程会ったばかりの自分に対して。

まあここは天魔の顔を立ててやるか。

海星「紫。」

そう呼び、ちらりと視線を送る。

紫「天魔様の言うことは一理あります、こちらの力がそちらより弱い場合、協力なんて言葉はなんの意味も持たないのですから。」

それなら、『怪我のないルールで闘う。』というのはどうでしょう?」  
この一言で紫は全てを理解する。

本当に賢い子だ。

天魔の顔を立てつつ

後ろの文、椀の2人はホツとした顔をする。

天魔「なるほど、それが2人のためだな。そうしよう。して、そのルールとは?」

海星「この広い妖怪の山を利用して、鬼ごっこにしよう。紫、お前の能力を知っても  
らういい機会にもなる。」

スキマを俺と文に常に繋げて中継すればいい。」

紫「なるほど…さすが海星様ですわ。それでよろしいでしょうか?」

天魔「ああ、なかなか楽しそうなルールじゃないか。」

2人は?それでよいな?」

お気に召したようで何よりだ。

天魔は2人を振り返る。

文「ええ。これで少なくとも怪我をすることはなくなりましたしね。」

椀「よかったです…。」

文はまだ不安はあるようだがとりあえず2人は納得してくれたようだ。

天魔「それでは、準備に掛かる。

文、椀よ皆にこのことを伝えよ。」

天魔はテキパキと進める。

文、椀「…。。…はっ!!」

なぜか

文と椀はあつけに取られたように1度固まったが直ぐに部屋を出て森のほうへ飛び立って行った。



紫「それでは、私達も外に出ましようか。」

紫は安心したような顔を俺の方に向けて

2人は外へと出る。

紫「これでよかったですよね？海星様。」

紫はホツとしつつもまだ不安が残るようだ。

それは多分俺の中の紫の評価が気になっているようだ。

海星「ああ、良くやった。君はほんとに賢い子だよ。期待以上だ。

あとは俺に任せておけ。」

紫に最上級の褒め言葉を与え、安心させる。

さて、鬼ごっこ…。天狗の力を知るいい機会だ。

すこし楽しいな海星であった。

## 白狼天狗の椀

太陽はすっかり頭上に昇り

時間帯で言うところのお昼前つてところだろうか。

風はそよそよ吹き、山の上ではあるが、過ごしやすい気候となっている。

椀と文はそれぞれほかの天狗を呼んで来ており

天魔が居る赤い建物（あとから聞いたが、鞍馬館というらしい）

その前の草むらの広場に集まっていた。

海星「天狗もなかなか沢山いるんだな。」

広場についた天狗たちをみながらポツリとそう呟く。

身体の大きさや形、色々な天狗たちがいる。

そこへ自分々に気づいた椀がこちらに飛んでくる。

椀「私の仲間や、文先輩のような鴉天狗や、ほかにも大天狗まで沢山来てしまいましたし

たね……。話が大きくなりすぎというか……」

たしかに今思い返しても、文と椛は違う種族の天狗であろう。少なくとも文に獣の耳はついていなかった。

海星「まあ、こーゆーのは大勢でやった方がいいからな。」

最悪でも天魔を説得すればいいのだが、力を見せつけるにはまずみんなに見てもらった方が早い。

それはこの長い人生で学んだ多くのことの一つだ。

椛「なかなか自信満々なんですな、海星さんは。

怖くないんですか……?」

我が身のように心配そうな顔をして椛はこちらを見つめる。

椛「文先輩は、種族の中でもトップの速度を誇る鴉天狗の中でも更に1番のスピードをもっています……。」

鬼ごっこは確かに怪我はしないかもしれないですが、勝ち目を考えると相当策を凝らさなくてはいけないかと……。」

なるほど、種族の中でも得手不得手があるようだな。

鴉天狗はスピードが売りのようだ。

海星「なるほど。なら椀のような狼の天狗はどんな強さがあるんだ？」  
何気なく聞いてみる。

椀「あつ…え。いまなんて?!お、お狼って言ってくれたんですか?!」

椀は急に取り乱したように聞き返してくる。

海星「ん??どうした?確かに狼だろう?」

素晴らしいながら椀をじっくりとみる。

確かに人型になって、狼っぽさは薄まっているが

太古の昔から幾度となく、

(ましてや、こちらの世界に来て最初に会ったのは狼だったしな…)

オオカミと戦ってきた俺には何ら違和感なく狼と断言できたつもりだが…。

椀「あ、あのそんなに見つめないで…。」

椀は手で顔を隠してしまう。いきなり狼の話題になったので見つめてしまったが近かつただろう。

海星「ああ、すまない。それで?なんでそんなにびっくりするんだ?」

話を元に戻す。

椛「あ、そうなんです…。犬走って名前からよく狼じゃなくて、犬に間違われることが多くて…。

ほんとに種族の名前に負けているのが、コンプレックスだったんです…。」

椛はほんとしょんぼりした顔で足元の土を下駄でいじいじする。

なるほど、相当昔から悩んでいたんだろう。

元気づけなくてはな。

そう思い、それを素直に伝える。

海星「椛、出会った時から思っていたんだが。」

椛「…!!ひやい!」椛は唐突に切り出されたので驚いたのか、足元からこちらに顔を向ける。

海星「君の勇氣ある仕草や、凜とした気品から狼であることは明らかだと思つていたよ。

昔から狼と対峙してきた俺が言うんだから間違いない。

だから、もつと自信を持つていいんだ。

そして優しさもしつかりと兼ね備えている。

君は立派な白狼天狗だよ。」

「素晴らしいながら笑顔で権を撫でる。

見た目以上に権はふわふわで柔らかい。

権「はああ…海星…さん／＼／＼」

素晴らしいながら尻尾を嬉しそうにゆったりと振る権が

すこし犬のように思えたのはこの際黙っておこうと思うのであった。

パシヤリ。

海星「カメラの音？」

ふと鳴った、カメラの音に驚く。

現世で聞いた、まずこの時代には存在しない音だったからだ。

文「あややや、カメラをご存知でしたか。

しかし、シャッターチャンスはバツチりいただきましたよ。」

そこには権に対してシャッター越しに意地悪そうな笑みを浮かべる文が立っていた。

海星「それがこの時代にあることが驚きだ…。」

文「なんだか、ほかの時代を知っている口ぶりですねえ…。」

これは河童に頂いたのですよ。他にも作っているようでしたので気になればまた尋ねてみるのもいいかと。」

なるほど河童か…。」

聞きなれた妖怪の名前が出てきて、少し嬉しくなる。

でも皿を乗つけて相撲好きということしか知らなかったが…

そう思いつつも、天狗も鼻は高くないし、あまり記憶は参考にならないことを思い出し考えを変える。

海星「ありがとう、今度尋ねてみるよ。」

文に礼を言う。

文「いえいえ！いい写真を撮らせてもらいましたからね。」

文は盗撮については清々しくも何も思っていないようだ。

椀「文せんばあい…やめてください…恥ずかしいです…。」

権はだらしのない顔を撮られて気が気じゃないようだ。

まあ倫理的にもいいとは言えないな。

文「ふっふっふ、これを焼き増しして白狼天狗たちに売って大儲けです…。」

盗撮どころではなく、よからぬ事を考えているようだ。

文「あややや？そろそろ写真が出てくるはずなんですけど…。」

素晴らしいながらカメラの写真が出てくる所をのぞき込む文。

海星「文、盗撮も良くなければ、許可無しにそーゆー事をしちゃダメじゃないか…。」

素晴らしいながら胸ポケットから今撮ったはずの権と自分の写真を取り出し、チラリと見せる。

権「え??」

文「あややや？いつの間に…。確かに写真が出てきたところを私は見てませんが…。」  
2人はなぜ写真がこちらにあるのか理解できないのか驚く、無理もない。

海星「悪いが、能力を使わさせてもらったよ。」

説明してなくて悪いが、文も悪いことをしようとしたし、お互い様って訳だ。」  
少しフェアじゃないが、種明かしはこの後闘うし、まだ出来ないな。



文「なるほど…。海星さんもただの人じゃないってことですね…。

どおりで…。妖怪である、私たちの前でも、ましてや天魔様の前でも。落ち着いていたのですね。

俄然あなたに興味が湧いてきましたよ。取材をもっと詳しくしなさいですね…。」

少し考え込んだ素振りを見せて、

そういいながら文は舌なめずりしながらこちらを見る。

文の鴉天狗という妖怪の、根底の部分に触れてしまったようだ。

海星「この後の鬼ごっこが楽しみだな。」

こちらもわざと能力をばらした分おあいこだ。

文「ええ、いい闘いが出来るよう願っています。」

お互い遠慮はいらないと、この後の闘いを楽しむそれだけを考え、その場をあとにする。

程なくした頃、広場の中心にて

天魔「さあ!! 皆の者! よく集まってくれた! 今からこの山全体で鬼ごっこをしてもらう! なぜこうなったかは先程話した通りだ!!」

天魔が声高く周囲の天狗たちに呼びかける。

「天魔様のあの感じ、久しぶりにみるな。」

わくわくしたような天狗たち

「これはどうやって勝敗の結果とか分かるんだい？」

みんなで追いかけるわけにはいかないし。」

1人の天狗がそうつぶやく

紫「その心配はありませんわ。私の能力で文と海星をそれぞれ右、左で中継しますわ。」

すーっと空間に切れ目が入り

巨大なプロジェクターの様にスキマが現れる。

天狗たち「おお〜！」

紫「それでは、ルールを説明しますわ。

逃げる方は、1つお宝を決めて持ち、追いかける方はそれを奪ったら勝ちとしますわ。ちなみに身体から離して、隠すことはルール違反です。」

なるほど、タッチするだけだと味気ないので

お宝を狙うというわけか、考えたな。

文「わかりました。それでは海星さん、なにをお宝にしますか？」

天狗たちの中で説明を聞いていた文が立ち上がりこちらに向かってくる。

海星「いや、おれがお宝を狙って追いかける方にするよ。君が選ぶといい。」

そう文に返す。

文「はあ!? 海星さん：貴方は一体どれだけ甘く見てるんですか!?

天魔様の次に最速と言われている私を追いかけるだなんて、戦う前から無理だと分かっています！頭を凝らして逃げ回ってください！」

文もさつきからの俺の反応に思うものがあつたのか、ついに呆れを越して、怒つたようにこちらに反論してくる。

海星「おれの力を試すためにこの余興があるんだ。大丈夫、スピードには自信があるさ。」

そういうながらストレッチを始める。

こーゆーときは相手の感情を煽ったほうが

話は早く済むのだ。

文「なっ…。わかりました…! 権の前で恥かいても知らないですからね!

私のお宝はこれにします！」

なぜここで権の名前が出てきたのか分からないが、恥はかきたくないので全力を出す

ことにする。

文は先程まで取材の時などに使っていた筆を袖から取り出し見せてくる。なるほど、大きさも申し分ない。

天魔「それでは、鬼ごっこ。

逃げる方は射命丸文！

追いかける方は東方海星！

お宝は筆ということぞ！！

双方違くないな？」

天魔が最終確認をしていく。

文「…ええ。」

海星「ああ。」

文はまだ不満そうだが、まあそうだろう

スピードに自信を持っているようだし、それを甘く見られているように対応されたら誰だって不満に思う。

紫「それでは！あと10分で開始としますわ！

各自準備を！」

スキマを上手く操りながら

広場を取り仕切る。

海星「さて、いっちょやりますかね。」

この山をチラと見ながら、どう攻略するか考えて時間を過ごす海星だった。

ザザー。

風が吹き抜け、木々が揺れる。

妖怪の山の木々は妖しく鬱蒼と茂り、これからの闘いをかき乱そうとしている。

## 天狗との鬼ごっこ

天狗たちから離れた広場の端っこに紫と移動する。

作戦会議というか、最終確認みたいなもんだ。

移動するや否や、紫が真剣な顔で話しかけてくる。

紫「海星様……この天狗との闘いに全てがかかっておりますわ。お手を煩わせて申し訳ありませんがよろしくお願いします。」

紫にとってこの天狗との交渉は夢に向かっての自分の力で紡いだ第1歩なのだからな。

それくらい俺もちゃんと分かっている。

海星「ああ、大丈夫だ。紫、君の夢の実現に協力すると言っただろう。安心して待つてろ。」

紫に優しくも、力強く伝える。

天狗との闘いは楽しみではあるが、ちゃんと紫のことを第1に考えている。自分の大切な夢について、俺を頼ってくれたならもちろん全力で応えるつもりだ。

紫「恩に着りますわ。」

そう言つて頭を深く下げた。

海星「これから上に立つものがそう簡単に頭を下げるものじゃないぞ。

紫、それに俺らは友達なんだ。ありがとうでいいんだよ。」

そう注意しつつも笑顔で返す。

紫「海星様…ありがとうございます。」

ハツとしたように紫も笑顔になる

紫の将来をすこし想像してみようとするが、まったく分からない。

ここから長い年月をどれだけかけてもいいのだ。

まったく想像できない明るい未来に自分も立ち会えることを嬉しく思う。

人間を辞めたことに、最初こそ後悔していたが、考え方を変えるだけで、こうも人生が明るくなるとは知らなかった。



そうこうしているうちに

紫が提案した

最終準備の10分が終わろうとしている。

紫にそろそろ戻ろうと声をかけようとするが

海星「ん？」

何やら視線を感じ、天狗たちの方を振り向く。

すると、椀がこちらをじっと見ていた。

振り向くと椀は少しびびくりしたように、

しかし嬉しそうにこっそりと口を動かした。

「が ん ば れ。」

海星「ふふ。」

その健気な可愛さに思わず笑ってしまい

「ま か せ と け。」

と、こっそり口を動かして伝えてやる。

びくっと動いたあと椀の尻尾がひらひらと振れる。

海星「さて、そろそろ行こうか、紫。」

紫「ええ。行きましようか。」

2人は広場の先程の場所に向かってゆっくりと歩く。

????????????????  
にゅん…。

黒と赤の鞍馬館を背に

再度、紫が大きなスキマを2つ展開させる。

右には海星の背中が、左には文の背中が映っている。

まるでゲームのTPS画面のようだ。

天狗たちは再び現れたそれを不思議そうに興味深く見つめる。

天魔「さて、10分経過したな。早く始めよう。」

天魔もわくわくを隠しきれていないのか  
急かすように話を進める。

紫「そうですね。それでは逃げる方の射命丸文が先行で出発してもらいます。  
その3分後、東方海星の出発となります。

1時間経ったあとに、お宝を所有していた方が勝者となります。  
これが私の考えたルールとなりますが、異論は。」

文「はい、このルールを聞くに、仮にお宝を取られた後に、わたしが取り返せばまだ  
勝てるということでもよろしいですかねえ？」

文は顎に手を当てながら、紫に問いかける。  
なるほど。

鬼「ごつこというからには、タッチして終わりではないようだ。相手がまた鬼となり  
(この場合は逆だが。)試合は続くということだろう。」

紫「そうなりますわ。どちらにも平等にチャンスがあるようにそうさせていただきます  
すわ。」

紫は扇子を口元に当てながら答える。

なるほど、なにか考えがあるようだ。

文「なるほど……。わかりました！異論は無しです！」

文は少し考えたあとすぐに返事をする。

まあ最後まで逃げ切り、負けないと踏んでいるからだろうが。

海星「能力は有りなんだろう？おれも異論は無しだ。」

1時間というのもちようどいいな。

両者が合意したので

紫「ええ、能力の使用は許可します。

両者握手を。」

お互いスキマの下に立ち。握手をする。

海星「正々堂々いい戦いをしよう。」

笑顔でそう伝えると。

文「ええ、手加減は無しです。」

キリツと真剣な顔で返してくる。

これは手強そうだ。

「文!!がんばれ〜!」

「射命丸!!頼んだぞー!!」

天狗たちのボルテージも最高潮だ。

紫「それでは、天魔が天狗側の開始の合図をお願いしますわ。」  
そうやって隣で居る天魔に主導権を渡す。

天魔「承った。」

紫の隣でキセルを咥えていた天魔が声を上げる。

さく…さく…。

文の前まで歩いていく。

草原の草が不自然に風に揺られ、天魔の通る道を創っていく。

天魔「それでは、鴉天狗。射命丸文よ

全力で闘ってこい。

天狗として産まれたからには、我の元でその使命を全うせよ…。

先程とは、打って変わった声色で口上を述べていく。

天魔として、天狗という種族の長として、1人の天狗の士気を上げる。大したカリスマ性だな。まったく読めない女だ…。

海星はさらにこの天魔の認識を変える。

文「はっ!!仰せのままに!」

文も最大限の力を発揮する。

溢れんばかりの妖力が文から出ているのが感じ取れる。

ヒュン!!

キセルを持った手を

力強く横薙ぎ一閃。

文の足元に風が巻き起こる。

それと同時に

天魔「開始ッ!!!」

文「ハアツ！」

びゅん。というよりかはギユンという擬音に近いだろう。

天魔の合図の瞬間に文は遙か彼方まで飛んで行っていた。

海星「速いな…。」

天狗たち「やっぱ文さんが最速だな。」

そーいいながら天狗たちはうんうんと頷く。

ちらりと左のスキマを見ると

目にも止まらぬ速さで木々や景色が流れて行っている。

現代で言う新幹線のような。

妖怪はほんとに身体の造りが人間とは違うことをまじまじと理解させられる。

「あの兄ちゃんは大丈夫なのかあ？」

「へっ、ただの人間に見えるけどな。」

心配そうに、はたまた馬鹿にしたようなヤジが聞こえる。

椀「きつと海星さんには考えがあるんですよ！頑張ってください！」

椀も心配になりながらも女の子の白狼天狗たちの群れから応援の声を上げてくれる。

椀の性格からして、みんなの前で声を上げるなんて恥ずかしいだろうに、ほんとに優しい子だ。

てかなんだあの可愛い群れは。

「あれが…椀ちゃんの未来の旦那さんか〜」

「かつこいい人だね！椀ちゃん！」

「や、やめて…」

椀が顔を真っ赤にして頬に手を当てブンブンしている。

なにやら白狼天狗たちの群れがガヤガヤしてきたが、距離があり聞こえない。

紫「さて、そろそろ3分後です。海星様」

紫が呼びかけてくる。

海星「はいよ。楽しみだな…」

呼びかけに応じて紫の方を向く。



天魔「私達も楽しみだ。期待に答えてくれよ、東方海星とやら。」  
出会った時と同じように期待と興味の目で天魔は見ってくる。

海星「ああ。しつかりと見ててくれや。」

これ以上こいつと話していると調子が狂いそうだ。

なので、早々と森の方を向く。

森は、陽の光を浴びていつもより大きく深く美しい緑に見えた。

文が向かったであろう地点にとりあえず向かおう。

確かに勝つなら59分のところで筆を取ってしまえばいいのだが、そんな無粋な真似はしない。

端から全力で向かう。

紫が扇子を広げて前に出てくる。

紫「百鬼夜行の東方海星、私の友人として力を貸してくれたこと、感謝しますわ。貴方を信じているから…貴方も私を信じて、全力を出してくださいませ。」

紫が、ゆっくり、そしてはつきりと口上を述べる。

百鬼夜行の東方海星か…。

百鬼夜行とは本来、妖怪達の群れのこと言うのだが。

まあ、【全てが俺の中に居る】からあながち間違っていないか…  
いいな、気に入ったよ。

海星「久しぶりにカツコつけて見るか…。」

紫にも聞こえない声でぼそりと呟く。

にやりと徐々に口角があがってしまうのが  
自分でも解る。

能力発動。

【水晶を操る程度の能力】

ピキっ…ピキっ…。

誰も気づかれないほどゆっくりと足元の地面を水晶が侵食する。地面に編み込むイメージで。

海星「百鬼夜行。東方海星、参る！」

いつも飛翔する際は霊力を使用するが、今日は妖力を足に纏わせる。ズズツ…ズツ…。

海星「紫、おれの後ろをスキマで守れ」

足元の草が高濃度の妖力に当てられて

黒紫に枯れていく。

ざわついていた天狗たちも開始の合図を待つ。

つかの間の静寂…。

正面の森を揺らす風の音のみとなった…。

紫が開いた扇子をスッと前に向け

パンツ！と開始の快音と共に閉じる。

それと同時に

紫「開始ッ！」

妖力で人間の域を超え、限界まで強化した脚で、バネのように編み込まれた水晶の足元を踏み込む。

海星「疾ッ!!」

その瞬間空気が爆ぜた。

パン!!という先程の扇子とは違う音。

それは音速を超える合図。

一瞬にして視界が広場から森へと飛びこむ。

身体強化された身体でも自身がワープしたのかと錯覚するくらいだ。

そして置き去りにした風が

天狗たち「うわあああ!!」

天狗たちを襲う。

紫「なるほど。こういうことでしたか。」

にゅん…!

紫はスキマを展開し、抉れた地面などから天狗たちを護る。

天狗たち「ありがとう紫さんとやら…。」

天狗たち「なんなんだこれ…。」

よろよろと立ち上がった天狗たちは

右に写った海星の背中を追いかけるスキマをみて驚きの声を上げる。

現在、森の上空をまっすぐ飛んでいるようだが全くわからないのだ。

大きな木が見えたと思ったら、次の瞬間には遙か後方へ流れて行っている。

ここらの地形をよく知っている天狗たちでさえなにがどうなっているのか理解に苦しんでいるようだ。

そのころの海星と言うと。

海星「空を飛ぶのは好きだが…飛びながらの戦闘はなかなかコツが必要だな…。」  
今は直線距離を突っ切っているだけなので問題ない。

海星「おっ…あれは…。」

彼方に黒い点が見えた。

それが徐々に人影となり形がハッキリとしていく。

文「全力を出せって言われたので、飛び続けたいんですが。

さすがに人間相手に大人気なかつたですかね…。」

文は速度を落としフワフワしながら悩んでいると。

ゾクツ…。

今までに感じたことの無い悪寒が文を襲う。

野生の感。いわゆる本能で前に飛びながら身体を捻る。

ヒュツ…！

意識が追いついてきて、文は今の状況を理解しようとするが…。

文「なっ!？」

海星「ん?…：躲されたか。」

文は思わず驚愕の声を上げる。

そこには先程までいた場所に腕を伸ばした海星の姿があった。

コンマー一秒反応が遅れていたら筆を盗られるまでとは行かないが後手に回っていただろう。

文「あややや…：海星さん。お早い到着で。」

海星「文こそ。さすが皆の評価が高いだけある。」

文（あややや…。海星さん。想像以上に速いですね…。）  
冷や汗が背中を伝う。

先程までの、のんびりした海星の面影は既に無く。  
どちらかといえば妖怪達に雰囲気に近い。

おおい!!文さんに追いついちゃまったぞ!  
あの兄ちゃんどーなってるんだ??

広場で見ている天狗たちにも文への不安が漂い始める。

紫「遠隔操作のスキマですら引き離されそうになるなんて…。末恐ろしい方ですわ  
…。」

紫も改めて海星の強さを知る。

しかし。

天魔「文の強さはここからだ。



「さて、どうする？ 東方海星よ。」

「魔だけは期待の眼差しでスキマを見つめる。」

「なるほどなるほど。あの自信の理由が解りましたよ。すこし認識を変えないとい  
けないですね。」

文の焦りの表情は少し落ち着いてきた。

海星「…。」

一方、顔には出ていないものの、海星は逆に焦っていた。

この一瞬でケリがつかなかったのは、

正直、失態だ。

唯一のアドバンテージが消えたと言っても過言ではない。

今までは、バネの力と妖力の肉体強化の惰性で飛んでいただけなのだ。

止まってしまった今。文を超える速度を出すことは難しい。

スタート直後の文が油断している隙に取れば御の字だったのだが。

逆に警戒されてしまった…。

そして文が次に取る行動は…。

文「そのスピード。森の中でも出せますかね？」  
にやりと笑った後

真つ逆さま、森に向かって速度を上げ突っ込む。

海星「くっ…させるか!!」

ピキピキピキ!!

近くに媒体が無いので

腕から水晶を伸ばして捕まえようとするが…。

文「あややや。それが能力ですか？やけに焦ってますねえ…。そんな速度じゃ、可愛い私を捕えられませんよ。」

パキパキパキ!!

ヒュツ！ヒュン。

縫うようにして水晶を華麗に躲していく。

文「美しい能力ですねぇ。それでは。」

ザンっ…！

水晶から容易く逃げ切った文は森の中へと入って行つた。

海星「…。」

ザッ！

能力を切り、追うようにして森に入るが…。

海星「これは…。」

森の中は

ブナやクヌギなどの大きな広葉樹林が鬱蒼としており。

光も届かないところが辺りを薄暗く覆う。

遙か彼方、視界から文のスカートがヒラリと消えた。

追いかけてようと急いで再び飛ぶが…

海星「うおっ…。」

木を避けた先にまた別の木が。

枝や木の幹を避けつつ速度を出すことが出来ない。

海星「やられたな…。」

それを嘲笑うかのように風が海星の頬に伝う冷や汗を撫でて通り過ぎる。

## 逆境の新能力

完全に文は視界から消えた。

海星「くっ……。どうしたものか……。」

思わず苦虫を噛み潰したよう顔になる。

1時間という時間制限の中で

ポツリと森の中に置いてかれた。

海星「……よし。」

柄にもなく少し焦っていたようだ。

こういう時に焦って何も考えずに行動すると取り返しのつかないことになる。

海星「すう……。はああああ……。……。」

海星は深く息を吐いて、吐いて、吐いて吐き続けた。

そして目を閉じた。完全に1度、情報をシャットアウトする。

自分の心の中に沈み込むように…深く…深く…

この一見謎に見える行為は、スイッチング・ウインバックという。

一流のスポーツ選手が行う精神回復法。

選手が絶対的なピンチに追い込まれたとき、自分なりの儀式を行うことにより、心のスイッチを切り替えて闘志だけを引き出すことができる。

皆も無意識のうちにやっているだろう。

海星の場合は脳を1度わざと鈍らせて

新しく思考回路を組み立てているようだ。

落ち着け…。

自分が「今、何を思って、何をしてるのか」きちんと説明できる行動だけを取れば必ず前に進む！

海星（まずは自分の置かれている、状況確認だな。）

① 森の上空から森の中へと戦闘場所を移動された。

② 先程と同じ速度で文は木々の間を縫うようにして飛んでいる。

③ 追いかけても、木が鬱蒼としておりこちらは速度が出せない。

よし、ざっくりとだが、この3つが今の俺を取り巻く問題だ。

① については、文が持ち込んだ土俵だ。

仮に森の中で追い詰めることができたなら再び油断が狙えるだろう。

仕掛けるとしたらこのまま森の中でだ。

②だが、これは実際カラクリがわからない。

文の何かしらの能力なのか、それとも長年この森で住んでいる天狗ならではの、弛まぬ努力によって培ったスピードなのかもしれない。

これに追いつけなければ、勝つ事など夢のまた夢だろう。

さて、そして③だ。これが俺の中で最悪の問題だろう。

まず、長年生きてきてこれは、正直恥ずかしいのだが、俺は森の中に慣れて無さすぎた。

飛行に限った話ではない。

全力で走るにしても、飛ぶにしても

当たり前だがスピードを出せば出すほど木を避けられなくなる。

どうやら、現在のフルで使える目の身体強化の域を超えてしまっているようだ。

しかし、ポジティブに捉えればこれは最大のチャンスであり、武器になる。

文は俺のこの③の状況に油断している。

どうにか解決法を見つけたいものだが…。

目を閉じて思考する。

海星「運がいい幸恵とかなら

こんな感じで、目を閉じても木に当たらなかつたりしてな。」



そんな気を紛らわす小言もはいて気を紛らわす。

先程まで、頬を伝う冷や汗を撫でていた『風』だったが、熱くなった身体を優しく包み、涼しく感じられるほど落ち着いてきた。

その時、冷静になった思考回路にも突風が吹いた!!

海星「『風』か……『風』は抜け道がある限り進み続ける!!」  
なるほど、森の中でも唯一自由自在に駆け巡る風を『視れば』  
俺も先読みができるってわけか…。

海星「なまじ目でものを捉えようとしていたから反応が間に合わなくなったのだ…。  
この戦い!! 明かりなくして『風』だけを感じてものを見よう!!」

解決策を見出した!!!

そして風を視るには……!

【水晶を操る程度の能力】

ピキっ…ピキピキっ…。

音と共に15cmほどの黄色の水晶が額からまっすぐと伸びていく。

同時に、視神経とは別の感覚神経を脳と結び、中枢神経としての役割を与える。

海星「新たなる感覚器官ッ！」

スキマの向こうの天魔も「ほお…。」と詠嘆の声を漏らす。

見た目はまるで鬼の角のようだ。

研ぎ澄まされた精神を持つてすれば風を読むのは容易かった。

よし、これなら行けそうだ。  
あとはこの場からの加速だ

ヒュツ。  
地面を蹴る

トツ。

目を閉じたままでも5 mほどの高さの枝に乗れた。

海星「よし。上々だ！」

その刹那ヒュツと涼し気な音を立てて風が通り過ぎる。

それを見逃す海星では無かった。

海星「いくぞ!!!文!!!」

そう高らかに宣戦布告し、足に力を込める。

## 風の終着点

一方そのころ。

文「ふう…まあざっとこんなもんでしよう。」

文はすこし速度を落としながら飛行する。

文「あややや…海星さんは、やはり只者ではなかったですねえ…。あれはもう妖怪ですよ…。」

先程対峙した時の姿を思い出す。

「名残惜しいですが、結局こちらの土俵に持ち込んだのでね、勝たせてもらいます。」  
大人気ない気持ちがあるのか、すこし後悔したように呟く。

「ゲームとはいえあんな必死に私を追いかけるなんて、なんだかそそのものがあります

ねえ……。」

身体をくねくねさせながら冗談を交えつつ暇を潰す。

桜を蹴り、しなりを利用して前に飛ぶ。

『ビューン！』

瞳を閉じていても、エコーロケーションのように。

先程まで見えなかった先の、もつと先の木でさえ、その造形を通り抜けていく風が浮き彫りにしていく。

2つ先の木の幹に指をグツとかけ加速。

『ビューン！』

ここから6 m先の4本目の木と5本目の木が重なっているので、右に重心を逸らしながら木と木の間をすり抜ける。

そのまま身体を捻りながら木の枝を横から蹴る。  
『ギューン!』

通れる道を瞬時に判断し、最速で駆け抜ける。

感覚と四肢を使つて

蹴つて、蹴つて、蹴つて…。

加速、加速、加速。

文「そろそろ、時間もいい頃になってきましたね…?!」  
ふと空を見上げた文の視界に一瞬チラリと影が映った。  
だがもう遅い。その時には気付くのが遅かった。

海星「よお…油断し過ぎたようだな…!!」

ガシツと文の腕を掴んでその勢いのまま  
地面に押し倒し、倒れ込む。

文「ガハッ！」

背中から地面に叩きつけられたため文は肺の空気を全て出してしまふ。  
これでもう空には逃げられない。

天狗たち「?!」

椀「わ!!!」

スキマの向こうの天狗たちも絶句してしまふ。

海星「やっと追いついたよ。さすがのスピードだ。」

カラカラの喉と熱くなった肺が自身を焼く。慣れないことをした為、息が上がってしまつた。

息を落ち着けながら、ゆっくりと文に語り掛ける。

文「くっ…!どう…して。はっ!？」

文はここで違和感に気付く。

海星は目を閉じている、そして鬼のような角。

文「なにか仕掛けがありそうですね…。ぬかりました…。」

心底悔しそうな顔をする文。

よほどの自信があつたからこそ付け入ることができたのだ。

海星「ああ、君のおかげで風を視ることを覚えた。

さて、筆を頂いていくよ。

どこにある？」

そう言いながら文を抑えている手を離し…。

ピキっ…ピキっ…ピキ…。

地面から現れた水晶たちが文の腕と足を絡めとり縛りつける。

文「あの…!?!ちよつと!?!」

今から何をされるのか、想像がついたのか

文は焦つたような声を上げる。



文（捕まるはずがないと思って、これは…やってしまいましたね…。筆を隠したのは…でも。）

文「全ては天魔様の勝利の為。隠し場所は最後まで言えませぬね。」  
あくまで忠誠心が勝るか。これが天狗。見上げたものだ。

文の服は白いシャツに黒いフリルがついた短いスカートを着ている。  
筆は外見からは見えないので、あるとすれば…。

海星「服の中か…。」  
やれやれ。とした顔になりながらも、ちらりと文の方に顔を向ける。

文「ひあ…あ、あの…。」

覚悟していたのだろうが文の顔が引き攣る。

もがこうとするが、両手両足を縛ってあるので抵抗は虚しく終わる。

海星「目を閉じているから大丈夫だ。」

エコーロケーションのように割と鮮明にみえているが、言う必要が無いだろうから、そこは黙っておく。

海星「ならスキマもいまは閉じておこう…。」

海星が右手を横に振ると。

ピキッ！と快音を立ててスキマの両端が塞がれた。

天狗たち「そんなああ!!うわああああ!!」

固唾を飲んで血眼で見ていたオスの天狗たちが絶望した声を上げて倒れ込む。

椀「…やった！海星さんが勝てそう…！でもなんででしょう、少し胸がドキドキして痛いです…。」

文との距離が近いことに少し胸の痛みを覚える。椀が、その意味を知るのはまだ先のことである…。

??????????

文「なら大丈夫ですね…って！そんなわけないじゃないですか！解いて下さいよ！」

そう涙目で訴える文に対し。

海星「だめだね。1度逃がしている。

俺も友人である紫のために、確実に頂いていくよ。」

無慈悲だが、仕方ない。

文「…あの…優しくしてください…ね？」

そう言いながら目を閉じる文。

すこしニヤリとしたように見えたのは気の所為だろうか。

海星「ああ、優しくしよう。

…ん？」

この一言を皮切りに海星の視界は一瞬「ゼロ」となった。

海星「風が…止んだ？こんなこと…。」

信じられないが

慌てて当たりをキョロキョロする。

正しく言うと、風が消えたのだ。

文「なにしてるんです？時間稼ぎなんて野暮な真似しないでくださいよ。それとも？女の子の服を探るなんて照れちやつて出来ませんか？」  
文が話しかけてくると同時に再び風がそよそよと戻ってくる。

海星「森が深いからか？ああ、すまないな。」

もともと風は小さかったし、木が乱立している雑木林なので無風状態になることもあ  
るのだろう。

再び視界が戻ってきたので文の方に向き直る。

海星「なら、恥ずかしがっても時間稼ぎになってしまうようだから手短にな。」

そう言つて服の方に手を伸ばす。

文「…ええ。手短に…ね…。お願いしますよ。」

隠し場所を言つてくれたら楽なんだが、お互い上のメンツを保たせる意地の張り合い  
になっているので無理だろう。

諦めて、筆を探すことに集中する。

まずは首から肩にかけて見てみるが、ここにはまず無いだろう。サイズのにも隠すと

ころが見当たらないのと、不自然な所もない。

一応、指を当てて確認する。

文「…ん。びっくりするじゃないですか。」

首筋に指が当たったことに対し、びっくりしたのか声を上げる。分かっているだろうに。

俺を惑わそうとしているのだろうか。

特に硬い筆のような感触はない。

襟のところにも隠してはいないようだ。

順当に行けば、次に胸からお腹にかけてだが、仮に隠されてなかった場合にのちのち困るのでここは後回しだ。

足から腰にかけて見ていく。

文「あややや。次は胸あたりかと思いましたよ。海星さんはお楽しみは取っておく派ですか？果物とかは食事の最後に食べる人ですね？」

ニヤニヤしながらも語り掛けてくる。

やはり、お得意のおちゃらけた感じで惑わそうとしてい…

ん？

ここで海星は違和感に気づいてしまった。少し文の声と身体が震えているのを。

確かに、今思えば

族長の命令で勝手にこんなことに巻き込まれて、先程知り合った男に拘束されているのだ。女の子にとっては恐怖でしかなく、気が気ではないだろう。

海星「…。」ピタリと手を止める。

文「…。」どうしました？怖気付いたんですか？」

突然手を止めたので文も不思議に思ったのか

問いかけてくる。

海星「いや、文。妖怪と言えど、女の子に対して配慮が少し足りなかった。怖い思いをさせてしまっただろう。すまない。」

素直に心の内を話す。

文「…。」

文は驚いたような顔をして、じっとこちらを見る。

海星「あくまで勝負。下心などはない。

難しいかも知れないが、安心してくれ。」

安心できるように優しく、ゆっくりと語りかける。

文「∴。(コク)」

少し間が空いた後に、文は小さく、こくりと頷いた。

先程の挑発的な発言や態度はやはり演技だったことがわかった。

安心しろと言われても、怖いものは怖いだらう。あとは行動で示すだけだ。

海星「服を少し脱がすぞ。」

そう言いながら

白シャツにベルトが着いているため、外していく。

カチャカチャ∴。

風の音の他に乾いた金属の音が森に響く。

そしてシャツのボタンを下から下着が見えない程度にはずしていく。

プツ。パチツ。パチツ。

2、3個ボタンを外し、シャツを上にかくし上げる。

腕や足とはまた違う、引き締まった白い肌が空気に触れる。

文「んっ…。」

恥ずかしそうな声をあげる。

それに終わりを告げるかのように。

海星「あつた。」

ホツと安堵の声を上げる。

腰から脇腹にかけてスカートに挟んである筆が顔を表した。

海星「なんでまたここに隠したんだ。」

思わず呆れた声をあげる。

文「鞆もポケットは無いし、そこしか無かったんですよ…。」

独り言のつもりだったのだが、文が申し訳なさそうな顔をする。

海星「じゃあ頂いていくよ。」

そう言いながら手を伸ばす。

その瞬間。



ピタツ。風が止み。

再び辺りは無風状態になる。

海星「ちつ……。なんなんだ？」

でも再び風が吹くタイミングまで待つのは時間稼ぎになりフェアじゃない。

目を開けるのも、風を読むのに慣れたこの感覚を、振り出しに戻してしまいそうな気がして。気が引ける。

そのまま、早く風が吹くことを祈りながら、筆の位置を思い出し手探りで取ろうとする。

ピトつ。

筆ではなく、文の肌に触れる感触がある。

文「え？……んっ。」

海星「あ、すまない。見えなくて。」

急いで離すが、冷たい肌感じが手に残っている。

文「いえ……大丈夫ですよ。そのまま、早く取ってください。」

海星「早く取れと言われてもな……。」

完全な闇の中であまり肌に触らないように筆を探る。

つう……。。

文「あつ……。ちよつ……。と！海星さ……」

お腹の柔らかい感じが人差し指と中指に伝わり。文が思わず声を上げる。

海星「すまない。思いのほか難しくてな。」

こちらも気が気じやないので早く終わらせたいのだが……。

文「……今のとこよりも少し右です。」

もう観念したのか、位置を指示してくれた。

海星「ありがとう。でも右か？」

そう言いながら指を下に降ろすと。

ツプ。

柔らかくも急に沈み込む感触に指が包み込まれる。

文「んあつ……。つ！……ばか!!私から見て右ですよ!!」

おへそに指が当たってしまい文が怒りながら体をくねらせる。

海星「す、すまない……。」

そう言いながら筆を腰から抜き取る。

最近で一番違った意味でドキドキした。

スーツ。と引き抜く。

文「あつ：くつ。ほんと：わざとやったんですか？」

ジト―つとした目で睨んでくる。

海星「わざとじゃない。ここまで繰り返してしまつては信用できないと思うがな。」  
そう軽く返す。

もうこうなればこちらもヤケだ。

文「まあいいです。さて、まだ終わったわけじゃないですからね。次は。わ  
しが追いかける番です。」

そう言いながら再び文の顔つきが変わる。

逃げ切るのはいくらまた骨が折れそうだ。

## 筆の終着点

海星「じゃあこの拘束は、3分後に解けるようにしておくよ。」

そう言つて地面を蹴り森の奥へと足早に向かう。

トツ、ヒユン。

文「…。」

それをなにも言わずに横目で見送り、完全に気配が消えたのを確認した後。

文「はあああ…。」

大きく息を吐いてぐったりとする。

文「天狗最速と謳われたこの私が…なんてざまですか。今日はほんと厄日ですよ。」

そう言いながら先程のことを嫌でも思い出してしまふ。

文「あややや…。男の人にあんなに優しくされたのは、長い時を生きてますが初めてなんじゃないですかね。それもこんな近くで…。」

浮かない顔だが、ぼけーっと惚けた顔で上の空になる。そんな熱くなつた頬を笑うかの様に空に入道雲が流れていく。

そもそも天狗はほかの種族たちと交流はあまりしない閉鎖的な種族である。

その中でも射命丸文は、ほかの天狗たちからも一目置かれているため、進んで近づいてくる男天狗は居なかつたし、そもそも文は記者であれど、自身のそういった事に関心が無かつたのだ。

文「そもそもこれは椀のための戦い！私がこんなに海星さんに惑わされる必要はないんですよね。」

頭をぶんぶん振りながらも冷静を取り戻そうとするが…。

文「…。」

ふと思考を止めると、思い出すのは優しい声と、まるで彫刻のような綺麗な指が自身の肌をなぞる…。

パキン!!

それを目を覚まさせるように腕と足を絡めとっていた水晶がハジけるように割れる。

文「…はっ…／＼／＼かぁー！この借りは高くつきますよ!!」

そんな強気な捨て台詞を吐いて、文は妖力を放出していく。

文「私の『風を操る程度の能力』の恐ろしさ。とくとご覧に入れましょう!!」  
ピュンと軽い身のこなしで、木々の間をスカートを翻しながら飛び回る。

先ほど同様、勝機を見出したような  
ニヤリと悪い顔をして。

side 海星

海星「さて、そろそろ割れたか。」

残り時間はあと僅か。

体力の消耗が多かったため先ほどの場所からはあまり動いていない。

大きな木の太い枝に腰掛けて終わりを待つ。

鳥の声や、木の葉の舞い散る音もいつも以上に鮮明に聞こえ、普段どれほど見落とし  
ているのかを実感する。

海星「逃げる側に立つと風の使い方が分からないな…。」

い。  
先ほどまでは追跡するだけだったが、今度は文の動きを風で感知しなくてはならぬ。

海星「とりあえず文よりも風下に立とう。」

そうすることで、文が動いた際におこる風を頼りに先読み出来ると踏んだからだ。

文「それはいい考えですね。」

となりに腰掛けて腕を組みうんうんと頷く。

海星「なっ…!？」

パチンと電撃が走ったように跳ね起き、そのまま隣の木に飛び、咄嗟に距離をとる。存在に全く気づかなかった。

文「そんな怖がらないでくださいよ。おー、ありえないって顔してますね。かわいいですよ。」

淡々と言葉を続ける文。

海星は何が起きているのか全く理解が出来ていなかった。

今言われた通り、有り得ないのだから。

海星はいま吹いている風に当たったものを角で感じ取り。エコーロケーションの用

に視界を広げている。

そんな中でその目を掻い潜って隣に座るなんて、いくら天狗と言えど、そんな芸当は出来るはずがないのだ。

海星（とにかくやばい！距離を取らなければ！）

完全に先手を取られてしまった、それに相手の手の内は完全に謎。  
こうなれば、終了時間まで逃げ回るしかない。

文「次のセリフは。」

突然、文は声を上げる。

海星・文「（ここにきて、本来の鬼（ここ）になるとはな。二  
一言一句、文と自分の声が重なる。」

文「でしよう？」

してやったりと、ニヤリと目を細める文。

海星「はっ！」

心理状態も全て読まれ、完全にペースを文に取られた。

既に文は腕を前に構え、何かをするつもりだ！



海星はとっさに今立っている枝を蹴り

森の奥へと飛ぶ。

文はその様子を見ても焦りの表情を見せない。

文「それでは暗闇の中へ、1名様ごあんなーい。」

文は腕を海星の方に伸ばし、パチンと指を鳴らした。

海星「なにつ?!まさかッ！」

嫌な予想も当たり。

突然、視界が真っ暗になる。

吹いていた風も、身体を動かす際に発生する風さえも消え去る。

何らかの方法で、無風状態を作り出すことによって、視覚を奪う。

筆を俺に取られた時に文は既に反撃の方法を模索し、視界を奪うという戦法を編み出し  
していたのだ…。

海星「文!!君の能力は!!」

風の主導権を完全に奪われてしまった時点で

この角を使って戦うことはもう出来ない。

すぐ感覚器官を視覚に切り替え、目を開けr

ガシイ!!

妖怪のパワーで腰にタツクルをさされて枝から落ちる。

海星「ぐうっ…!!」

真つ逆さまに地面に叩きつけられるかと思いき身構えたが、  
ふわり。

着地の瞬間に地面から風が巻き起こり、ゆっくりと背中が土に触れる。

文「ええ、私の能力は『風を操る程度の能力』ですよ。海星さん。」

目の前に身体にしがみつく文がいた。

腰の上に乗って抑えられている状況だ。

海星「戦う土俵を間違えたのは俺の方だったか…。」

頼りにしていた風は相手の支配下だったなんてとんだ笑い話だ。

文「さて、終了時間も近づいています。筆を頂きますよ!どこです?」

あと10分くらいで終わりをこの試合は終わりを告げるだろう。

海星「愚問だな。教えられないよ。」

先に筆を渡して追いかける。

正直、それはもう厳しいだろう。勝負を決めるのはここしかない。

文「…。」

一瞬文の動きが止まる。

文「まさか、服の中…ですか…。」

青ざめているのかなんとも言えない表情をする。

海星「先ほどとは威勢が違うがどうした。」

さきほどと攻守が反転したただけなのだが、様子が違うようだ。

文「い、いいでしょう！その勝負！受けて立ちます！」

なんの勝負だ。声が震えているがまあこの際気にしなくていいだろう。

ピキッ。ピキッ…！

ここから出来る限りのことを実行していく。

side文

自身の動きで発生してしまう風を反対の風力で消し、堂々とバレないまま、海星さんのどなりに腰掛ける。

筆を奪われてるときに確認した視界を奪うという、最終奥義でなんとか追い詰めることに成功したまでは完璧だったのですが。

文（あややや…筆が…筆が…）

また服の中だなんて…。困りましたねえ…）

探られるのもあんなに恥ずかしかったのに、次は探る側になるとは…。

テンパってしまい謎の宣戦布告をしてしまいました。

文「やつてやりますよ。」

ずっと思っていたのですが海星さんは今、変わった服を身につけていますね。

和服とは違う、動きやすそうな素材と着こなしです。

下は普通のズボンなのですが

上半身は、肌着の上になにやら鉄…？銀…？でしょうか？ボタンとは違う、交互に

鉄が噛み合って前を止めていますね。

ニトリが昔、言っていたチャックと言うやつでしょうか。

と、とにかく探してみます。

まずはチャックがついている服の帽子？からみていくが。もちろん、そんな所には

入ってはいない。

見た感じ、下半身にも隠すスペースはない。

時間が惜しい。もう制限時間終わろうとしている。

文「……ええい！もうなるようになれつてやつです！」

そう言つて、首元にあるチャックの端に手を伸ばし思いつき引き下げた。

ジジッ！チイー!!!

海星「危ないな……もう少しゆっくり下げてくれよ。」

もし肉が挟まれてたらと考えると……。

ゾツとする。妖力も神力もあると言えど、怖いものは怖いし、痛いものは痛い。

びっくりして思わず軽く注意してしまっただが、それに対しての反応がない。

海星「……文？」

ふと文の方を見てみると。

文「……。」

手で目を隠しながら、動かない。

文（……つああ、もう言葉にならないです……。一度冷静になるともうだめですね。押し倒してしまいました。この遅い体つきがハッキリと……。腹筋もちらつと見えて、鼻血が出るかと思いました……。）

その時。

スキマ「制限時間残り1分です。」

紫の声が2人の背後から聞こえてくる。

海星「おーい。」

依然として文は固まったままだ。

このまま時間が無くなるのが惜しくないのかと思いをかける。

文「はっ…！なにを…!? 腹筋が、そ、そうだ筆ですね。あ、ありました…。」

訳の分からないことを言いながらパーカーの内ポケットから筆を抜き取り、風を起こし、上昇する。

もう1分以内で終わりか。

何故か文は満身創痍だが、もうこの際それもチャンスだ。もう天に任せるしない！

文「はあはあ…。それじゃ私の勝ちですね。もう捕まります」

海星「まだだ！」

そう言つて水晶を足場にして文に飛びつく！

文「!?!でも甘い！全部風で見えてますよ！」

そう言いながら風を起こし、海星を跳ね除ける。

…どん。パリン!!

嫌な音をたてながら、『海星が割れた。』

文「な、なんですって!?!」

海星「風に信頼を置きすぎたな!!」

そう言いながら今度こそ後ろから文に飛びつく!

ギョツ!

文「なんで!!くっ!」

二人とも受け身が取れずに草の生えた地面に倒れ込む。

その衝撃で筆が2人のちょうど前に落ちる。

咄嗟に手を伸ばすが…。

文「はあっ!!」

文が咄嗟に風を起こし筆を巻き上げ上空へと飛ばす。

海星「くっ!!!まだだ!!届け!!」

ピキピキピキピキ!

地面から腕のような水晶を伸ばし空中へと筆を追いかける。

文「お願い!届いて!!!」

ビュオ!という心地いい風の音がおこり

風も筆を追いかける。

風と水晶が抱き合いながら竜巻のように上昇する。

文「抱き合い…ながら…?」

ふと「気づいて」しまった。

筆を見上げる海星の頬が、文の頬にぴったりとくっついているのを。

文「あややつ?!?!つえ?!?!」(?!?!近い近い近い近い!!!)

文「んんん!!!もう飛んでけえええ!!!」

この瞬間。文の妖力が爆発した。

ホントの竜巻が2人の背後から巻き起こり、2人を弾き飛ばす。

海星「お、おい!!」

咄嗟の攻撃に海星もこれには防ぎきれずに吹き飛ばす。

文「…ふうー。ふうー。」

荒々しい深呼吸でなんとかかなにかを耐えている文。

…ペキッ!

そんな快音と共にへし折れる筆。

突如出力が上がった竜巻に巻き込まれたようだ。



文「ああああ!!!私の筆があ!!」

筆にトドメを刺され（刺したのは文だが。）深呼吸も虚しく、ガツクリと膝をつく。

海星「あー、あの竜巻でか…。」

どうやら勝敗はつかないようだ。

ガツクリと肩を落とす文をどう励まそうか考えていると。

スキマ「勝敗の付け方はこちらで判断させていただきます。

御二方は1度このスキマを通ってこちらに帰ってきてください。」

そう紫がスキマ越しに声をかけてくる。

海星「だ、そうだ。文戻ろうか。」

文「はいい…。」

明らかにとぼとぼとした足取りの文と海星はスキマを通り、鞍馬館の前の広場へと向かう。

## 絶望の連戦

文「聞いてもいいですか？」

最後、いつの間に後ろに？」

負けた決定打が見破ることが出来なかったのだろう。文がスキマに向かって歩きながら聞いてくる。

海星「簡単に言うと、あらかじめ君の背後に水晶の木を生やしておいた。筆を盗られた後は、水晶の分身をそこに置いて、地面の中を水晶で掘って水晶の木に移動。」

文「…そんな大胆なことを…。」

びつくりした顔で、息を呑みながら聴く文

海星「土の中は風で探知できないし、木をまるごと生やしてしまえば、風を信用して後ろを振り向かなかった君は本物と勘違いしてしまったってわけさ。」

素早く動いた時の風を感知し過ぎていた文にとって、地面からゆっくりと生える木は

気付きにくかったと言うことだ。

文「もつと自分の目で見ろべきでした…。」  
啞然とした顔でさらに肩を落とす。

海星「次に活かせばいいんだよ。そんなことより文は充分強かったよ。みんなも見て  
て思ったはずだ。」

そう文に言いながらスキマをくぐると。

パチパチパチパチパチ！パチパチパチ！！

広場へと戻ると、天狗達が大きな拍手で迎えてくれた。

文さーん！おつかれさまでした！！

すごかったつす！！

かつこよかつたですく！！

そんな暖かい声が文を包み

海星「ほらな？」

にっこり笑いながら文の方をむく。

文「えへへ…！清く正しい射命丸文！ただ今戻りました！」

ちよつとは元氣も戻ってきたようだ。

人間のあんちゃんもすごかったぞ!!!

ほんとに天狗と勝負できるなんてビックリしちまったぞ!!!

俺への劳いの声も多く受け取れた。

紫「海星さま。おつかれさまでした。勝敗は決しなかったものの、天狗の皆様にとて  
もいい印象を付けられたかと。期待以上ですわ。」

紫がタオル代わりの布を渡してくれる。

それで泥や汗を拭き取りながら。

海星「ありがとう。ああ、なかなか遊びというものは勝敗が最後まで分からなくて  
いいな。なかなか肝が冷えた時もあるよ、楽しめたよ。」

素直に思ったことをそのまま伝える。

紫「それにつきましても、今後のヒントとなりましたわ。人間と妖怪の垣根を無くす

戦闘方法。必要なものがだいたい見えてきましたわ。」

なるほど、種族の力の差があつてもルールを決めてしまえばお互いに本気で戦えるというわけか。

海星「それはよかつたよ。

話を戻すが、この戦いの本来の意味でもある天狗との協力は出来そうなのか？」

まあそれを決めるのは天魔なのだが。

そう判断し、紫ではなく天魔のほうを見る。

天魔は文の前に立ち、労いの言葉をかけていた。

ん？

ここで何か違和感を感じる。

出会った当初の天魔の雰囲気とは全く別人の様なのだ。笑顔でなおかつハキハキと早口でで天狗の皆に何かを指示している。

そして話を聞いている天狗たちの顔が引きつっているのだ。

文でさえも少し困っている。

椛が何か天魔に言おうとしているが…

いつの間にか、手を頭に乗せられて制される。向こうが俺の視線に気づくと。

銀の長い髪を優雅に揺らしながらこつちに歩いて…。

天魔「始、のい、る」

その刹那。天魔は消えた。

海星「なっ！」

紫「…?」

この時、恐ろしく世界がゆっくりに見えた。

純白と漆黒の軌跡が目にはつきりと刻み込まれるが、身体が反応できない。

紫（っ!!?!海星様っ…!!）

紫の瞳にゆっくりと飛び込んできたのは

真っ赤な目を見開いて海星の背後に跳ぶ天魔の姿だった…!

天魔「…らな。」

そう聞き取れない声を出し背後に回った勢いで膝蹴りを繰り出す。

ミシミシミシつと脳に響くような嫌な音。

海星「ぐっあが?!」

声にならない声を出しそのまま森に吹き飛ばす。

パァン！

一呼吸置いての爆風。

紫「なっ！海星様!!」

キツと天魔を睨みつけて反撃のスキマを展開しようとするが…

天魔「こ、程…じゃ倒れ、よ。」

と言いつつ、森へと突貫する。

椀「か、海星さん!!」

椀の決死の叫びも虚しく草原に溶け込んでいく。

砂煙が上がったあと

紫と天狗の皆が、先程のゲームで使用していた右側のスキマを見る。

海星がゆっくりと起き上がるのが見え、一同はひとまずホッとすする。

ギバキ!!バツバキ!ドン!

木を、枝を背中でへし折りながら吹き飛ばされ、やっと岩にぶつかり止まった。

海星「くっ…。」

アバラが2本折れたか…。追撃に備え、即席だが水晶で繋ぎ合わせる。あとでゆっくりと治せばいい。

海星「しかし、いきなり何なんだ。やはり攻撃の鋭さといい、只者では無かったな。出会った時の殺気の量にしては、部下の文と戦わせたりしていたので、能力は戦闘向きではないと思っていたが…。」

天魔「や、大× か？」

ふと顔を上げると、天魔がすーっと笑顔でこちらを見ている。

海星「さつきつから、聞き取れねーけど、闘いたいってことは理解したよ!!」  
不意打ちとはいえ俺のアバラを折ってくる妖怪なんてこの時代に居るとはな。

端っから靈力を最大だ。

闘いの姿勢を取る。

ピキピキピキピキ!

フォン…ヒュンヒュンヒュンヒュン



海星の周りに10個の水晶玉が浮かぶ。

海星「水晶乱舞……！」

はるか昔に使った技だ。

この水晶は自由に動かせるし、動かしていない時には自動で護る盾にもなる。

天魔「！」

天魔は少し驚いたように、さらに笑みを浮かべる。

海星「最近、どーも本気を出せなくて腕が鈍ってたからな……。」

いつにもなくドキドキしてしまう。

退屈な日々を変えてくれそうなこの「好敵手」を前にして。

天魔は動かない。

なるほど、最初の一撃の分こちらからの攻撃を待っていているのか。

ならば遠慮なく

海星「いくぞ。」

足に力を込める。

ボツ!!

力を地面が捉えられる限界の出力で踏み込んだ足は、無駄なく飛ぶ力に変換し加速させる。

水晶玉と共に、空中の天魔に突貫。

右をそのまま捻りながら正拳突き。

最高のタイミングで最高の力の入り。

ドン!!!

自分の想像と少し遅れたタイミングで音が聞こえる。

がはっ!?!

その瞬間鋭い痛みを感じ、現実に戻る。

海星「な…に?」

背後に天魔が立つ。

その事実気づいたタイミングで「バシュツ」と音を立てて右の脇腹から出血。

したり顔の天魔、指をクイクイっと動かして

「ら、ききなよ。」

辛うじて聞き取れた。

海星「カウンターか。やるじゃないか」

目で追えなかった…神力でも使ってみるか？

ここで自身のスイッチを切り替える。

クン…クン…つと身体が引つ張られる感覚

海星の気質が変わっていく。

海星「さらなる身体強化だ。」

神力を使用すると、土地の自然からエネルギーを貰ったりすることが出来るようだ。

幸いにしてここは森の中。

いつにも増して力が高まる。

ピツ！ 足元から雷のような黄色い火花が散り…

天魔へと一瞬で肉薄する。

天魔「！」

先程と同じく右の正拳突きッ！

当たる瞬間に天魔が身体を下に沈み込ませる。

なるほど、さつきは上に透かされてから爪でカウンターを喰らったのか。  
今なら見えるッ！

ゴツ！と鈍い音。

天魔「ぐっ…。」

正拳突きの威力を利用し、回転方向にベクトルを変える。  
左足で半回転の踵蹴りだ。

カウンターで合わせるはずだった右手を咄嗟に出して防いでいるが

天魔は威力を消しきれず後方に飛ぶ。

海星「なあ…防ぎ切ってくれよ？」

そう期待を込めた呼びかけをボソリと呟いた後、近くの枝を蹴りさらに天魔に飛び込む。  
む。

チツつと空気と擦れる音を立てながら最速の突きの連続。下段に向けて撃つ。  
更に上段には、浮かぶ水晶玉からの枝のような追撃。

パキ。パキ。パキッ！

天魔は突きを両手で防ぎながらも、後ろの水晶を最小限の動きで交わす。

だが、狙いはそこでは無い。

海星「ガードが下がったな？」

ニヤリと笑う海星。

ピキッ!!!

天魔の背後の水晶玉から太い枝が一直線に伸びる!!

完全な死角からの一撃。

天魔（ギョロ。）

ヒュッ。

しかし、天魔はその場で一回転。

寸前で躲す。

どんな反応速度してやがる。

だが!!

策は深く考えるもの、色んなパターンも見越しての策だ。  
今の水晶はわざと太くしてある！

躲された後の水晶を踏み場にして…。

海星「喰らいな。」

ゼロ距離から加速した膝蹴り。

開幕の不意打ちのお返しだ。

ポツ！と速度の限界を超える音をたてながら襲い掛かる。

ビュオオ!!

衝撃波が木々を大きく揺らし葉を落とす。

風を切る音をたてながら、天魔は遥か遠くに吹っ飛ぶ。

…？

ここで感じる違和感

それを感じた刹那。

ズン。

海星「ガハっ?!」

【胸を貫かれる】

## 全てを置き去りにして

【胸を貫かれる】

海星「なんだ…と」

真つ赤な眼を見開きながら、目の前に天魔が立っていた。

手応えの無さと、違和感の正体はすぐに分かった。

膝蹴りを食らう瞬間、自分で後方に飛んだのだ。そして同じ速度で突きを繰り出しながら突っ込んできた…。

死角から水晶の攻撃の時もそうだ。

こいつ、躲す瞬間に1度後方を振り返りやがった。

天魔の素早さは最初のカウンターで見切ったはずなのに、それを超える速度で攻撃して来たのだ。



天魔のスピードについての認識を変える。

「これ程強い妖怪が雷鬼の他にまだ居たとはな…！」

「いや、待てよ？」

「もしかして…いや、間違いない。」

海星「あの時代の妖怪の生き残りだな？」

「死んでいたかと思っていた雷鬼が生きていたんだ。他の生き残りがいてもおかしくない。」

天魔は嬉しそうに、コクリと頷いた。

なるほどな。なら本気で相手しないとな。

海星 「認めよう…お前は強い。」

貫かれた腕を抜き、近くの枝に飛び乗る。

ズツ…ズ…ズツ…と海星の気質が再び変換していく。

ドス黒い紫色のオーラが海星を包む。

シューッと音を立てて、傷も治癒していく。

海星「さあ、死合…再開だ。」

海星の傍で青々と茂っていた木が

ククツ…ミシッと悲鳴を上げて枯れていく。

頭上に生えていた緑色の葉が見る見るうちに茶色く変色し…。

プチツ。

ドガン!!バキバキッ

木が耐えられるはずもなく、海星の初速で脆く崩れ落ちる。

紫色の軌跡を残しながら一直線に突貫する。

天魔「!」

天魔も腕を前で構えて戦闘態勢をとる。

瞬時に天魔と海星の拳と拳がぶつかり合う…!

ことは無かった。

ピキッピキッ

手の爪を水晶でスパイク状の鍵爪に変える。

最高速度で動きながらも急な方向転換を可能にする。

文と戦った時の応用だ。四肢を使うことでさらに予測不能な戦術が生まれる。

お互いが肉薄する寸前、地面と木に爪を食い込ませて右からの攻撃に方向に変えた。

天魔「ぐっあ!!」

ドカツ…ガラガラ!

奇襲とも言えるが、まともに直撃した天魔は吹き飛び、岩にぶつかる。海星「ふう。今度こそ一撃か。」

大したダメージは入っていないのか、ガラガラと音を立て、スつと天魔が起き上がる。だが、悪いがもう攻撃も速度も見切つ

ズガン。

は??

軽い音と共に空中に投げ出される。

先程立っていた所には天魔が腕を振り抜いて立っている。顎に掌底を食らったようだ。

バキッ。

天魔の回し蹴りが右の脇腹から左へと衝撃を伝える。

海星「がハッ!?!」

わけも分からず遙か後方へと吹き飛ばされ、ドバッと血が口から噴き出す。

鉄の味が口いっぱいに広がる：嫌な匂いだ。

吹き飛ばされながらも思考を続ける。

天魔が2人居た? いや吹き飛ばしたのだから3人!?!分身なのか?

そもそも目で追えなかったが、さつきよりもさらに速く動いている!?

出会った時からずっと感じていた殺気が追いかけてくる。

海星「とにかく。やばい!!!」

こうなったら更に更に妖力を解放をするしかない!!

完全に未知だ。理性を保てるか…?

ゾツとするような殺気。

次の瞬間には、左頬に爪を立てようとする天魔の姿が！

ピキッピキッピキッピキッ…キ!!

海星「水晶守護結界！」

水晶乱舞を触媒にして、自身を水晶で固めて防御する。

1度冷静にならなくては!!

ピタッ！反撃を恐れたのか天魔の動きが蹴りの姿勢で止まる。

海星「どーゆー動きしてるんだ。いつの間にその姿勢になってたんだ。見えないぞ

…」

分身なんてちやちなものじゃ無いな。

これは単純なスピードだ。

天魔の速度が俺の理解を超えているんだ。

天魔「…。」

じつとこちらを見た後…。

バコッ！ズガン!!ズガン!!!バキ!!

滅多矢鱈、手当り次第に殴りつける。

ピシッ！ 眼前に一筋入るヒビ。

海星「おいおいおい!!こいつは文明を滅ぼした爆弾さえも防ぐ水晶だぞ!!」  
そんな嘆きも虚しく。

ゴリッ！ピシッ！

爪で表面を抉り取られたり、さらにヒビが入る。

ニヤリと笑った天魔が聞き取れる限界の速度でゆっくりと口を開く。

天魔「コ　　ロ　　ス…。」

ガシッと2 mほどある水晶を掴み。

ブン！つという音と共に上に投げられる。

30 mほどで位置エネルギーと運動エネルギーが入れ替わり、地面に落下する。

予想落下地点で目に見えるほどの妖力を込めて待ち構える天魔が…。

ゾクツ…。

全身の細胞が恐怖するほどの殺気に包まれる。

やばい!!!

内部から更に水晶で固める。

天魔「し、祖な、」

天魔が口を開き地面を踏み込んだ瞬間、周囲に白と黒の羽根が舞う。

天魔が振りかぶった後、一呼吸もなく。

ドゴオオオオオオオン!!!

劈く程の轟音。

最高速度で打ち出された衝撃で水晶は吹き飛ばされる。

海星「クツ…馬鹿力め。」

バギバギパキパキ!!!

ヒビが全体に広がっていく。何とか割れなかったようだ。

しかし異音に気づく。



海星「なにっ!？」

それだけでは無かった。周囲に浮かんでいた白と黒の羽根が竜巻のように水晶を削り取っていく。

ギュギュギギギギギギ  
!!!!

高速回転するカッターのように易々と表面を引き裂いていく。

一瞬で肉塊にされてしまうだろう。

身体に届くまであと3cmだろうか……!

未恐ろしい技だ。

海星「もう残された道は一つだけか。」水晶の中でボソリと呟く。

この絶体絶命の状況で目を閉じ、

【更に妖力を解放する】

ズツ……ズツ……と這い寄るように……

太古の憎悪や憤怒の感情が身体をゆつくりと蝕む。

心の中に黒い水が入り込んでくるようだ。

目を開けると、水晶は真っ黒になっていた。  
少し驚くも、力が漲る。

パアアン！

纏った水晶を内部から爆発させ、脱出する。  
思考は至って澄み渡っている。

天魔が防ぎ切ったことが満足なのか、目の前に降りてくる。

天魔「やあ。聞き取れるかな？」

天魔が話しかけてくる。

先程まで途切れ途切れにしか聞えなかった天魔の声が聞き取れる。

海星「ああ。やっと聞き取れたよ。」

妖力を解放したことで、身体能力が格段に跳ね上がり聞き取れるのだろう。

天魔「お！鬼の長に加えて2人目だ。

この能力使用時の我と会話できるのはな。」

嬉しそうに話す天魔だが。

そんなことよりもだ。

海星「で？そんな無駄話をしたくないなら、後でいいんじゃないか？」

久しぶりの好敵手で疼きが止まらない。

天魔「まあまあそう焦るな。我は逃げぬ。

口上も聞き取れてないと思つてな。」

けらけらと笑う天魔。

不意打ちから始まった戦闘だと思つていたが、口上を聞き取れていなかったのか。

海星「そうだな…では。」

2人はしつかりとお互いを見据え合い…。

壊し、崩し、抉りとつた地形の中で。

『始祖の天狗』アマツ！加速して参る！』

赤い目を妖しく煌めかせて：

『太古の百鬼夜行』東方海星！厄災を引き連れて参る！』

紫色の太古の衣に身を包みながら：

バツ!!!ドン!!

拳と拳がぶつかり合う。

威力は俺の方が、速度は天魔の方が少し上と言ったところか。  
勝敗はもうどちらに転んでもおかしくはない。

拳を交えながらお互いに読み合う。

海星は1度押し切れればそのまま連撃に繋げようと。

天魔は相手の速度に自分の速度を上乗せした一撃必殺のカウンターを。

ここに来て闘いは再び単調なものに変わる。もう能力などの小細工は互いに通用しない。

ズガン！バキバキ。

拳がぶつかり合う毎に木や草花が儚くその命を終え、地が割れる。

海星「なあ。」

天魔「ああ。」

みなまで言わずともお互いに理解する。

【次で決着をつける。】

天魔「加速する程度の能力」

開いていた翼がツバメのように鋭くなる。

海星「水晶を操る程度の能力」

パキ…パキパキ…と腕に黒い水晶が巻き付く。

ドン！という爆発音とともにお互いの姿が消える。

グシャつと聞き慣れない酷い音。

先に動いたのは天魔だった…？

いや、先に動いたのは海星だったのだが腕を振り抜いたのは天魔だった。

海星は木を薙ぎ倒しながら吹き飛ばされる。

ズガガガガガ!!!

海星（くっ…更に早くなってやがる…。）

手元でさらに加速しやがった。

このままでは…。

…だ。

ドクン。初めての感情に包まれる。

いや…。いやだ。

《負けたくない!!!》

ドクン。

心臓が強く鼓動する。

海星「まだまだ…こんなもんじゃねええええ!!!」

森全体が震える。

はるか昔の友が帰ってきたことを喜ぶ様に。

吹き飛ばされていたが空中でピタリと止まる。

さらに黒紫のオーラが身体の奥底から止めどなく溢れ出る。

ドツドツドツドツドツ…。

海星「…さあ…。最終ラウンドだ!!」



最高に気分が良い。

天魔「そう来なくてはな!!行くぞ!!」

その瞬間、天魔の瞳の赤さが炎のように全身に広がる。

そして2人は地面を蹴る。

もしかしたら、はるか昔にこの森ですれ違っていた、

そんな過去があつたかもしれない。

奇妙な巡り合わせだ。

悠久の時間が流れた後、そんなことを思いながら、2人は一陣の風になり消える。

パツパツと…紫色のオーラを自身に纏って発光する。

パン!パン!と重力も、光も、時さえも置き去りにして…。

さらにお互い加速を続ける。

「くっ……。自動追尾が振り切られましたわ……。まさかここまでとは……。」  
右側のスキマの景色が動かなくなった。

天魔『始祖鳥の終焉』

「はああああああああああ!!!」

紅の軌跡が空を統べ劈く様に

海星『百鬼夜行 宵闇の宴』

「うおおおおおおお!!!」

黒紫の軌跡が地を這い引き裂く様に

時を貫き加速した白黒の世界で。

黒紫と紅の拳がぶつかり合う。

2人の背後には、いつの日かの虹色の椿が優しく揺れていた。



海星だった

白黒の世界に色が戻る。

海星「大丈夫か？」

天魔に呼びかける。

天魔は黒い水晶に全方位から串刺しにされていた。

技名の如く、火を囲んで妖怪たちが宴をしているように見える。

天魔「…ああ。なんとかな…。」

普通の妖怪ならば、死んでいるだろう。

お互いに死なないことを認識した上で本気でぶつかり合ったのだ。

パキン!!心地よい音と共に水晶が消え去る。  
と同時に、妖力も解除する。

スタツと受身を取り、着地する天魔。

天魔「あー、やられたのー。」

突然、出会った時のようにだらけた喋り方になる。

海星「やはりそれが素か？」

先程の雰囲気とは似ても似つかないので思わず聞いてしまう。

天魔「あー、そうだなー。私の能力は【加速する程度の能力】使用するとく思考能力も動きも加速するからく…。」

めんどくさいのかここで言葉を止める。

海星「なるほどな。加速する程度の能力…恐ろしい能力だ。」

こちらが防御したり、時間稼ぎするとどんどん不利に陥る。今回の戦闘はほんとに紙一重だった。

あと少し判断が遅れていたら…なんて考えたくもない。

くにゆん。

突如目の前にスキマが現れる。

紫が用意してくれたのだろう、広場にこれで戻れそうだ。

海星「さあ、戻ろうか。」

天魔「おー、便利じゃのー…。」

ゆつたりと話す天魔にすぐく違和感を覚えつつもスキマに向かって歩いていく。

## 決着の後に

2人は森を後にし、スキマに入っていく

海星「あ、忘れてた」

ハツとした顔で唐突に振り返る。

天魔「どくしたく？」

スキマに片足を踏み出していた天魔がバランスを崩す。

先程まであんな機敏な動きで戦っていたとは思えないが。

海星「いやな、さすがにこのままでは帰れんだろう。」

そう言つて周囲を指さす。

そこにはお世辞にも素敵な森と言えない荒れ果てた土地が広がっていた。

天魔「あゝ、すこしやりすぎたかもしれんのか。」

あちやーと言う顔をして頭をぼりぼりと掻く。

2人とも白熱して、周りの地形のことを考えていなかったのだ。

海星「まあ問題はないがな。」

ピキピ…ピシッ

そう言つてひとつの水晶を創り出す。

いつの日か出したダイヤモンドカットが施された水晶だ。

まあ治すと言つたらなぜかダイヤモンドのイメージなのだ。

天魔「…？」

何か策があるのだろうかと黙つて見守る天魔

海星「破！」

パキン！という心地よい音が鳴り響いた後。

ゴゴゴゴゴゴつと逆再生のように割れた地や砕けた岩が元通りになつていく。

天魔「ほ…す…ごいの。」

能力の幅の広さに思わず感心する天魔

自分の能力も似たようなもんだらうに。

海星「まあな…ん？」

少しの違和感を感じ、目を細める。

天魔「どくしたのだ？」



不思議そうに尋ねる

海星「いや…最後の太技同士のぶつかり合い。辺り一帯が相当破壊されていると思っただけだ…。」

ここで言葉を止め、当たりを注視する。

能力の使用なので修復部分は一応手に取るように把握出来るのだが…。

天魔「たしかに無いな。」

天魔を穿いた水晶の塊はあれど、衝撃で抉れた地面などは元からそんなものは存在していないかのように傷がついていないのだ。

あのレベルの技のぶつかり合いなど、よく良く考えれば周囲の森を薙ぎ倒しているはずなのだが。

海星「まあ、むしろ困ることは無いのだがな。」

どうせ直るものだし、直す手間が省けたようだ。

天魔「そくだなく。めんどくさいからな。」

早く戻ろうぞ。」

そう言ってスキマに入る。

海星「ああ、そうだな。」

墮落?している天魔に半ば呆れつつ、推測できないこの状況を思考することを一旦やめてスキマに足を再度運ぶ。

さて、ここからだ。

ゆん。

広場に切れ込みが入り、天狗のみなが固唾を飲んで見守る中海星と天魔が帰ってきた。

広場は先程、文と対戦した後の拍手喝采とは違い

張り詰めた空気の中静まり返っていた。

それもそのはずだ。

俺が勝ったとはいえ。

天魔が独断で火蓋を切った、延長戦

この後の取り決めは全て頂点である天魔に委ねられているのだ。

紫が俺の隣にくる。

ごくり。

思わず唾を飲む音が聞こえる。

どの天狗かはわからない、しかし種としてのこの先の未来に皆が注目しているのだ。

椀「うう……。」（どきどき）

椀は居てもたつてもいられないと言った面持ちで張り詰めた空気の中、天魔と海星を交互に見る。

文「だ、大丈夫ですよ。海星さんはベストを尽くしましたから。」

そんな椀の隣で励ますように同じようにこちらを見る文。

2人はこちらを顔を赤くしながら見てくる。

なぜかあの二人だけ雰囲気が他と違うが……。

そんな各々が張り詰めた空気の中

天魔が口を開く。

天魔「みなのものゝ、戦いを見てそれぞれ感じるものはあつたと思うゝ。

妾を筆頭するゝ天狗はこれから、全面的にゝ紫と共に人と妖怪の共生を目指すことにしたゝ。異論はないなゝ？」

海星「…。」

紫「…。」

なんとも締まらない一族の決断だが…

天狗たち「「ハッ！仰せのままに」」

膝をおり、拳を地につけ

最大の敬意を持って同意した。

多分なのだが、このモードの天魔が普段の姿で、もうそれで慣れているのだろう。逆にハキハキしている時に皆が戸惑っていたのが納得が行く。

紫の不安そうだった顔が晴れやかに変わっていく。

海星「紫、それでは一言頼む。」

紫「ええ。」

そう言つて俺に深くお辞儀をした後に、天狗の前へと進む。

紫「天狗の皆様。私の夢に賛同して頂き、ありがとうございますわ。」

妖怪と人。そして神まで。相容れぬ存在とされてきましたが、その幻想すらも幻想へと変えてしまふ。そんな場所を皆さんと一緒に創り上げていきたいと思つておりますわ。

そしてその場所では、天狗の皆さんが妖怪の中でも中心となる存在になる。とわたしは思つております。どうかよろしく。」

そう言つて軽くお辞儀をした。

「パチパチパチパチパチパチ」

割れんばかりの拍手

天狗たち「よく言つた!!」

天狗「よろしく頼むぜ!!」

天狗「もう大船に乗つたつもりで任せとけ!」

天狗たちもあたたかい言葉をかけてくれる。

お互いの顔を立てつつ簡潔に纏まった一言だった。

どちらが権利を握るのか、それを少しづつ刷り込んでいっているような気がして、策士なのか無意識なのか。

どちらにせよ紫はかなりの切れ者だということを再度認識した。

天魔「感謝する、それでは、紫も海星も今日はここで祝いついでに宴会でもしよう。

ゆつくりそれまで休んでくれ。」

海星「それは嬉しいな、ありがとう。」

天魔「せっかくな来てくれたんだ、手ぶらで返すわけには行かない、それでは各自かいさくん！」

宴会の準備に取り掛かる天狗たちは鞍馬館のほうへ飛んでいった。

そして広場には数人が残る。

紫「海星様。ほんとになんと感謝してよいか…。」

そう言つて手を握つてくる。

海星「いや、俺はただ力を貸したただけだ。君の努力の結果だよ。」

そう笑顔でいいながら手をぎゅつと握り返してやる。

紫「あら…私としたことが思わず…。」

そう言つて恥ずかしそうに手を離す。

海星「今回ばかりは危なかつたけどね。」

そう言いながら戦いを振り返る。

結果的に望んだ結果になったが。

文に引き分け、天魔に追い詰められているのだ。

これからも。さらなる精進が必要になるだろうな。

紫「それでも海星様は圧倒的な強さを誇っていました…あの…もし差し支えなければ、貴方のこと色々教えてはくくださいませんか？

知らないことが多すぎて…。」

紫は踏み込んで行けない事のように恐る恐る聞いてくる。

強い妖怪は過去のことはあまり語らない性分らしい。誰しも弱い過去があり、そこに自身の弱点があることを知っているからだ。

海星「ああ、そういえばちゃんと俺の過去について話したことは無かったね。いい機会だ。今度ちゃんと教えるよ。」

そう言つて笑つてみせると。

紫はほつとしたように微笑んだ。

天魔「妾も興味があるのおく。」

そう言つて天魔も話に入ってくる。

海星「ああ、天魔とは積もる話もあるだろうからな。宴会の時に話そう。」  
そう言つて2人は心を躍らせる。

「あ、あれ？わ、わたしは??」

そんな声が聞こえてきたと思ひ振り返ると



草原に椀と文がポツンと立っていた。

## 誤解の婚約

ポツリと立ち尽くす椀

なにやらひどく困惑しているようだが、どうかしたのだろうか。

応援してくれていたの、喜んでくれると思っただが。

いや、こちらから何も言わないのは悪かったか……。改めてお礼を言わなくてはな。

そよそよと揺れる草をサクサクと踏みしめて椀と文の元へ向かう。

海星「椀、ありがとう。君が頑張れと言ってくれたおかげだ。勝てたよ。そしてこうして約束通り無事に君の元へ戻ってこれた。」

素直に思ったことを伝える。

椀「あうう……」なぜか俯いてしまう椀

耳がへによりとしている。

海星「あ、すまない……天狗としては天魔が勝った方が良かったのかもしれないな。」

その通りだ。天狗という種族なのに俺のことを応援する義理はないが……

その思考は椀の手によって遮られた。

椀「い、いえ！あの…やつと来てくれたことがうれしくて…。」

「ほんとに…無事…。」

涙ぐんだ椀が尻尾を振り回しながら両手を握ってくる。

自分のよりも小さな手が包み込んでくる。

慣れていないのか、緊張しているのか椀の手はとても暖かかった。

海星「喜んでくれたみたいでなによりだよ。」

そう言つて頭を撫でる。

この前撫でた時の肌触りが思いのほか良くて再度触りたくなってしまったことは黙つておく。

相変わらずふわふわでこちらも自然と笑顔になつてしまう。

文「おー、おアツいことでして。」

コホンと咳払いをしながら文がこつちを睨んでくる。

なぜ睨まれなくてはならないのか。

鋭い目に思わずどきりとする。

文「何はともあれ、海星さんおめでとうございます。天魔様に吹き飛ばされた時は、さすがに天狗としても肝が冷えましたよ。ほんとに無事でよかったです。」

そう言つて労いの言葉をかけてくれる。

「なんやかんやで、山で道案内をしてくれた最初のほうからずっと心配してくれていたからな。」

海星「ありがとう、文にも感謝しなくてはいけないな。新たな能力の使用方法も身につけたし、今後の課題も見つかったよ。」

そう言つて懐から写真を取り出す。

海星「ほら、恥ずかしい思いはあるが、これ返すよ。」

文に写真を渡す。

椀と俺の写真だ。

文「あ、返していただけですね！」

そう言つて腕を伸ばす。

こいつめ：反省の顔色がない。

受け取る前に一言言わなくてはな。

写真をひよいと手の届かないところに上げながら。

海星「これからはしっかりと確認を撮る事だ。椀も返してしまうが、いいよな？」

椛はこくりと頷く。

しつかりと文にマナーについて念押しをしながら写真を返した。

文「ありがとうございます！これ、我ながらいい写真ですねえ！結婚式の時に飾りま  
すか。」

そう言つて文はニヤリとした顔で椛をおちよくるが…。

椛「も、もう！文先輩！」あわあわした様子で文に怒る。椛が目上の人に対して怒り  
の感情をあらわにするなんて珍しいようだが。

そんな嫌だったのか。

海星「おれと椛？」

嫁入り前の女の子にそんな滅多なこと言うもんじゃないぞ。椛にも迷惑だろうが。  
やれやれという顔をするが…。

椛・文「「え？」」

椛がびつくりしたような顔で、文はキョトンとした顔で同時に固まる。

海星「…どうした？」

思わず聞くと。

文「海星さん、椀と結婚したかったんじゃないんですか??

そのためにあんなに傷だらけになって戦ったのでは…。」

文がなにやら早口で質問してくる。

しかしその質問の内容はとんちんかんで。

椀「あ…。え? かいせ…いさん?」

椀に関しては何やらひどく絶望したような顔でオロオロしている。

何を勘違いしたのか。

海星「そんな話、いつ出たんだ?

俺は人間との共存について天狗に協力してもらおう交渉に來ただけなんだが…。」

少なくとも自分は1度も『結婚』なんて単語は言っていないはずだ。

そもそも出会ってまだ数日の椀との結婚なんて椀が許してくれるわけないのだから。

文「そ、そんな…。確かに話が噛み合わないことが何回かありましたが…。」

…ん。ということは。」

文はなにか真顔で思考を進める。

椀「そんな…勘違いだったなんて…？早とちりしてしまったのでしょうか？  
うう…恥ずかしいです…。それに…それに…。」

ポロリ。

椀「あ…れ？…なんででしょうか？…こんな…こんな…。」

1粒の涙が椀の頬を伝ったと思つたら、堰を切つたように涙が溢れ出す。

海星「お、おい。椀、大丈夫か？」

慌てて親指で涙をぬぐつてやる。

椀「ぐすつ…ぐすつ…。…ううつ。」

それでも尚溢れ出す涙に親指だけではどうすることも出来ずに、そのまま裾の端を当ててやる。

文「…椀。落ち着いてください、海星さんも困つてしまつてますよ。」

文が椀をゆつくりと優しい口調でなだめる。

海星「椀、大丈夫だ。落ち着いて。良ければゆつくり説明してくれ。」

そう優しく空いた手で頭を撫でながら問いかけてやると。

椀「すみません…。ぐすん…。あの海星さんと結婚する、いや、出来ることになつて驚いてたんですけど、それが突然無くなつて…なんか…ううつ…ごめんなさい…自分で

も今の心が全然わかんなくて…。」

そう言って落ち着いてきたが再びポロリと涙を落とす。

海星「そうだよな。椀は試合中も気が気じゃなかっただろうな。

ずっと大変だったよな。でも良かったじゃないか、勘違いだったんだから。」

そう、結論は結婚はしないのだ。

唐突に何処の馬の骨かもわからない奴と結婚しろなんて言われたら泣いてしまうだろう。

そう優しく椀に声をかけてやる。

海星「だから大丈夫だか」

椀「違うんです！」

突然焦ったように大きな声をだす。

椀「ち、違うんですよお…。わかんないんですけど。すごくぼかぼかした気持ちになれたんです!!だから…だから…勘違いで良かったんじゃないんです…。」

そう言つて肩を小さく揺らしながら俯く。

文が耳元に顔を近づけささやく。

文「海星さん。椀は試合中すごく期待の目であなたを見ていたらしいのです。それが



何を意味するか、もうお分かりですよね？」（小声）

文が椀に気づかれないような小声で伝えてくる。だが、もうお分かりですよね？と言われどもだな…

期待…期待…。

一か八かの大勝負に出てみる。

海星「椀。聞いてくれるか？」

そう言つて椀の俯く先の手を握る。

椀「は、はい…。」なにか伝えたい気持ちを受け取つたのか。自分にとって大切な話があることを察したのか、うなだれるのが少し止まった。

海星「椀。まずはありがとう。こんな出会つたばかりの俺のことをそんなに信頼してくれているとは思っていなかった。結婚…。結婚まで考えてくれたのは驚いたが…。椀を惑わせてしまつて、申し訳なかった。落ち込んでいるということは、悲しませてしまつたのだろう。」

椀は涙ぐんだままこちらを見つめる。

自分の言葉を一言一句聞き逃さないように。

海星「栞とはまだ出会って数日だ。お互いのことを知らない。君のような素敵な女性の人生を安易な気持ちで踏みこじる事は出来ない。

だから：君のことをこれから教えてくれないか？」

まあ、踏みこじる気なんてないがな。と笑って付け加える。

栞もすこし俯いたあと、大きくうなづく。

栞「はい！そう言ったからには、海星さんのことたくさん教えてくださいませんか？約束ですよ？」

そう言つて、右手を前に出して握手を求めてくる。

海星「ああ、約束だ。」

そう笑顔で握手に応じる。

ぐいっ。

すこし引つ張られて、

栞「私のこともたくさん知ってくださいね？」

私、こう見えて諦めが悪いんですよ？」

そう涙目ながらも、悪戯っぽい顔を浮かべて小声で呟く。

いつもと違う権に呆気に取られる。

海星「ふふ、すでに新しい一面が見れたようだ。」

文「なーんだ。明日の結婚の大スクープを独占するつもりでしたが、とんでもない勘違いだったんですね。」

まあ、明日の記事には困りませんが。

では、おとなしく自宅に戻り、宴会の準備でもしますか。」

そう言ってこちらをチラリと見てから。文は飛んで行った。

その横顔は何故か嬉しそうで。

天魔「なかなか面白いことになっていたようじゃの〜。ではまた後での。いくぞ権。」

権「はっ！」

そう言って2人も飛び去っていった。

紫と2人残される。

ひと段落して一息つけると思っ

紫「海星様は女性の方に人気でございますね。」

そう言いながらこちらを見てくる。

一息つけそうな話題ではないな。

疲れたので逃げさせてもらおう。

海星「ははは、そんなことはないさ。」そう手をひらひらさせながら歩き出す。

海星「ほら、紫。いくよ」

そう言いながら鞍馬館の方へ歩いていく。

紫「…ええ。そうしましょうか。」

半歩後ろから静々とついて歩き出す。

皆の様々な想いを乗せた風が止むことはなく。

そよそよと背中を撫でていく。

## 妖怪の山の宴会

少し陽が傾き、過ごしやすいと感じられる時間帯になってきた。

かなり大規模な宴会にも関わらず、開始の時間は決まっていなから驚きだ。

(まあ、そもそもこの時代に時計はないのだが。)

文が言うには、妖怪は本能で宴会を始めるから時間を決めるなんて野暮な話だそう  
だ。

そんなセリフを残しながら、友達を呼んでくると山の中腹に向かって飛び立っていっ  
た。

なんとも適当な話である。

そんなことを考えていると、ポツリポツリと人影が増えだす。

あつという間に鞍馬館前の宴会会場はいっぱいになった。

どうやら本能とやらは正確なようだ。

呆れと関心が入りまじりながらも、人影の方へと歩を進める。

.....

会場は4〜6少人数の円になるように囲み合っている

食べ物や酒はテーブル？樹齢千年はありそくな大きな木の切り株にたくさん置いてあり、交流メインだからか、席という概念はなさそうだ。

みんなそれぞれ、話したい奴に話しかけにいくようだな。

さて、どうしたもんか。

文と椀とは話したいよな。

あととは知らない妖怪ともはなしてみたい。

会場を見渡すと、天狗達の他にも鬼や見慣れない他の妖怪達も、ちらほら参加している。

どうやら天狗達は、周辺に住んでいる種族にも声をかけていたようだ。

まずどこにいきうか。と迷っていると。

雷鬼「おーい！海星！」

こちらを見つけると、向こうから雷鬼が笑顔で歩きながら声をかけてくる。

海星「ん？おお、来てたのか！」

まあ鬼は宴会好きそうだし、真っ先に来るだろうな。と思いつつ言葉は飲み込む。

雷鬼「隣いいか？天狗達に呼ばれてな！宴会ときいちやあ行くしかねえ。

そんなことより、大変だった見てえじやねえか。遣いの天狗達から聞いたぞ！」

心配というよりも好奇心に満ちた顔で聞いてくる。

海星「ああ、もちろんだ。

まあな。大変だったなんてもんじゃないぞ。久しぶりに死にかけてよ。」説明も難しいので適当に誤魔化す。

どーせまたあとで嫌でも話すことになるからな。

なんて、そうこうしている間に、天魔もやってきた。

天魔「さー…て。宴会の準備はできたか？」

なんとも威厳のない姿と声量だ。

そんな天魔に対して、さっと酒が注がれていく。そそぐ天狗の緊張した顔がなんとも違和感満載だ。

注ぎ終わった頃、紫がさっと場を鎮める。

そして天魔が宴会の音頭をとる

天魔「ありがと〜と。

さて、お集まりいただき…皆感謝…する。ん…。天狗はこれから…妖怪と人間の共存に…力を貸すことに…なる。

まあ…いつか。しゃべるの疲れちゃった。

楽しくはじめましょ〜!」

なんともダルそうな顔をしながら

宴会の音頭が終わった…のか?

天狗たち「…はっ! 乾杯!!!」

天狗たちも音頭に意表を突かれたようで

一呼吸おくれ乾杯をする。

鬼たちや他の妖怪たち「…おー! 乾杯…!!!」

天狗たちよりさらに一呼吸おくれ

鬼やその他の妖怪たちが乾杯する

やれやれ、あの天狗の長にはみんな振り回されっぱなしだな。

みんなというより、天狗たちは苦勞が絶えないだろう…。

そんな勞いの気持ちで天狗たちを思っていると、

天魔「やく、やつとはなせるねえ〜。」



すたすた…というより、のそのそとこちらに歩いてくる。紫も同じペースで歩きづらそうに歩いてくる。

海生「そ、そうだな…。積もる話があるだろう」

こんなペースのやつと会話したことが無いから難しいな…。

これで強いんだから驚きだ。

こちらに向かいながら、

天魔が雷鬼にも気がついたようで。

天魔「おく、雷鬼も一緒に話したら面白いだろうな。つておもつてたところだ」  
にこにこしながら雷鬼に話しかける。

…チツ。やはり長同士、面識はあるよな。

そうだと思った。

天魔がああ時代の生き残りであることを雷鬼が知らないはずがなかったのだ。

(こいつ…。おれと天魔が戦闘になるようにわざと…)

海星「…雷鬼め、こうなることを知ってやがって俺に事前に言わなかったな？」

ジロリと雷鬼のほうを睨む。

雷鬼「カツカツカ！2人がぶつかるとどうなるのか興味があつてな。なーに、事前に聞かれてないんだ。嘘はついてねえ」

あつげらんとした態度で笑い飛ばす。

天魔「んゝどちらにせよ…出会つたらゝ闘うつもりだつたけどねゝ。まゝあ海星のことは…妾は昔から知っていたから。」

美しく艶のある髪をゆつくりと指で梳かしながらとんでもない発言をする天魔。

海星「なに?…おれは天魔のこと…。知らなかつたぞ。」

太古時代にどこかですれ違っていたかとは思つたが、こんなクセの強い妖怪、出会つていれば忘れるはずがない。

雷鬼「だよなあゝ」

やれやれと言つた顔で頷く。

天魔「えーそうだよえゝ…悲しいなゝあ…天狗という種族を創つたのは…海星なんだよねゝ。」

さらつとんでもない発言をし続ける天魔

海星「…なんだと?からかっているのか?」

話が掴めず、天魔を疑う。

雷鬼「いや、海星が確かに創ってる。俺が保証する。」  
嘘をつかない雷鬼がこう言ったら最後。  
話はずいにとんでもない方向へ向かう。

海星「…説明を求むぞ。身に覚えが…雷鬼と居る時に天狗…」

何かモヤモヤする。あつた気もしなくもない。

雷鬼「昔、強い妖怪はなんだ？つて話をしたじゃないか。そんな時にお前の言ったこと、  
覚えてるか？」

雷鬼が懐かしむような顔で問いかけてくる。

そんなの言われても、何年前の話だつてところだが…  
思い出そうと努力してみる。

……………

side 太古 く過去の記憶く

ふうく疲れた…そう眩く2人、雷鬼と海星だ。

どかつと倒れ込むように同時に座り込む。

周辺は木々が折れたり、抉れたり

並大抵の惨状ではないことを簡単に物語る。

どうやら手合わせをしていたようだ。

雷鬼「だいたい俺のスピードにもついて来るようになったな。どうなってやがる。本当に人か？」

仰向けの状態でつぶやくように俺に話しかける。

海星「いやいや、結局動くのに精一杯で何もできなかったよ。まあ人並みよりも上なことは否定しないがな。」ハハハと軽く笑う

身体強化もだいたいぶ板についてきて、そんなことを言える余裕が出てきた。

雷鬼「ここら一帯の妖怪で俺についてこれるやつなんて居ねーよ。」やれやれと言った顔で話を続ける。

雷鬼「そこらの妖怪も面白い奴がねえからなあ…。人の恐怖とやらも、人と妖怪が遮断されてて関わりがないから強い妖怪が産まれないんだろうなあ…」

雷鬼は寂しそうな顔をする。

たしかに、雷鬼以外の妖怪といえ、会話ができない獣のような奴が多く。知能が無いため、正直言って弱い。

(力の無い人からみると充分恐怖だが)

「鬼」という種族が強すぎるのもあるが

雷鬼にとっては張り合いが無いだろう。

海星「まあ鬼は強いからなあ…。」

現代においても語り継がれる種族だからなあ。ボソツとつぶやく。

雷鬼「なあ、ふと思つたんだが、何故お前は鬼を知っている？そして強さの比較も出来ると言うことは、他の妖怪も知っているのか？」

雷鬼は普段適当な会話しかしないが、

たまに、なかなか痛いところをついてくる。

海星「ん…？おつ…おお…知ってるもんは知ってるんだよ。他の妖怪の知識もそこそこにはある。」本当は前世の記憶だが、まあ誤魔化す。

雷鬼「ほー！海星は物知りだしな！」

雷鬼はうんうんと頷く。真つ直ぐな瞳が心苦しい。

雷鬼「ちなみに。鬼と同じくらい強い種族はいるのか？あつたことがあるのか？教えしてくれよ。」

わくわくとそんな目をしながら、ガバツと立ち上がり聞いてくる。

海星「なるほどなー、鬼と同じくらいか…。」想像したこともなかった。

うんうんと頭をかしげた後。

海星「天狗かなあ…。」

同じくらい有名だしな。まあ他にも吸血鬼とかも思い浮かんだが、和の雰囲気鬼の

ライバルとしては天狗のほうが的確だろう。

雷鬼「天狗？どんな奴だ？なぜ強いと思う？」

突如として聞かされた好敵手の名前に興味が湧いたようだ。

海星「風を操ったりする妖怪だ。鳥から想像されることが多い。このご時世に自在に空を飛び回り攻撃できる。これほど厄介な相手はいないだろう？」

雷鬼も俺も地面を駆けて動くタイプだからな。

雷鬼「たしかな…。厄介そうだ。」

海星「しかも、この時代にもし天狗産まれたらやばそうだな…。」

現代の天狗はカラスなどだが。

…：ガサガサ!!

そんなことを話していると遠くの草むらが揺れる。

グギヤアアア!!!

恐竜のようなフォルムをした羽毛に覆われた鳥が、大きなトンボを追いかけている。

海星「鳥のペースがあれだもんなあ…。」

思わず馬鹿馬鹿しくなって笑ってしまう。

恐竜が闊歩すること時代。  
カラスなんて比ではなく…。

海星「全ての鳥の祖先…始祖鳥…。

そんな化け物みたいな鳥の天狗がいたら…。」

思わず想像しただけで悲惨な結果が見えた。

雷鬼「始祖鳥？なんだそれ？

なんだか楽しそうだな。」

へへつと笑う雷鬼。

海星「いや、楽しいもんか。久しぶりに心の底から恐怖したよ。」

始祖鳥が絶滅しなかった世界。そんな想像ができないのだ。

ブルつと震える。

雷鬼「ほお…海星にここまで言わせるとは…。楽しみだな…。手合わせ願いたいもんだ。」

不敵な笑みを浮かべる雷鬼、こいつは闘うことしか考えてないんだな。

海星「やれやれ、戦闘狂には付き合ってらんないよ…。つてか、もうこんな時間か。

ちよつと考えを落ち着きたいから今日は帰るぞ。」

始祖鳥なんて言葉がまだ存在しない世界。

知るはずもない知識をこれ以上話すとボロが出そうだ。この辺でお暇させてもらおう。

雷鬼「そうか！またな！」

そんな考えも無意味なように、あっけらかんと俺を送り出す雷鬼

海星「ああ、またな！」

またちよつと罪悪感を覚えつつ帰路に着く。

海星「久しぶりに1人の帰り道が怖いな」

そう呟きながら。

side???

???'ギアアアアアアア!!」

1匹の始祖鳥が銀色と黒色の光に包まれる。

誰かの恐怖が妖怪を作り出した瞬間だった。

.....

side海星　　く現代　妖怪の山く

海星「確かに会話はしたが……。」



思い出した。だがそれがきっかけになるとは。

紫（只者ではないとは思っていましたが…想像のスケールを超えるお話でした…。）

知りもしない太古の世界の話。ゴクリと唾を飲み込む紫

天魔「そくである。妾の最初の記憶は…。「コノオトコヲ恐怖サセロ」じゃからな。」

ぐりんと梟のようにこちらを振り向く。

ゾクつとした視線が心臓に突き刺さる。

いや、怖すぎだろ。後ろの下っ端天狗がひっくり返ったぞ。

この天魔の掴めなさは異常だ。

鋭いのかボケているのか全く解らない。

天魔「な〜んてな〜。」

じゃが妾は今日、最古の世界で産まれた理由を達成したのだ。素晴らしき日じゃな〜。」

ケラケラと笑う。

ここまでくると執念だ…。

妖怪というものの恐ろしさを再度認識する。

天魔「あとは…この命…創り出した貴様の為に使っても良いのじゃぞ？」  
能力を使い聞き取りやすい声で。

ニヤリと微笑む。

海星「始祖鳥の天狗…。俺が心から恐怖した存在…。」

あの文明を滅ぼした爆弾から単独で逃げるのなんて容易いだろう。

海星「お前は天狗の頂点だ。天狗達を導く為にこれからも生きてくれればいい。」  
俺の為に使うなんて、そんなおこがましいお願いはできないしな。

天魔「…：わくわくくりくしました。」

なんとも間の抜けた返事をする。

拗ねている…？のか？

雷鬼「あーあ…」ぼそりとつぶやく。

海星に人の心を読み取る力を与えてくれと願う雷鬼だった。

文「あややや…！すごいメンツですねえ海星さん。」

射命丸文が向こうから飛んでくる。

妖怪の山のあちらこちらでワイワイと笑い声が響く。  
宴会はまだまだ続きそうだ。

## 発明家の盟友との交流

天魔「おゝゝ文かゝ今日はよくやつてくれたゝ。」  
だらけた表情で酒を片手に手を振る。

文「あやややゝゝ天魔様。ありがたいお言葉です。  
ですがゝゝこれは出直した方が良いでしょうか？」  
文の顔が引き攣っている。

多分だが、そこらの国の軍事力を遥かに凌駕するテーブルになってしまっているだろ  
う。

現世でいう、大統領クラスの集まりゝ？  
それは大袈裟か。

まあ文が遠慮の声を出すのも無理はないだろう。  
??? 「そ、そうだねゝゝ後にしようよゝゝ。ありがとう文。」

文の服の裾を引っ張りながら水色の服を着た女の子が小さく声を上げる。

初めて見る妖怪だ。怯えているようだが…。

確かに自分が一般の妖怪だとしたら、「こんな押し潰されそうな席」には近づかないだろう。

ハツとここで我に帰る。

あぶないあぶない…。今回は交友関係を広げる為に参加していると云っても過言ではない。

その為にまだ酒もあまり飲んでないのだ。

海星「紫。あとは任せるぞ？俺と紫で仕事を分けよう。おれは広げる。お前はまとめてくれ。」

紫は賢いからこれだけでわかってくれるはずだが。

紫「わかりましたわ。お願い致します。」

コクリと頷く。

考えは一緒だったようだ。

俺は人脈の形成。

紫は人との共存に向けて賛同してくれそうな妖怪へのアフターフォロー。それぞれある意味で戦いがはじまった。

海星「文、こちらから会いに行こうとしていたところだ。遅くなつてすまない。」

まあ、完全に天魔の話のせいで他のテーブルに行くのを忘れていたのはここだけの話にしておこう。

文「いえいえ海星さん。いいのですか？

あちらの最強集団から抜けてきてしまつて。」

じとーつという目で疑いの声。

海星「まあまあ、そうおちよくるな。」

実際会いに行こうと思つてたのは確かだ。

文「わかりました！このにとりちゃんに免じて許しましょう！」

と、突然大きな声で青色の女の子をグイッと目の前にひっぱってくる。

??? 「ひゅい!？」

突然のことで目をまんまるにして、不思議な声を出して固まる女の子。

海星「…!?!?…お、おい文。」突然のことすぎてこっちも対応に困ってしまう。

文「この子がぜひあなたと話したいと!つくづく罪な男ですねぇ」  
先ほどのジトつとした目をもう一度むけてくる。

海星「あ…ああ…。それは嬉しいんだが。

にとり?と言ったか?」

見知らぬ人と話したいのにはそれなりの理由があるはずだ。

??? 「…:…:ぜえぜえ…:」

そう、第一印象がおかしなことになってしまったけど。紹介ありがとうね、文。  
私は河城にとり。よろしくね!盟友!」

赤くなった顔を押しえてから、  
にぱーつと満面の笑みに切り替え元気よく挨拶してくる。

海星「盟友?…ああ、おれは東方海星だ。

よろしくな!にとり。」

久しぶりに意思疎通が最初から取れる妖怪に会えた気がする…。

しみじみとそんなことを思う海星であった。

海星「俺のことはどこかで知っていたのか？」

さっそくわざわざ妖怪の方から会いにくるなんて……。願ったり叶ったりなのだが。

にとり「うん！この文から話を聞いてね！ぜーったい会って直接話してみたかったんだ!!」

目をキラキラさせながらこちらを見つめてくる。

とても年相応な女の子でかわいい。

しかし、にとりが何の妖怪なのか未だにわからない。

海星「ほー、話を聞く：：なんだろうか。

にとりのお眼鏡にかなう話があったのかな？」

興味を持たれているのは間違いないが、身に覚えがない。

にとり「びつくりしたよー！私の発明をすでに知っていたんだもん!!」

にとりは興奮した様子で、俺の手をとる。そのままぶんぶんと上下に振り回される。

海星「お、おい……！」



ん：発明……？文からの説明。」

今日の出来事を振り返る。

全てのことの発端。権の写真を取り返す羽目になった……？

海星「カメラか！あれは、にとりが作ったのか!?」

確かに。新聞記者がカメラを持っているのはおかしくは無い。

しかし、時計の無いこの時代にカメラがあると言うのは違和感があった。

だがそんな発明も技術力があつたとは……。

そんなことを考えていると。

さらに手にぎゅつと力を込められる。

にとり「そーなんだよ！そーなんだよ！

私の最高傑作！カメラ！

盟友は、説明が無いのに用途を言い当てたそうじゃないか！

なんで知ってるのか気になってさ！」

にとり「……！」

ここで手を強く握っていた事に気付いたのか

パツと手を離す。

にとり「ごご、ごめんよ！つい興奮しちゃって…」

手を後ろに組みもじもじと

緑の鞆をいじるにとり。

海星「良いんだ。気にしないでくれ。」

おれもあんなに進んだ技術力は初めて見たからびつくりしてな。ぜひ製造者に会いたいと思つていたところだ。あれは…あのカメラは、にとりが1から考えたのか…？」

俺自身使つた事あるものはすんなりと作り出せる。

原理を理解せずとも、能力でそこは補っているのだ…。

しかし…この河童のにとりは…0から生み出したというのか。

カメラという機械を…仕組みや原理を考えて…？

にとり「まあね！世界の一瞬を切り取れる機械があつたら面白いと思つてね！つくつてみたんだ！新聞も文字だけじゃなくて！実際の景色と一緒に見てもらえればわかりやすいよね！」ふふん！と言つたドヤ顔で説明するが…。すごすぎる…。

にとり「…あれ？」

海星「…！天才だ!!」

見つけた！この子は生活の水準を大幅に変えることになるだろう。

カメラが作れると言うことは、ある程度のもので作ることができるだろう。

そこに俺の現代の知識が加われれば……！

なんと言うことだ、この技術力。

自分一人で引つ張らなくてはいけないと思っていたが……こんな早々に解決するとは……

しかし河童だと？

緑色の身体で水掻きがあつて頭にお皿のイメージがある妖怪だったが……

にとり「あ……あの……！盟友……？さっきの仕返しかい？」

少し顔を赤らめて下を向く。

海星「……？……！すまん！」ハツとする。

思わず手を握つてしまったようだ。

にとり「私たち似たもの同士なのかもね！」

にぱーつと明るい顔で握りしめてくる

いい奴で助かった。

海星「…そうだな！そこでだにとり。こーゆーものは作れるか？」  
あるものの概要を伝える。

にとり「わー！そんな発想があつたなんて…。さすが盟友…！  
でもそんな材料…。」

すぐに無理とは言わないあたり、こいつは本物の発明家だ。

そして瞬時にこの発明の問題点に気づく。  
能力によるものだろうか。

海星「材料に関しては問題ない。」

そう言いながら、手を伸ばす。

ジャキジャキ…シャキン。

水晶を加工して出す。

それぞれ特色が違う。電気を通しやすいもの。熱に強いもの。

にとり「わああああ！これは！！夢みたい！！なんでも作れそうだよ！」

目をキラキラさせながら水晶を手取る。

海星「切ったり加工したい時は声をかけてくれ。」

水晶といえど、力が込められているため、ちよつとやそつとのハンマーでは割れない。そこがこの能力のちよつとしたネックだ。

にとり「ふふん、このにとりちゃんに不可能はない！」不敵な笑みを残し、水晶を一つ石の上に置く。

なにをするつもりなのだろうか。

にとり「水を操る程度の能力……！」

スパツ!!水のカタターを発生させ、真四角にカットした。

海星「水を操る程度の能力だと……！」

知能をあげたり、発明する能力ではなく

単純な能力。それ故に驚いた。

やはり即座に高圧なカタターを作り出すその頭の回転の速さ。

にとりの素のIQが高いのだろう。

海星「すごいな……！これからの発明が楽しみだな！にとり！」

全力でサポートすることを心に誓った。

漫画で言うところのDr・STONEだな。

しかも材料が無条件で揃う世界線と思っている。

無敵だ。

にとり「うん！本当に会えて良かったよー！」

ニコニコしながら、水晶を見て頭を抱える。

当初のもしもしした、にとりはもうどこにもいなかった。

文「…まったく…。私は放置ですか…。」

まあにとりが満足したならいいんですけどね！」

なぜか頬を膨らませてこっちを見る文

どうしたのだろうか。

海星「文もありがとう。文に最初に出会えて良かったよ。」

こうも顔が広いと言うのは、俺にとってありがたいことこの上ない。

一人で河童のコミュニティに入っていくのに、かなり時間がかかっただろう。

しっかりと文の目を見て感謝を伝える。

文「は…はあ?! なん…! そんな! …カートツ?!」

理由はわからないが、顔を真っ赤にして向こうへ飛んでいった。カラスの天狗らしいといえは…怒るだろうからやめておこう。

そんな冗談を考えていると…

グイッ

重心が後ろに引っ張られる。

まあ背後から近づく気配に気付かぬ俺ではないが。

海星「おー、どうした? 椀。」

後ろを振り向かなくてもわかる。

裾を引っ張る椀に声をかける。

椀「…最初に会ったのは…ワタシです!」

ほつぺたを膨らませた椀が尻尾を立ててこちらを睨んでいた。